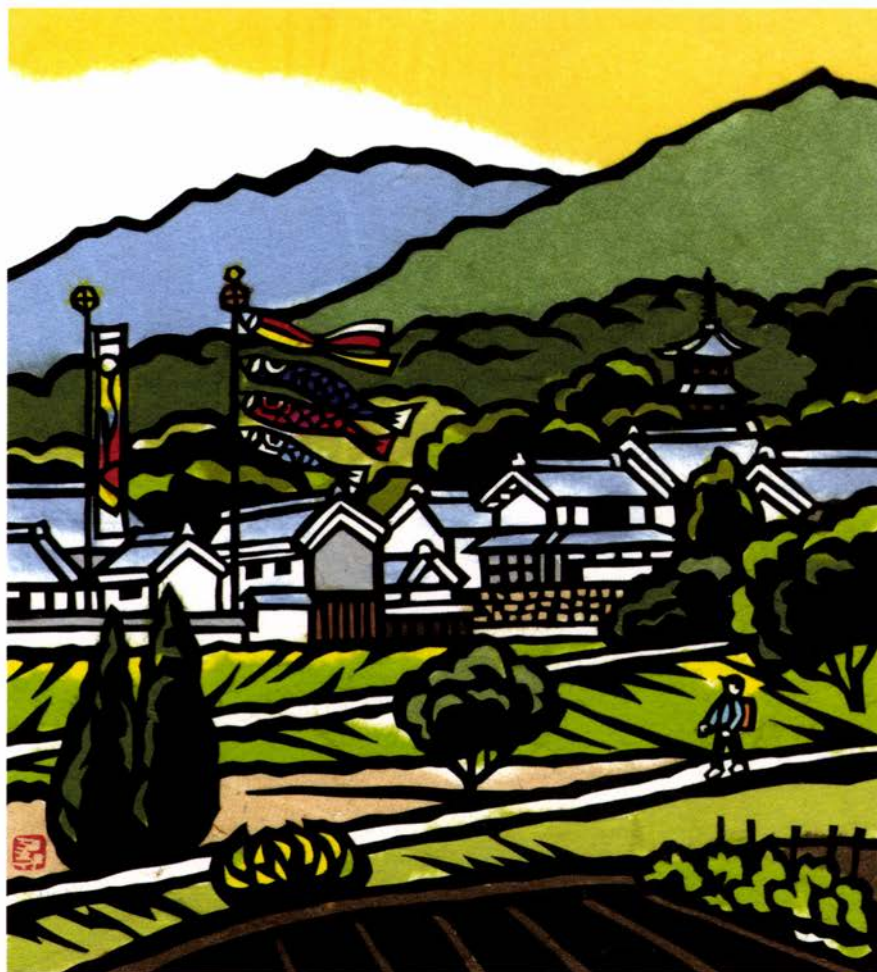


川柳塔

昭和四十一年一月九日（郵便物認可）
平成二十四年五月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通卷一〇二〇号



日川協加盟

No. 1020

第1回 春の川柳塔まつり誌上大会

五月号

暑中見舞広告募集

本誌七月号に掲載する暑中見舞広告を募集いたします。同人・誌友ならびに各句会（川柳会）のアピール及び誌上名刺交換の場として、積極的にご利用をお願い申し上げます。

★個人 一口 1/9頁 二、〇〇〇円

1/6頁 三、〇〇〇円

（巻末の台紙に原稿を貼付または記入してお申込み下さい。）

★団体 次の四種といたします。

① 1/3頁 六、〇〇〇円

② 1/2頁 九、〇〇〇円

③ 2/3頁 二、〇〇〇円

④ 1頁 一八、〇〇〇円

▼原稿締切 五月二〇日

川柳塔社

「川柳雑誌」「川柳塔」通巻一〇〇〇号記念出版

『麻生路郎読本』



麻生路郎
読本

A5版

514頁

頒価 三〇〇〇円

（郵送料共）

目次

麻生路郎アルバム

麻生路郎作品「旅人」「旅人その後の作品」

麻生路郎文集・麻生路郎語録

麻生路郎物語（東野大八）

麻生路郎の人と作品

麻生路郎作品「福寿草」

麻生路郎著作解題・麻生路郎年譜

麻生路郎・葎乃作品索引

ご希望の方は左記の事務所までお申し込みください。

〒543-0052 大阪市天王寺区大道1丁目14番17号

電話 06-6779-3490 花野ビル201号

川柳塔社

振替 〇〇九八〇一四二九八四七九番

一枚の色紙から

小島 蘭 幸

こぼれては咲きこぼれては咲き朝顔の

梅 志

最近、どこの大会へ行っても色紙や短冊に作品を所望する姿を見かけなくなりました。私の師、故・山内静水は大会参加の折には、いつも矢立を持参されていました。

昭和四十二年七月九日、大阪の自安寺で川柳塔本社路郎忌句会が開催されました。川柳塔社同人になったばかりの私にとって路郎忌句会は実に莊厳であったのを覚えています。

冒頭の作品は喜楽別館で晩餐会の始まる直前に、今は亡き後藤梅志さんに書いて頂いたものです。恐る恐る色紙を差し出した私に、梅志さんはニツコリ笑って凄く速さでアツという間に揮毫されました。そばで見ておられた大阪の柳人が「蘭幸さん、いい人を書いて貰って良かったですね、梅志さんは凄

んですよ、一字一字は実に下手なだけど額に入られて少し離れて見ると素晴らしいんです」と言われた事を、懐かしく思い出します。

当時、梅志さんは創刊号から川柳塔の秀句鑑賞を担当されていて、素晴らしい鑑賞で多くの人に支持されていました。昭和四十五年に『秀句鑑賞と梅志句集』が発刊されるのですがその動機は、熱烈なファンの一人的手紙に心動かされてということでした。

あとがきの中で梅志さんは「私は昭和四十年十月、川柳塔が創刊すると同時に、雑誌へ秀句鑑賞という欄を設けるから担当してくれと委嘱された。私は川柳塔社では年長者でもあり、さしもの路郎師も、志半ばにして長逝された観もあったので、これを天命と観じて、全力を挙げて答うることに決意した。そこで要諦として自戒的にいくつかの戒律を作った。

◎路郎川柳であること。

◎新鮮味があること。

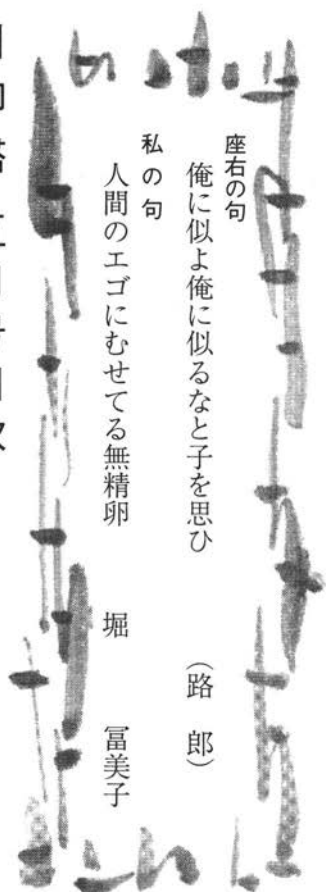
◎世の中の悪口を言わぬこと。

◎理屈を言わぬこと。誉め過ぎぬこと。

◎マンネリズムにならぬこと。

◎もの知りぶらぬこと。

大体このようなものだ。がこれは自分の修養になることでもあると思った」と書いておられます。



座右の句

俺に似よ俺に似るなと子を思ひ

(路郎)

私の句

人間のエゴにむせてる無精卵

堀

富美子

川柳塔 五月号 目次

題字・中島生々庵／表紙きり絵・前田 尋「当麻」

■巻頭言 一枚の色紙から

音のない足あと

小島 蘭 幸……(1)

川柳塔(同人吟)

遠山 可住……(2)

川柳塔の川柳讃歌⁽⁸⁹⁾

小島 蘭 幸 選……(4)

自選集

木津川 計……(47)

温故知新

川上大輪 選……(51)

水煙抄

麻生路郎 選……(52)

新川柳鑑賞⁽³⁾

中島生々庵 句抄……(72)

中島生々庵 句抄

新川柳鑑賞⁽³⁾

誹風柳多留——一篇研究⁸¹

誹風柳多留——一篇研究⁸¹

愛染帖

愛染帖

檸檬抄「むめく」

檸檬抄「むめく」

英語 de Senryu⁽⁵⁾

英語 de Senryu⁽⁵⁾

富士慕情

富士慕情

吉村侑久代……(83)

新家完司 選……(76)

池 森子共 選……(80)

吉村侑久代……(83)

音のない足あと

遠山 可住

年をとると昔を語りたくなるものらしい。時は戦時中、十八歳の三男坊は海軍の軍属として、中国の南の島「海南島」へ着任した。

島といってもちょうど九州くらいの大ささで、中国唯一の亜熱帯、年中上半身裸で半黒人の暮しである。産物として良質の鉄鉱石の産地で、開戦と同時にいち早く日本軍が占領し、戦略物資として、博多へ運んだ拠点の島である。

ここで日本語小学校を開校し、現地の子どもたちに日本語を普及する先生が、私の青春第一歩の任務である。まだ治安が悪く、島の山岳地帯には共産軍が隠れ、銃声が続く中で軍の兵舎に配属され、ここで軍隊と共に生活し、小学校まで百メートル程を往復する日々であった。

日本語小学校で日本人は私一人だから私が校長、他は中国人の先生、一年生から五年生まで組分けして私の受け持ちは日本語、体操唱歌を一人で受け持つので私が一番忙しい。唱歌はピアノもオルガンもないので専ら口伝、もちろん日本の

「築く」……小寺花峯選……(84)

「燕」……島ひかる選……(84)

「いきなり」……宮尾みのり選……(85)

「形」……鈴木公弘……(86)

「秀句鑑賞」……中居善信……(88)

「水煙抄」……夏目一粋……(90)

「水煙抄」……池澤大鯨……(91)

「水煙抄」……追悼 田村邦昭さん……(92)

「水煙抄」……第一回 春の川柳塔まつり誌上大会……(92)

「水煙抄」……■エッセー ティータイム、ことば選び その一……(92)

「水煙抄」……せんりゅう飛行船 ⑰……(114)

「水煙抄」……津軽発おもしろ景色 ⑨……(115)

「水煙抄」……本所深川を歩く ④……(116)

「水煙抄」……四月本社句会……(117)

「水煙抄」……各地柳壇(佳句地十選/石谷美恵子)……(118)

「水煙抄」……五月各地句会案内……(122)

「水煙抄」……柳界展望……(136)

「水煙抄」……■編集後記(ひとこと/成田公二)……(138)

「水煙抄」……朱夏・勝弘……(140)

「水煙抄」……座右の句……(140)

「水煙抄」……明日のため渡る吊橋揺れている……(140)

「水煙抄」……私の句……(140)

仏間の灯母の笑み来る香をたく 岩本雅代

(重治)

青春は南の島に置いて老い 可住

唱歌である。私は中国語を話せないし、中国の先生も子どもたちも日本語は話せない。幸い漢字を書けば少し通じるものの、想像してみて下さい。これが毎日続くのである。兵舎での軍隊生活はほとんど会話なし、それでも馴れて行けるのが戦争という時代への生活の順応なのだろう。日本へ帰って一番困ったのは、変な話だが誰とでもすらすら話し合えることだった。小学校で一時間かかったことがものの一分もかからず話せることでした。会議で皆が思い思いに質問したり提案する言葉が私には出てこないのだ。会話のない世界に住み馴れた青春のスランプに専ら無口と聞き役になっていた。一日が終るとそれらを文章として、自分の考えや思いを書きとめる方向へ向かう、そしてその先に「川柳」があったように思えてくる。川柳という短い表現と、口下手の表現とがびつたり合う面白さを、実感する。裏返せば川柳によつて私は生かされているという想いである。川柳雑誌と川柳塔から私の好きな句を拾い集めた大学ノート二冊の「名句集」が私の宝。私の詩情はこのノートから生まれるのです。



小島蘭幸選

尼崎市 長浜美籠

ウーロン茶雰囲気に酔い時に酔い
歯が疼くまだ生きる余地ありそうだ
時間差で来る嬉しさと淋しさと
タンゴから愛にスイングする二人
半音あげ過した今日にある疲れ
いい一日でしたと閉じるお仏壇

堺市 志田千代

オニギリの一個をもらう列にいる
形のないものを遺せたらと思う
古文書に金釘流はみつからぬ
一声を聞いたら分かる人となり
キャットフード私の好きな猫マンマ
履歴書と恋文はていねいに書く

鳥取市 岸本宏章

わが町の高台鍵が掛けてある
シャボン玉も私も高所恐怖症
手渡しがいいなあ自動改札機

チームには叱られ役がきつという
竹林を宝の山にしたくなる

がれき処理済まねば春はまだ来ない

和歌山市 木本朱夏

春はまだ ひもじい指を擦り合わせる

まぼろしの墓碑累累と海を向く

むかしここに海があったと書き残す

2時46分わたしはここで祈ります

一本松は希望で神の慈悲だろう

墜ちながら地獄を覗く寒椿

弘前市 高瀬霜石

わたくしがひと皮剥ける水たまり

天災はジャブ人災はボディーブロー

鍵探しケータイ探し遅刻する

お肌ツルツル月に一度はひとを喰う

並んだ並んだ並んだエゴの列

わくわくとデートしよんばりと帰宅

藤井寺市 太 田 扶美代

バウムクーヘンこのまま生きていいですか
忘れてしまお氷の溶ける音がする

あやまれば許してくれたお月さま
端っこを好んで歩くマイペース
ふと見れば孫十八歳のもの想い
神様もこの頃情緒不安定

松山市 高 橋 宏 臣

定命よ並ぶドミノの先の先
も独りの僕が背を押す背をなでる
解説をされて寡黙になる絵画

ささくれの手からこぼれる咳ひとつ
春の夢いつも同じ人に会う
涸河渡る列車鋼の響きあり

紀の川市 宇 野 幹 子

白旗をあげて女は先をよむ
草の実のようにライバルまといつく
消耗品企業戦士の柩出る

肩パッド外せばもつと楽になる
内ポケットから奥の手を出してくる
老いるとは五体反旗をひるがえす

大阪市 谷 口 義

掻い摘んだ話を掻い摘んで聞く
バス停に幼なじみと立っている
ワイシャツの白さと給料明細書

昼寝ならどんな枕でもねれる
極楽を見て来た蕾かも知れず
ドラマでは必ず葱を買ってくる

枚方市 海老池 洋

何よりのラッキー人間に生まれ
心の鏡しかと磨いて身を正す
考える時間をもらうひとり旅
お早うと通天閣の灯が点る

開き直れば出口も見えてくる迷路
雪の下春のプランをねるいのち

堺市 奥 時 雄

甥たちに仕切られている三回忌
酒量にも世代交代知るお通夜
お忍びの社長のご機嫌を損ね
お局に笑い転げた頃もあり
南国の果実あげたいイヌイット
命がけの一日終えるイヌイット

堺市 加 島 由 一

ころろ満ちブラネタリウムから戻る
なれ合いにブレーキ掛けたのは維新
本気度を試す男ヘストレート
誕生日夫は愛を試される
欲しいものない百までは生きますよ
胃に自信賞味期限は気にしない

寢屋川市 籠 島 恵 子

正論を吐いて世間を甘くみる
昨日まで温室だった桃の花
それからと続いたのがずれてくる
女系家族まったりとした刻を持つ
妹の方がくわしい家の事
残された時間を猿に食べられる

犬山市 金 子 美千代

紙雛を飾り一気に春の部屋
またいつか世話になるかも折れておく
バーゲンだちよつと冒険するおしゃれ
お氣持を越えないほどにするお札
雪折れの水仙やつと弱音吐き
黙祷へ心はひとつ起立する

河内長野市 山 岡 富美子

使命感あつて燃焼するいのち
饅頭屋が消えて寂しくなった町
パスワード思いだせない五月闇
春炬燵蹴つてあしたへ羽繕い
錯覚を春の鏡に揶揄される
春の城さくらに児等に大道芸

羽曳野市 安芸田 泰 子

雪止まず小さい義理を一つ欠く
桃の花いつしか夫の齡を越え
夢でしか会えない人がまた一人

野辺送り味方が一人消えてゆく
流れには逆らいきれぬ余命表
ネクタイを解けば本音がこぼれ落ち

堺市 荻 野 像 山

じっくりと余寒楽しむように梅
復旧復興声ほどことは進まない
年金は妻が握れば大丈夫
記憶ない寝言に文句言われても
花粉症春は律儀にやってくる
花見酒飲むのに似合う紙コップ

大洲市 中 居 善 信

こんなにも寂しいものか木魚なる
不謹慎だが戦後とダブル事故のあと
明日の飯それは心配していない
喜寿過ぎて薄目を開けて生きている
終戦を生きた日本人だから
布袋さんが僕に似ているから好きだ

岸和田市 岩 佐 ダン吉

握り返す母さんまだあるパワ
多数派にやがてはなろう青い空
平均の二字に安住してないか
出直そう五体張る朝となる
鈴の鳴る方に私は行きません
腕試しいつでも来いと言っている

松江市 石橋 芳山

脇腹を突いて神はあかந்தれ
大衆をはなれ国取り物語

優しさの中にいっぱい混ざる嘘

上塗りを重ねて詰まらなくしている

青筋を立てて怒りは直立す

失った所が悪臭を放つ

出雲市 竹治 ちかし

飽食も餓死のニュースも聞く日本

何が何 ベクレル グレイ シーベルト

幸せが女坐りで傍に居る

見る人の色に染まっている墨絵

御破算で開き直った無の力

体温を感じる距離に居る二人

米子市 吉田 陽子

シヨウウィンドー生活感のない眺め

同感句思わずウフフウフフフ

春だから全部許してしまえそう

黒ずくめ今日は淑女になります

晩学の答指折りメモにする

ツイッター私一人の日記帳

松山市 古手川 光

鈍感です ところとしてすみません

朝ドラで大阪のおばちゃんが喝

レディ・ガガさん私が元祖です徹子

いい日本語守って欲しいNHK

先ず除染霞が関に永田町

少子化へ私学も食うか食われるか

西宮市 吉井 菜々子

鉛色のわたしへレモン絞ってる

シャンブーのバラの香りと旅してる

環状線なんびりしてもいいですか

坂道と口遊んでる応援歌

春色の旅のブランがメールから

ワイシャツとひとり踊ってみるタンゴ

藤井寺市 鈴木 いさお

旅先でひよいと出会ってからずっと

成し遂げて初めて見せた男泣き

プライドを捨てろと軽く言うけれど

スランプに肩の力をぬいてみる

ブルースで出会いワルツでさようなら

句作りの合い間合い間に鉄をふる

松山市 宮尾 みのり

不退転の決意は表には出さず

ピピピッとさわぐ若さはまだ残り

アキレス腱へいいこいこをしてあげる

病院のベッド人間修業する

ささやかな自我どんぐりが輪を抜ける

気を回しすぎてハンドル甘くなる

富田林市 中井アキ

手をつなぎ姉妹ゆっくり老いてゆく
優しい嘘だ 虹色に染めてある
軸足がぶれない様に読むマンガ
早世の父が恋しい肩車
きつと愛わずかに髪がふえてくる
人恋いの熱い鏡をもて余す

和歌山市 福井菜摘

どきどきが次第にうすれゆく挽歌
分相応安近短の旅を組む

道しるべ手垢まみれの母の辞書

原点に戻るやる気と戸惑いと

水瓶を満たしてるのは父母の汗

シャワー全開やがて一人の小宇宙

堺市 宮本かりん

春風に勢い付いてきた歩幅

不器用だがどうにかなるも浮世だな

薬のむまだまだ未練あるこの世

すったもんだもいつも通りの割烹着

パン食へコーヒだけは入れにくる

この辺で今日はおわりとひとり言

羽曳野市 宇都宮ちづる

ガラス越し春を感じて日向ぼこ

良い歳を重ねた顔の同窓会

感動を友は絵にして私は句

娘が嫁ぎゆるり雛壇片付ける
女子会と称して騒ぐ六十路会
あの笑顔きつと懐かしい

和歌山市 坂部紀久子

ありそうで矢張りなかった休眠預金
早朝の電話声まだ起きてない
温度差へスイッチの捻子錆びてくる
菜の花の少し甘えた曲り方
変わり映えしない一日目玉焼き
離れたり寄り添ったりの万華鏡

橿原市 安土理恵

この鬼のせいで行方が決まらない
鬼へお願いヤサシクシナイデヨ
気まぐれの旅の三日を食べ尽す
分けあつたはずの痛みは痛いまま
涙だと思ふ溢れているグラス
肉筆の亡父の一喝生きている

吹田市 山本希久子

月も亡母も覗いてくれる夜の窓
思い切り燃え静かに消える火になろう
清貧に生きよと上げる消費税
余命数えて大それたこと望まない
風みどり草も木も花も多弁
犬だってそろそろ老眼鏡がいる

枚方市 伊達郁夫

春帽子女は風になつていく
幸せに過した振りで生きてゐる
古新聞過去を悲しいほど喋る
諦めと言う悲しみの置きどころ
自画像に母の笑窪と父の皺
私をそんな目で見るのはやめなさい

大阪市 川端一步

震災後と戦後のちがいが何だろう
放射能教えてほしいいろはから
瓦礫から原発ノ一へ辿り着く
友だちから恋人になり五七五
女へん何をつけても色っぽい
七転びぐらいで仕事見つからぬ

河内長野市 村上直樹

しぶとさよ芋で鍛えた土性骨
ブレーキを踏みつつ今日も酒二合
犬掻きで世の荒波もマイペース
いずれ効く日もあるだろう親の喝
やつかいな花粉に黄砂放射能
自分史の続編は夢黄金色

吹田市 太田昭

取りあえず鎮くだけで義理果たし
全自動の妻をオーバーホールする
補聴器が春の噂を持って来る

赤ちようちんで同窓と言う酌を受け
沈黙に負けて寡黙を押し通す
転び癖に反抗をして蹴躓く

豊中市 水野黒兎

一日を晴れに仕上げる花鉢
スイッチの作動が遅い春の朝
下積みに耐えて端役のいぶし銀
春の色ふわふわ溢れひな祭り
真夜中にいつかわが身の救急車
みつ蜂のスイッチオンに花開く

三田市 久保田千代

着服れて強い明治の亡母想う
亡母よりも生きてみたいと欲を出す
習慣が身につき今朝の小豆粥
知らぬ間にいかなご並び春はそこ
パソコンへ負けず嫌いの手を染める
ショッキングなニュースに慣れていく恐さ

大阪市 井丸昌紀

小言より涙がずっと胸に沁む
泣くまいと決めても滲む街の灯よ
どことなく憎めぬ亡父の石頭
塩ばらばら振られて僕は皿の上
毒入りと書いてあるので嘗めてみた
輪の中にいると僕だけ思ってた

犬山市 関 本 かつ子

うとうとが始まる春の文机
被災児の目の輝きにある未来

うな井も上に再検異常なし

愛想ないメールに絵文字だけ笑い
出て来れる人はしあわせクラス会

百均の傘有難いにか雨

和歌山市 玉 置 当 代

生かされた命を粗末にはできぬ

寒くても蕾は春の準備中

凍てついた手足を伸ばすくすり風呂

働いた母を支えた鯨尺

待ち合わせの時間気になる花時計

啓蟄に虫もわたしも深呼吸

八尾市 村 上 ミツ子

ペランダのバケツも凍る春隣

虫たちもびっくり時ならぬ風雨

怒りはいつも愚かで悔恨に終わる

金の有る苦勞もしてみたいものだ

安売りのスーバーはしごする財布

今年も咲いた母の形見のすみれ

倉吉市 山 中 康 子

勿体ない昔おもえば寝ておれぬ

顔色を見抜く家族にかこまれる

バイバイと先には逝けぬ姉百寿

全うに生きた主は仏さま

捨てられぬ病氣なだめてやがて春

真白をよごしたくない娘の瞳

鳥取県 石 谷 美恵子

食べるのがやつと贅沢言いません

タクシーは人間ドラマ飽きている

忘れたいことを他人さまよく覚え

考えておくと言われてあきらめる

やつとでた知恵がペンとる間に消える

正直に言ってやつぱり叱られた

堺市 大 隅 克 博

荒海を知らない僕と養殖魚

パソコンはいちいち俺に楯をつく

掃除機はうるさいけれど妻元気

受け入れろなんて安易に言うけれど

当たったら五億はちよつと荷が重い

学校で充分昼寝して塾へ

東かがわ市 清 川 玲 子

チョコ配る ホワイトチョコは無用です

図書館へ行く気が横の居酒屋へ

気まぐれに声かけたのが縁でした

年金を貰う頃から出る腰痛

パスポート夢のままですませない

ホーム入りの話茶受けにするコタツ

福岡県 林 さだき

悩むより夢ふくります老いとする
明日よりも今日懸命に生きる老い
もう少し広さがあれば子と同居
予定表妻が勝手に書きかえる
福岡に川柳塔の灯が点る

唐津市 井上 勝 視

日が暮れる寿命も一ツ消えてゆく
老いの知恵時どき呆けを演じてる
思い違い記憶違いで揉めている
人恋し闘病三年巡る四季
花日より齢数えて目を閉じる

唐津市 樋口 輝 夫

老いた友年賀の筆はまだ見事
腐葉土になり損なつた濡れ落葉
初寄りで誰より騒ぐウーロン茶
階段をやつと上がった課長椅子
大騒ぎさせた財布がポケットに

唐津市 山口 高 明

吸い殻の山を作つて決議せず
平凡に炊事洗濯日がくれる
遠い日の念書を妻がひらつかせ
ローカルの旅はのんびり途中下車
親思うほどにバツイチ気にしてず

唐津市 坂本 蜂 朗

またひとつ謎が解けたと生きている
うっかりが惚けではないと言っている
腹の中映ってないか見る鏡
年毎に煩惱だけは重くなる
一枚のカードでやつと認められ

熊本県 岩 切 康 子

定年後ふる里移住の夢を持つ
激寒に寄り道少し先延ばす
級友を誘うて涅槃の寺巡る
器少し太め言い分受入れる
健康を言訳にして買う蓬餅

札幌市 三 浦 強 一

追悼式靈安かれと両陛下
いま出来ること合掌と義援金
ケータイに笑顔の絵文字サクラサク
通夜の席嬉しい話題伏せておく
気が付けば薄くなつてるほくの影

札幌市 小 沢 淳

寒仕込みなのに酸っぱくなつた僕
戻れない道をとぼとぼ来てしまひ
傷いくつ癒やす間もなく枯野くる
生かされて生きているのさ飯の世で
棺には辞典一冊あればいい

砂川市 大橋 政良

本当と嘘が上手に交ぜてある
酒好きの夫婦に酒が甘くなる
見ぬふりをしてすり抜けてゆく狡さ
目につかぬとこ自画像に疵がある
丸坊主罪ほろぼしも悪くない

黒石市 佐藤 古拙

絆とはがれき孤立死問いかける
燕くる空気抵抗ないごとく
飼ひ猫が見蕩れつばめが反転す
読経の句読点ですか咳払い
土筆踏む春が底から立ちあがる

黒石市 相馬 一花

黒白をつけると凄むマタニテイ
ほら吹きが混じると人の輪が和む
大福の顔で男を虜にす
味噌汁に喜怒哀楽が溶けている
開けごまぱつと開くよ籠の鳥

平川市 小寺 花峯

内緒話貴方の耳にカギカッコ
竹輪の穴から平和を遠く見る
欲望と希望一緒になつて朝日
酔いしれて独りの酒に隙間風
友情という名を借りた三次会

弘前市 福士 慕情

牡丹雪チラチラ春はすぐ其処へ
手探りの迷路の先へふぼの影
お祭りを重ねて酒が強くなる
歴史ある団地ひっそり高齢者
稲光り季節の幕を開けにくる

弘前市 須郷 井蛙

調味品増えて疲れる台所
一兎さえ追えず一日老夫婦
会長の寸志に二次会盛り上がる
年金減またひと工夫市場籠
戦争の朝にも化粧忘れない

弘前市 今 愁女

今年また年金だけの申告期
瓦礫跡萌える草芽が継ぐ命
無縁社会終活という新語生み
目貼り剥ぎ北窓開ける弥生晴れ
白一色の中を墓参の花手桶

弘前市 岡本 花匠

後期高齢片意地張れぬ胸の内
信心の起きて安らぎ知る暮らし
自画自賛わが煩惱の色紙描く
和服召しご婦人たちの桜みち
花うたげ明日の元気を貰い受け

弘前市 稲見則彦
おや今日はいつもと違う風に会う

真空管暖めて聴くモーツァルト

運命の扉を叩く純喫茶

手短に庭で済ませる花見会

保護色になってびったり妻の後

青森県 松山芳生

発想を変えて息抜きして暮らす

地吹雪へ負けじと潜る縄のれん

新鮮な風の流れを視野におく

雑草だつてウツを抱いて生きてきた

ささやきをそつと聴いてる野のほとけ

さいたま市 星野育子

参列に兄弟は居ず妻ばかり

泣きボクロある彼女は笑い上戸

聞けばB級グルメ好む食通

ライブハウスの熱気に填まっている

目覚めさせ年八百億の預金

東京都 岸野あやめ

母の日の母が見ている古日記

あと少し時を下さい未完の絵

ひたすらに生きた老後の地味な花

ひとりでは張り合いのない午後のお茶

眠くなる午後は野菜を買い出しに

横浜市 菊地政勝

日本の絆くずれるガレキ処理

前進へ待つてる光あたたかい

夢を見るために一步を踏みだそう

悲しみを乗り越えてゆく歌がある

変り身の速さへ風も味方する

横浜市 小野句多留

沖繩に時効知らない不発弾

マラソンが済めば都庁の気が抜ける

義理チョコの律義女性を意識する

対震に備えリユックを持ち歩く

直線になって見え出す黄泉の国

川崎市 三浦きぬ

夫の待つあの世はきつと花園よ

自然遺産の島に眠れる人よ幸

十日の恋夫はお先に行きました

思いつき走り走ってみたい死ぬまでに

起きて寝て食べて我が家で逝くは幸

富山市 島ひかる

花の水替えて私の誕生日

左遷地を終の住処にした富山

キューピッドの手縫いの服がある実家

過ちを咎めぬ母の膝頭

何時までもあると思つた母の膝

静岡県 蘭田 獭 杵

説教もピアスの穴を抜けてゆき
昼寝する猫とお婆の地獄耳
見ぬ振りの視線が影を追っている
フルムーン互いに愛を振り返り
野良仕事予定を越える晴続き

可児市 板山 まみ子

あり金で献立決める月の末
両親がいるのも不安六十五
三食をたっぷり食べて冬ごもり
踏みだした一步に不安見えかくれ
高齢者役に立ちたい前むきに

犬山市 吉田 幸子

からまった糸解きはぐす捜し物
痛み超え心の庭にぼっと花
ぶつかった壁での苦勞仕舞い込み
点滴へ修業の身置き春を待つ
ありつたけの熱意に答えられぬ老い

愛知県 早川 遯行

乾杯もノンアルコールビールです
免許証書き替えゲームして帰り
気持悪便座の蓋がスーッと開き
スカートの丈が気になる春の風
会員になれと葬儀社から電話

京都市 高島 啓子

十本の指は縛れることはない
出来すぎた人には妙に気を使う
復元力弱くなってきた背骨
明暗の狭間でほのかなるいのち
すんなりと認めたのではありません

京都市 榎本 宏子

歳ですと熱きところに水を指す
風と水の力も借りる脱原発
斜めに聞くセールスマンの株と円
ごちゃごちゃは言わず老いては子に従う
熱爛はにつこりゆるり注いでくれ

京都市 三宅 満子

氷河期に未来の地図が描けない
老々介護先の見えない道が見え
都合により店を畳むと河原町
眠れぬ夜銀河へぶらり一人旅
値上げの春移住したいなブータンへ

京都市 西村 益子

お雛様しまい一服春の風
小さくても願いたいお雛様
クラス会みんな笑顔になる恩師
ほっこりとカツオタラちゃん日曜日
自分色捨てず登るぞ古希の坂

京都市 藤井文代

大阪市 古今堂 蕉子

清濁を合わせ飲んだか中庸に
あさはかな一票が今悔やまれる
青く冴えた空が雑念希釈する
借金も歳も今では忘れない
心縛る忘れたいこと溢れだす

京都市 坪井孝一

正直者損得なんぞ知らぬまま
根の深い運命線に遊ばれる
バラの絵の裏に潜んだ隠しごと
初恋の彼女は海が好きだった
今にして思うに母は日本一

亀岡市 井上森生

啓蟄ださあ食べ歩き山歩き
明日への希望を呉れる孫五人
若返り半信半疑でも夢中
念力かボケか気楽に明日がくる
改新や維新を超えた世直しを

長岡京市 山田葉子

絶妙のコンビ遊びはそれぞれに
北斎の富士海を渡ってやってくる
メールならつい大胆になっている
柔かい新芽明るい方へ伸び
やめてやめていつもピエロにするなんて

虚と実をあえてお皿に盛っておく
規格外それこそ個性花開く
金儲けうまい家系は続かない
何割の絵馬が願い叶ったか
野心家にとときき心掃除さす

大阪市 吉村一風

愉快な仲間たんと持つて長らえる
被災地の未来へ夢の灯をともし
親不孝詫びつつ回る遍路笠
妻の通り娘は動く妻の留守
また壁にぶつかりひとつ賢くなる

大阪市 小谷集一

ときめきを忘れてからは無味無臭
拳骨の教え師弟という絆
逃げ道を沢山持つて生き上手
あやまつてすむあやまちを繰り返す
波風を避けて暮らして自然体

大阪市 大川桃花

ハイヒールの音はつらつと娘の門出
フライパン一つで作る和洋中
寒の戻り予報士詫びるように言い
歳に免じて許す病が多くなり
振舞好きのオモニに飢えた過去がある

大阪市 神夏磯 典子

大阪市 江島谷 勝弘

辛いこと続きはしないふくらむ芽

猫二匹私のそばを離れない

風薫る心の友が胸底に

いつときの幸せくれるプレゼント

心ひらく一本線が見えてくる

大阪市 板東 倫子

春立ちぬどころか明日は雪予想

母の愛知らぬ子供が笑わない

今の世もこわい話はたとある

へソ繰りも出来ぬ家計簿放り出す

三百円の牛井で男一匹生きている

大阪市 近藤 正

セシウムも臆せず泳ぐ鯉のぼり

思想調査して蹴躓く大阪市

強面と優しさ秘める大自然

被災地へ緑前線かけのぼる

百日紅芽吹いて覆う彬の碑

大阪市 岩崎 公誠

生きることラスト一秒までねばる

平均点取れない人があったかい

鬼の目をかすめて酒を盗み飲む

空想をそつと開くと風ばかり

談志師匠死んでも人を笑わせる

マニフェストあれは寝言であつたのか

歳取らぬ方法どこぞないものか

生二杯湯割り一杯上機嫌

計画の停電ならば受けて立つ

日本丸舵取りたちは同世代

大阪市 伏見 雅明

ネット売り始めた老舗三代目

地卵がすぐ売り切れる道の駅

厄介を詫びつつ逝った母いとし

十円が足りず自販機知らん顔

地方から維新の会が国変える

大阪市 津村 志華子

機嫌よう暮しなはれと花の風

片田舎老いも地蔵も安住地

身の丈のくらしで凌ぐ粗衣粗食

しっかりと守つてるとよと仏さま

棒読みのお経も心こめている

大阪市 佐藤 忠昭

ルール曲げ仲間の響鬺買っている

へソ曲げて一人浮いてる酒の席

不器用で変化苦手の石頭

腹の虫曲がついていない拗ねただけ

三振は変化球より直球で

大阪市 原 田 すみ子

どうしても今はなれないハングリ―

正論しか言わぬ人いてでる疲れ

笑顔から想像させぬ汗の量

男とはそういうものと言ひ聞かす

縦列駐車性格が出る汗も出る

大阪市 中 村 叡 子

四捨五入すれば九十閻魔さま

二月堂被災地祈る御松明

お向かいの犬が我が家の番もする

目鼻喉八十路になって花粉症

この地球壊れていくか異状なり

大阪市 榎 本 日 出

天国が見つかりません世界地図

一言で心の窓を開けられる

老いを知り老いを忘れて誕生日

ふん張れる足に十年頼りたい

良い言葉書き止めてきてそのまんま

大阪市 松 尾 柳 右 子

春雨の家にこもって作句する

ボタン取れ恥かきながら歩いてる

大切にしている姉より貰い物

春おぼろ桜並木に靴はずむ

毎日の予定を替えに旅に出る

大阪市 長 井 善 純

夢の中だけは優しい妻である

いつの間にか酒も息子に負けている

前向きに生きているからまだ夫婦

青春をまだ振り返る友と飲む

窓際でもあと三年はしがみつく

大阪市 寺 井 弘 子

花時計心と和ます四季の彩

退院日決まりてやつと良い眠り

薬指ピリオド打った跡残す

美食家も止めはさらさらお茶漬けを

背のファスナーくしゃみで開く試着室

大阪市 平 嶋 美 智 子

負けるが勝ちくやし涙はぐつと呑む

うれしい涙胸に花咲く虹の色

笑いの涙心を開く風の色

古里の春夏秋冬瞳の裏に

生家もない古里恋しただ恋し

大阪市 澤 田 定 子

家毀つガレージになる町の地図

案内図目標のビル消えている

天皇と同じ病と手を胸に

祈りの刻髭の男もひれ伏して

タダイマー裏からの声懐しく

大阪市 坂 裕之

これからも自分で選び歩きます
ふっ切れて青空の下深呼吸
好き嫌い言える仲間と旨い酒
理論ではその通りだが落ちつかん
寒椿赤いまんまで土になる

大阪市 升 成 好

気遣いが過ぎてお客を疲れさせ
胸襟をひらいた酒はよく笑う
ほらごらん拍手するからまた歌う
病名に老人性がやたら付き
退院へもう居酒屋の話など

大阪市 池 上 清 治

妻が手をつないでくれる風の坂
風よりも早く荷が着くネット買い
原発の側にお家は建てるまい
忍耐心社長の側で養われ
お駄賃を貰うと風になる孫よ

大阪市 山 本 加お里

若かりし時は無限と思つてた
ありがとう生きてただけで満点だ
頑張るとがんばらないを使い分け
病み上がり嬉し涙の友と会う
咳クシャミ マスクを付けてくださらぬ

大阪市 奥 村 五 月

独り旅妻の嫌がる酒びたり
お祭りとお酒飲みは親ゆずり
酒煙草止めて走れと肥えた医者
孫の声に老いの諍い小休止
玉の輿嫁いだ先でする苦勞

大阪市 榎 本 舞 夢

添え書きに心伝わる年賀状
誕生日出で湯と食事サプライズ
年金の枠で苦しいのし袋
老人会サークル旅行いい絆
閏年今日一日を有意義に

大阪市 津 守 なぎさ

通院予約必ず雨になる不思議
豪雪にめげずたしかな路の臺
より添って悩み聞くのもボランティア
より添えばどどん喋る高齢者
啓蟄へボツボツ騒ぐ旅ごころ

大阪市 田 浦 實

初詣で絵馬に一言ありがとう
冬うらら神の恵みとふとん乾す
イカナゴのくぎ煮のかおり我が家春
五七五の浮かぶ散歩の至福時
地球儀のかわいい日本愛おしい

大阪市 小泉 ひさ乃

日だまりで春のときめき聞いている

今にして気付くあの日の父の鞭

ブライバシー守り人情薄くなる

幸せの中で突然くる不幸

アクシデントで気丈な母もうろたえる

大阪市 笠嶋 恵美

水仙が口とがらせてやつと咲く

針供養ちよつとさびしい針の数

大往生納得させる本と会う

孫大学決意を誓い絵馬を書く

祝続く今だへそくりタクト振る

堺市 村上 玄也

真相を話せば友を傷つける

人前は黙りこくってしまう癖

いまどきは女性ではなく女子と言う

色気なくなつて錆び付きだした脳

変人が個性派と持てはやされる

堺市 柿花 和夫

言い訳のシナリオ消してまた書いて

エゴイストが絆きずなと小うるさい

アンケート調査に名を借りた踏絵

米二合僕にも炊けた妻の留守

核放棄すれば地の神鎮まるか

堺市 楽原 道夫

生涯を硝子を運ぶことに賭け

抽斗の消しゴム貝になつていた

時計台から鳩を飛ばしている政治

夕焼けが美しすぎる水飲み場

お月さんのためにも漕いでいるベダル

堺市 矢倉 五月

新風を腹式呼吸して迎え

そこその風を味方にシャボン玉

母は海だよと海の字を書いて見せ

時折は空想遊びして笑う

肉親でないヘルパーの手際よさ

堺市 遠山 唯教

五人囃子が桃一枝と春を待つ

脈のない口ポットの手が温かい

被災地をふるい立たせるワンコイン

早春の息吹き聞こえる青い笛

居眠りが好きで選んだ隅の席

堺市 西村 りつえ

イメージアップ少し気取った春帽子

苦も楽も手を取り合つて出来た皺

疲れたらストレス捨てる大軒

手術後は粥から嬉しごはん食べ

春を連れ元気をくれた大相撲

堺市 源田 八千代

春景色身を湧き立たす萌黄色

風の子の元気な声の消える町

耳底に母の口癖未だ残る

玉筋魚^{いかなこ}を旨く炊けたとおすそ分け

テレワーク部下がいなくて物足りぬ

堺市 澤井 敏治

亡き母の温もり貰う土いじり

土を掘る明日の風を聴きたくて

土が泣く人の住めない地にされて

止まり木の隅で世界をもてあそぶ

碓の字が人間の辞書にある

堺市 内藤 憲彦

握手して味方でないこと覚られる

スーパ―は半額シール貼る頃だ

妻からの疑問メールは拒否できぬ

先輩に押された背中温かい

この魚冷凍されたこと知らぬ

堺市 大久保 のん子

今の幸奇跡のような宝物

終宴は桜の花が舞うように

現在を希望を持って語りたい

面影と揺れ立ちつくす父の書架

冬なれば冬と親しむ貌になる

堺市 齋藤 さくら

転んでもまた立ち上がる若さあり

真っ直ぐに生きて行くのもむつかしい

ゴミ漁るカラスの生きてゆく姿

叔母さんの笑顔をわたしも見習おう

足腰に気合いかけてるから元気

池田市 栗田 久子

柏餅一つ手が出るまた一つ

穏やかに肩の力は抜いておく

忘れても思い出せたらよいのです

野良だけど甘え上手な猫の声

転けるから無理な背のびはしていない

和泉市 横山 捷也

あちこちに忘れものするそんな歳

裏を見る癖で波紋が広がった

妻の愚痴だんだんジャブが効いてきた

何回も曲がる正解見つからぬ

ブレーキをゆるめて老いの旅仕度

泉佐野市 山本 蛙城

自己暗示して三食後スクワット

雑学を喋った後の自己嫌悪

一円貨夢を抱かせて壇の中

六欲を忘れず持つて高い鼻

卒寿過ぎひら仮名なりの日を過ごす

茨木市 藤井正雄

純真な恋噴水と缶ジュース

くに訛りセールスさんは同郷ね

プレゼント値切って買ったのは内緒

金だけで済まぬ話に夜も更ける

ランチタイム狙ったように友が来る

茨木市 島田誠一

欠伸して猫また眠る微温い昼

百葉の長が昼まで効いている

疑えばみんな汚染の鍋の中

番犬を沖縄に置き高軒

老人会タッチパネルで差をつける

大阪狭山市 矢野梓

目と鼻と咽から春がやって来た

年金の暮しが政治から漏れる

食卓を賑やかにして年金日

半年も前の約束躊躇する

目の高さ同じで話よく弾み

交野市 森本弘風

指さして確認して出る妻の留守

赤提灯僕を社長にしてくれる

言い訳のドクターストップ効き過ぎる

三寒四温明日は寒くなりそうだ

内緒事絵文字で書いたメール来る

河内長野市 坂上淳司

節電の冬日溜りのプレゼント

陽に干した蒲団豊かな夢を見る

酒好きはつい悪友に仕分けられ

悪友に召し捕られたと午前様

飾らない悪友今も無二の友

河内長野市 植村喜代

春ですぬ川柳塔の表紙から

目眩いして振り回されている私

腹だたしいすぐに出来ない立ち座り

昔はよかったなんて笑われるかなあ

雪だるま嫌われるほど雪積もる

河内長野市 山室光弘

さじ加減あつて色づく人模様

老いの坂いつも妥協が首を出す

プライドがお荷物になり知る孤独

すつぴんで三途の川はよう渡らん

まわり道したがまっすぐ来た誇り

河内長野市 黒岩靖博

マニフェスト煙と化して消費税

メルトダウン原発事故は負の遺産

国中に寸善尺魔利の増埒

居酒屋で噂の主とはち合せ

タバコ屋の看板娘もういない

河内長野市 水谷 正子

岸和田市 原 さよ子

入院で時間たっぷり句は出来ず

青空を雲が遊ぶをベッドから

この前の入院もまた雲見てた

ハイタッチ握手で別れる見舞客

美女五人入院見舞温度上げ

岸和田市 雪本 珠子

ウインクが彼と私のパスワード

マイペース風向きなんか気にしない

身にしみて運命論を聞いている

テリトリ―還暦迎え変わりだす

アンニユイな空気漂う夫婦仲

岸和田市 堤 梢代

活字追うこの眼に感謝ありがとう

食べたいな食欲だけはまだ元気

もうあかんあかんあかと生きている

春が来るやっぱり四季はいいものだ

血圧は納得するまで測ってる

岸和田市 森 元ふみよ

余命知る祖母と静かに観梅を

孫叱りひつ込みつかず誰か来て

新人生大きなカバンほんと置く

段飾り見上げる婆の目に涙

ヨガの日はママ達競い大胆に

教え子という宝物抱いて生き

長生きの幸スカイツリーへ子が招く

喜びを包む手のひら重ね合い

公園の花童謡のように咲く

人込みの土日をさけて京の寺

吹田市 瀬戸 まさよ

非常袋も命あつての準備です

お迎えをお待ちしてます超高齢

目覚しはそれぞれにある共稼ぎ

詩歌にも霞もや霧日本の美

和菓子にも四季の行事の味と芸

吹田市 大谷 篤子

納得をしないまんまであきらめる

窓を開け明日の風の匂い嗅ぐ

これでいい昨日と同じ呼吸して

同じ目線で同じ物は見えていない

煩いと思う孫にも癒される

吹田市 須磨 活恵

届かない想い切ないおぼろ月

約束を果してほつと靴をぬぐ

桐の花優しい祖父母思い出す

五月やみ心の迷い深くする

ワラぞうり温み忘れぬ土ふまず

吹田市 木下敏子

鶴と亀氣が合うたらし御兩人
文句なし親もニコニコ桃の咲く
残り火を燃やしふたりの橋渡しし
ひとりいて想い出多い雛飾る
紹介をして喜ばれ実を結ぶ

高石市 浅野房子

目まいする誰も助けにきてくれぬ
物忘れ探し物との競争だ

一人者気まま過した成れの果て
しんどいを連呼してまで生きのびる
やさしいな取柄ないのにほめられた

高槻市 井上照子

お土産の栗おこし食べ振り返る
自己中の爆竹それはないでしょう
菜の花のおひたしうどと春を食べ
オール電化たまに外食したい嫁
三人会肩書捨てて子に返り

高槻市 指宿千枝子

一日のドラマ弾ける日が昇る
お礼言いながら束ねる年賀状
春一番まだかまだかの二月尽
杉花粉飛ぶのも仕事悪しからず
花柄のマスクで耐える花粉症

高槻市 佐甲昭二

風除けに丁度手頃なトップの背
偏差値がブレイキかける進学校
合理化の成果問われる三代目
ハンガーに明るい明日をかけて寝る
見つめ合いあだ名に戻るクラス会

高槻市 峯村勲弘

柏餅先ずは葉っぱの香りから
大雪にそろりそろりと都会人
診断は良性腫瘍梯子酒
分岐点通過の度に増える皺
くるくるとスマホの上で踊る指

高槻市 左右田泰雄

ゆつたりと余生を送る笑い皺
風向きが変ると見えて来る明日
胸に手を当てると思い当たるふし
味わいのある一言が身にしみる
団欒の温み伝わる窓明り

高槻市 杉本義昭

被災地の木々は森へと夢つなぐ
ツイッター遭らせの嘘が明かされる
もう踊らない遠い昔の赤い靴
足腰を鍛え会い度い人がいる
子育てを終えて夫婦の余白埋め

高槻市 富田 美義

母親の愛を知らない口答え
清貧の座敷でおもう残り道
少子化のうねり老後を冬にする
子の進路貧しい親の欲がでる
老いて子に従う父になって逝き

高槻市 富田 保子

笑い声同窓会の打ち合わせ
ほのぼのと老後ゆつくり陽が当たる
鯉のぼり孫への思い深くなる
無理するなスカイツリーに招待と
三姉妹ふる里こいし母見舞う

高槻市 初代 正彦

羅針盤つけているのか日本丸
身内にもはつきり言えぬ時がある
てっぺんが見えているのに遠い路
まだ要ると意地を張ってる青い僕
オフィス街辻を曲がれば人情味

高槻市 片山 かずお

呼ばないでまだ為残しのあるこの世
几帳面過ぎれば野暮になり下がる
おはようがまだ眠そうな幼稚園
春の雪木の芽花の芽驚かす
他人の倍喋って内気ですと言う

高槻市 島田 千鶴子

我を通し夢をなくした事もある
新聞の小さな記事に元氣でる
二センチの雪がトップのワイドショー
春風に誘われ歩数計伸ばす
カフェテラスおひとりさまに行くと行く

高槻市 安田 忠子

旅先でマップ片手に味巡り
地図広げ世界一周夢見てる
進次郎・細野に見てる未来地図
陶板のムンクの叫び小さく見え
朝日浴び新聞を読むこの至福

豊中市 江見 見清

偶然の出合いに時は止まってる
悩んだら父なら母ならと思う
目移りのせぬようメモとデパ地下へ
おばちゃんの飴断れず持ち帰る
お互いに行き先言うて行く散歩

豊中市 藤井 則彦

時時は横になりたい昇り龍
ブレーキをすぐ踏みたがる評論家
褒め言葉にまさかと自分見失う
お互いにいずれ死ぬから愛おしい
清流の音にもほぐれ出す五感

豊中市 松尾美智代

ぬるま湯のようなかごめの輪を抜ける

途中下車熱海で梅を満喫す

もう会えぬ友と一日語り合う

五日寝て無理の出来ない歳と知る

反抗期の孫と一緒に朝歩き

豊中市 松村里江

爪染めてしばらく魔女の仲間入り

切り口は浅いが芯にうずく傷

戻りゃんせ約束残し逝くなんて

セレブでもかぶりついている蟹の足

長寿膳ためらいも無く松にする

富田林市 中崎深雪

ひたむきに凍て土もたげ落のとう

わたくしも考え込んだ震災忌

震災のキズ突つかないでという声も

マスコミは伝えぬ沈黙の重さ

春寒に梅の白さがいたましい

富田林市 片岡智恵子

泣いて生まれ笑って死んでいきたいな

心の弾み覗かせて咲く梅かおる

鉄の扉を開けるのは優しい笑顔

自我の我を横に置いたら生きやすい

今もなお積木を崩す虚栄心

寝屋川市 森田麗

菜園の日溜りに寄る知恵袋

春の鬱雑草に出す果し状

暦には啓蟄とある雪の朝

初節句笑顔にカメラアンコール

言い分けが内ポケットに忘れられ

寝屋川市 太田とし子

水温むかすかに見えた風の彩

嫁と義母時代を越した手が温い

バレンタイン時代に縁のないモンペ

無言でも胸のバツジが幅効かす

総選挙ビクビクしてる古狸

寝屋川市 森茜

うなずいてうなずいて聞くいろりばた

小さい嘘ですが笑ってくれますか

いい予感道の駅から始まった

木もれ日を啄む雀せわしない

鉛筆はまあるく心ひらいていく

寝屋川市 平松かすみ

母の倍生きて母には勝てぬ知恵

繭袋背負った母が眼裏に

朝食は手作りパンがふつくらと

モスリンの半纏母の形見です

母さんとお風呂の記憶一度だけ

寝屋川市 山本 三郎

雑音に馴れて里では眠れない
雑音が無いと眠れぬ街に住み
曲線も有ったが妻は付いて来た
SLの煙が画く曲線美
大事件突如砲弾打ち込まれ

寝屋川市 富山 ルイ子

家族みな一病持つて仲が良い
降圧剤あの人もこの人も飲み
血圧の薬を友は二十年
健康で逝くのは夢のまた夢か
耳が遠くなって不自由なことです

羽曳野市 徳山 みつこ

三日月にライトもらつて野を抜ける
地球転がる戦も花もみな積んで
身の内にはりついている怠けんは
孤独な兎 妄想の原野跳ぶ
深呼吸春に生気をいただきぬ

羽曳野市 三好 専平

国会にパイパスが要る乱れよう
バラバラと男性まじるケアホーム
高裁は庶民の味方してくれず
野良猫の方がわたしによくなつき
格安になつても旅行のあてがない

羽曳野市 永田 章司

命との綱引き趣味の煙草止め
国難は八方美人許さない
国民も甘かったなあマニフェスト
国はいい収入越える支出で
谷を埋め山を削つて液状化

羽曳野市 吉村 久仁雄

失態のたびに心の角が取れ
荒波にもまれ肩こる暇がない
次の世へ持つていきたい酒に会う
妻の持つナイフ刃先が僕に向く
頂点で飲むとお酒がほろ苦い

羽曳野市 福田 悦子

胸底に溜る叫びは神が知る
連休は飛鳥ロマンの風に舞う
母の日は亡母の写真を抱きしめる
定年が欲しいであろう開業医
編み込んだ糸に女の愛がある

阪南市 森村 美花

潤滑油ふたりにワイン飲んでます
やさしい目許せる人の匂いする
腹筋のやさしい声が心地よい
新緑を待ちわびているスニーカー
思いきり跳ねて変つた風の色

東大阪市 北村 賢子

孫からのチョコを飾っておく夫

軽くハートにタッチされてから本気

ベアリング半分ずつの愛刻む

コート脱ぎ春へジャンプをするハート

もう涙見せぬと決めてから強気

東大阪市 佐々木 満作

門限がフリー我が家の子供の日

母の日は家族みんなで家事炊事

母の日も休むことなく水車

父の日は誰もいなくて一人酒

五月病乾いた心持て余す

枚方市 寺川 弘一

友が逝く青春がまたひとつ消え

一身上の都合の裏にあるドラマ

男と女美人の評価一致せぬ

居酒屋は挨拶抜きで腹を割る

務め果してポトンと落ちた木守柿

枚方市 小林 わこ

熟年のデートゆったり風まかせ

病院の夜の廊下はただ無風

そんなこと忘れなさいと風が言う

許されたのか風がやさしく背を押す

遠ざかる風無理に追いかけたらない

枚方市 丹後屋 肇

十七音字夢を紡いでいる孤老

孫の目が一直線に飛んでくる

春一番吹いて戦く花粉症

大目玉喰って背筋が伸びました

一輪へエールを送る春の雪

枚方市 二宮 紫鳳

巣立つ娘に幸せ飾るひな祭り

さじ加減やと見つけた嫁姑

吉報を待ってはころぶ梅一輪

ひとひらの雪もふんわり露天風呂

満ちたりた笑顔が集う母の味

枚方市 二宮 山久

人生を陽気に生きる知恵を持ち

平湯宿蓑笠かぶり露天風呂

新穂高ゴンドラ揺れて樹氷映え

雪が舞う故郷思う白川郷

新鮮な心にさせた奥飛驒路

枚方市 安達 忠央

しがみつく抜け殻に蟬意地を見せ

ラッキーと思つた時が下り坂

鏡からしつかりせいと励まされ

二次会でほんとの酒宴始つた

志ぶれていないか問う鏡

藤井寺市 高 田 美代子

幾度の春か今年も桜咲く

もう少し頑張れ自分へのタクト

まぶしさの向こうに若い日のわたし

真ん中は窮屈だから端が好き

さてどうするか下り坂だけ見える

藤井寺市 若 松 雅 枝

効能書天眼鏡を出して読む

立派なお宅嘸や維持費が要るだろう

検診の度に身長減っている

頂いた林檎描いて絵手紙に

膝痛が緩んで活気取り戻す

藤井寺市 伊 藤 アヤ子

梅の花古里からも香りたつ

菜の花が畑一面にゆれて咲き

桃の花みんな飾りひなまつり

狭い道待つてくれてる思いやり

考えもまた滑舌もにぶってる

藤井寺市 鴨 谷 瑠美子

草餅のほかに母のいる気配

ともかくも心機一転春の靴

生いたちを語り互いに身近なり

風よけになる人だから離れない

あと何が消えても余り変らない

藤井寺市 俣 野 登志子

二人でひとりいつもどちらかがお達者

初対面気取つてられるのは五分

腹熟しに歩きケーキをかうてくる

梅の香に厭きたか目白来て憩う

目が泳いでる何かいたずらしたな孫

藤井寺市 吉 田 喜代子

啓蟄にやつと目覚めて来たわたし

雑巾より軽々掃除する軍手

話中とつぜん言葉出てこない

重し取れ薬無しでもよく眠れ

うつつと悩んだ日々のあほらしさ

藤井寺市 増 井 ヨシ枝

オール電化せずによかったガスコンロ

サヨナラを告げて流した花筏

あちこちを繕いながら生きている

苦労かけた妻に感謝のぼつくり死

初恋の人と杖つきお茶をする

藤井寺市 津 田 シルク

夫におむつ試しに私つけてみる

反抗期終えたらしいな笑みが見え

物忘れ脳の入口までは行き

何事も過ぎて気が付く血のめぐり

下戸の家に金箔のお酒が届く

松原市 森 松 まつお

一口ではっこりさせる豆ごはん

一合でO型の血が騒ぎだす

割り込んでこないでボクのテリトリー

老若男女ケイタイいじっている車内

あの人と飲むならこと決めてある

箕面市 広 島 巴 子

芽吹きますさあ歌いますおらが春

子も孫も男で寂し難祭

黙祷し無力な自分お詫びする

昇竜の咆哮のごと雨後の滝

戻れない戻らない道前を向く

守口市 井 上 桂 作

日向ぼこガラス越しにて老人は

長生きは幸せだけで済みません

年寄りの知恵は喜び感謝から

命とり老後の資金守る目を

大津波想定内の対策に

八尾市 宮 崎 シマ子

鳩は眠る裸電球のつく頃は

新キャベツひとりで大きくなった顔

春の草喋るやさしいひらがなで

電池ざれとは知らなかった目覚しの

大阪城ビルに隠れた上町台地

八尾市 高 杉 千 歩

予報的中傘さして梅見する

茶筆筒の奥で衣魚の日章旗

毎日が喜劇のような物忘れ

万歩計 万歩になったことがない

無理矢理に読ませるルビのいる名前

八尾市 寺 川 はじむ

大国のでっかい傘に居る安堵

元はと言えば雀の涙ほどの嘘

盆梅の背伸び夢見て待つ小枝

悪魔にも聖者にもなる水の神

運不運出会しながら古希の坂

大阪府 野 田 栄 呼

捨てられず身辺整理また延期

愛犬に可愛く着せて今日を行く

老々の体と心癒す旅

玄米茶仏間の姑へご挨拶

会釈され緊張感がほぐされる

大阪府 米 澤 俣 子

手術待つ白一色にいる孤独

春の風術後をそつと撫でて行く

遠まわりお地藏さんに会うてくる

厄介なものの中自分の自分

迷子札がわりケイタイ持たされる

大阪府 初山隆盛

正座して童女にかえるひな人形
愛を描くでっかい画布が胸にある
父の愛メロンきつちり五等分
青年の辞書にもあった祖国愛
ありがとう言える夫婦で終ります

大阪府 桑田 ゆきの

甘酒に仏心濃くする仁王門
被災地の復興遅々と春を待つ
山笑う日々の幸せ五指合わす
延命鈴音色たしかめ札所寺
ハードルを上げてちびりと独り酒

神戸市 山口 光久

孫からのお願ひだけは喜んで
好奇心未来の扉あけたがる
歎異抄ひらくと迷い消えてゆく
だんだんと頑固になってゆく恐さ
立ちあがる力へ日毎活を入れ

神戸市 伊勢田 毅

定年へ火中の栗は拾わない
赤い糸はころびを子が縫ってくれ
鞭打って古希出直しの賽を振る
輪を外れ一人気楽な酒を飲む
申告を済ませて美味な昼の酒

神戸市 山口 美穂

バーゲンをひと回りしただけのこと
茶柱へ軽い期待の今日も暮れ
傘寿から古稀四姉妹よく喋る
入試までピリピリ重い日が続く
仏さまきいてください今日のこと

神戸市 山崎 武彦

心地好い春のリズムに乗る綿毛
恐ろしか妻がうふと上機嫌
鎮いているが決心変らない
耐えるのも修業と腹の虫納め
補聴器が重たい空気聞き分ける

神戸市 木村 貴代子

赤ちゃんの笑みに後悔溶けてゆく
亡夫の血流れる男子もう一人
リハビリと川柳杖に五年生き
シャッターと老人施設目立つ町
雑炊に寒さ煮込んで啜る夜

神戸市 山田 婦美子

自分史の中で消せない深い闇
早いもの勝ちと言っていた友の訃報
飯面だけ外せばきつと楽になる
大酒が吞めたら憂など飛ぶだろう
神々と出逢える期待稲荷山

相生市 中塚礎石

常識が多くて定規あてられぬ
敗戦を聞いた芋粥うまかった
特攻の命助けた君の声
日が沈みわが古里に色が無い
一言に次からつぎと嘘が出る

芦屋市 黒田能子

日本の宝産声はじけとぶ
今日のことみんな忘れて白い明日
お昼寝タイム電車の揺れが丁度よい
口角を上げて不足などは言わぬ
わたしの力少しは役に立っている

芦屋市 竹山千賀子

初物はあなたが先よ仏様
おしゃべりをした日心は毯になる
介護した両手温もり知っている
春風に綿毛を追って行く帽子
ケセラセラお蔭で達者母ゆずり

尼崎市 春城年代

トナカイの鈴聞こえそう春の雪
芦野宏も逝くわたくしのおい春
新キャベツざくりと小気味よいひびき
大正の子が卒寿の坂を越えました
ときおりは外から見てる独り住居

尼崎市 山田耕治

先に行ってください息が切れてます
朝あるきお百度踏んでいるように
気にしないことさ厄年を生きる
センターで遊べば安くあがります
大掃除また本棚が足りません

尼崎市 軸丸勝巳

大寒波耐える仮設に遅い春
北を向き重い黙祷震災忌
雪便り一茶の栖越える丈
四十二軒都民マラソン街ぐるみ
ロンドンが二転三転するびわ湖

尼崎市 加川靖鬼

瓶詰めにされて静かにしてる酒
お中日地球ゆっくり衣替え
虫の道熟知している蜘蛛の網
手の皺が増えて金運線も伸び
喜怒哀楽みんな溶けてる海の碧

尼崎市 林昭三

食事会孫がお迎えいそいそと
爺ちゃんもお歳犬にも遊ばれる
病んでから娘にも素直にありがとう
お賽銭首に掛けてる銭布から
東京の下町に住む人情味

尼崎市 藤岡りこ

丁度今腹八分だが止められず
半分こする相手が欲しい一人っ子
被災地に春風のごと愛届く
韓ドラにため息洩らすばあちゃんら
過去の肩書生きているのは死亡欄

伊丹市 山崎君子

新しい割烹着着て豆まきを
ひな祭りはんぼりの灯の美しく
誕生日子に囲まれて祝い膳
白い雲富士に見えます夕まぐれ
卒業式一步前進子供たち

加西市 金川宣子

音読の手本見せてる祖母の声
嫁がせて重荷下した古希の坂
うちの孫意外に出来た初受賞
亭主力原動力は妻の笑み
たまつてた愚痴や不満の長電話

川西市 米原雪子

偶然の出会い神様からの縁
自信持ちずばり言ったが外れてた
出来るのは感謝で日々を送ること
朝の床もつたいい程心地好い
現代っ子お下がりなど着ずに済む

川西市 西内朋月

早食いがずっと直らぬ戦中派
運悪く飲み屋の前の俄雨
寺巡り小銭はたんと持っている
子や孫と会う妻の十七回忌
懐かしい過去を覗いた万華鏡

三田市 北野哲男

スーパ一の棚から故郷見いつけた
バイトあり兼業主夫の定年後
回らない寿司と地酒で誕生日
久々も田舎の匂いせぬ故郷
幼稚でも母遺言書よく判る

三田市 堀正和

自分史のようにカルテが厚くなる
のびのびと試合見てます補欠です
ブランドのハンカチだから汗拭かぬ
二人だと手抜きされてる晩ごはん
まあいいかばかりでぶらり生きている

三田市 石原歳子

夫の容体に一喜一憂して過ごす
近頃は席ゆずられてばかりいる
尻餅をついた話に花が咲く
注意していても背中が丸くなる
心配ごとあるが体重増えている

三田市 上垣 キヨミ

あどけない笑顔の記録大ジャンプ

何回も聞いた話に逆らわぬ

見るだけと決めたバーゲンすぐ負ける

忙しい子に見て欲しい難の段

マンシヨンの名前と階が出てこない

三田市 田中 章子

いかなごを炊けばわたしの春がくる

いびきまでわたし責任もてません

二輪目は見向きもされぬ梅の花

ストリートに孫から愛をぶつけられ

駅中のおい家までまだ遠い

三田市 福田 好文

お見合いの厚い化粧は詐欺だろう

消しゴムで消せる程度の傷で病む

物言わぬ妻が一番怖いとき

入ったら生きて出られぬ金魚鉢

コンビニで酒を仕込んで旅の宿

西宮市 西口 いわゑ

こりごりだった人を今更なつかしむ

思い切り自由自在に咲け薔

壺の花喜怒哀楽を心得る

菜の花よもうこだわりは止めにする

鎮魂の太鼓よ響け大空へ

西宮市 山本 義子

薄うなったね指が囁くつむじ髪

ただいまとまず鍵あける指いとし

ゴミ出しますす三味も弾きます太い指

節くれた指しつかりと世話になつてます

冬の指ほつと息かけると弾む

西宮市 秋元 てる

午後のお茶いつもの乗りで軽いギャグ

血統だ平均値なら良しとする

ああ遂にひ孫も庇う足となり

卒寿なお乳離れ出来ぬのが故郷

続きでも終りでもない老いの夢

西宮市 緒方 美津子

この一年涙と感謝鎮魂歌

針供養針が少なくなりました

どんな風呼ぶのか孫のサキソホン

小さな追い風家族の募金箱

行く道だ母のおもらしから学ぶ

西宮市 亀岡 哲子

だってだからと自分一人の禅問答

五年日記つくし出た日が書いてある

お喋り代も込めてすつきり美容院

育つ子へチヨコより肉を買う土産

船中八策途中水漏れないように

西宮市 足立 茂

肉料理は赤と譲らぬ一本気

パソコンが手引書読めとソツポ向く

故郷の山河が消してゆく記憶

ボクが通れば急に揺れだす赤ちようちん

ローソクの数足りないバースデー

西宮市 片山 忠

原発から抜け出せそうもない迷路

やることがいっぱいあるぞ議員なら

中流が雪崩を打って落ちてくる

晩年は読書で決まる顔の価値

下積みで分かり合えてる串の味

西宮市 藤本 直

特に無しと日記に書ける日よ続け

雨の日はロククンロールとミステリー

火をつける魔法の呪文ロンドンへ

美学など所詮男のエゴだった

傘寿など私想定外でした

西脇市 七反田 順子

天辺の好きなカラスが声かける

さっそうに見惚れてしまうキッズダンス

お出掛けの夫に時には投げキッス

計り売り欲が騒いで買すぎた

春雨に鳥の調べを聞いている

姫路市 古川 奮水

ライバルも杖を頼りに参加みた

入社式笑顔で並ぶユニホーム

シーソーに笑った妻が病んでいる

枝分けのかねの成る木が育たない

いろり端語り部民話うまい酒

奈良市 米田 恭昌

義理チョコのこれも縁かありがとう

仮名文の無沙汰を叱る国訛

さすが先輩味のあることを言う

若者からケイタイとれば抜け殻だ

起ち上る明日へ大漁旗なびく

奈良市 山本 柳昌

きれいごと唱え個性が消えました

うちの庭となりの猫の廁です

ときどきは刺激もらいに遊園地

衣替え春へスイッチオンにする

楽しいこと探す背筋はピンと立ち

奈良市 加門 萌子

支援する心つきない善人説

ぬくい日を過ごすわたしの無力さよ

桜咲きチューリップ咲く待ちましよう

親の無い子等すくすく育つよう祈る

支援する心忘れぬお互い様

奈良市 辻内 げんえい

高齢者はつらつとして闊歩する
地震予知人騒がせな数字だす
薄味の我が家に合やす嫁の腕
雪マーク続きまだまだ遠い春
婚約者連れて息子の声弾む

奈良市 岩 本 浩 二

薬より熱燗が効くボクの風邪
何事も右に倣って楽に生き
オリジナル墓標に一句辞世入れ
妻よりもオレを良く知る呑み仲間
独り居の寂しさかこつ妻は旅

生駒市 飛 永 ふりこ

満開の梅に微罪を天日干し
春の雲ハクシヨン響く花粉症
本人をアハハフフではぐらかす
萌黄色わたしの新芽はじらいが
吹きぬきの窓から春のアンダンテ

橿原市 居 谷 真理子

この国が好きひなまつりこいのぼり
裸木のくつきり示す生きる意志
捨てられた薔薇も毅然と薔薇である
影も含めてみんなわたくし
六十四だんだん向こう見ずになる

香芝市 大内 朝子

瑞瑞しい発見春のスニーカー
恋しい日亡母の根付の鈴を振る
淋しいな瓦礫で揉めている絆
寒い夜は酒によしよししてもらう
新緑のパワフル老いの殻を脱ぐ

大和郡山市 坊 農 柳 弘

初鰯旬には旬の値と味と
爽やかに初夏を口説いている詩人
浮き雲にひと色足して初夏を描く
毒舌が過ぎると軽石が沈む
夢追いの真ん中辺にある穿ち

奈良県 天 正 千 梢

虫めがね老眼鏡に負けそうで
日課のひとつ老眼鏡かけている
その時の心のゆれで句がかわり
雪見酒用意してもへりません
ビールにしたらまんざらでもないらしい

奈良県 渡 辺 富 子

女の坂越えて愛する意味を知り
白紙の地図持つてふらりとひとり旅
青い実が再起の浜へたどり着く
スタートの横一線にあった覇気
言いたいこと半分ほどは胸に秘め

和歌山市 牛尾 緑 良

和歌山市 田 中 み ね

ジェラシーが一滴落ちて春がくる

優しさの中で孤独になつてゆく

真冬日を越して大人の顔になる

手術室陛下と同じ時をもつ

酎ハイの二杯目からは本音です

和歌山市 福 本 英 子

三寒二温春を忘れた日本地図

もう少しあと一息と老いに鞭

加齢臭そつとシヤネルの世話になる

心まで老けてられない米寿です

待ち時間無い病院で味気ない

和歌山市 古久保 和 子

マネキンの気替え眺める浅い春

待たされる電話の奥が揉めている

糸くずが気になる前列の他人

父見舞うこつそり寝息聞いてくる

ペン先に私の癖を教え込む

和歌山市 松 原 寿 子

雑草もすくすく花に負けてない

ピリツとした一語が胸に翔んでくる

サウスポーかと言われナイフを持ち替える

悲しむと心が錆びるからよそう

さわやかに春の記憶を分かちあう

やさしいことを言うて泣かせる孫ですわ

路地裏を知らぬお人の自己主張

一抹の淋しさ残し隣越す

あなたのために敢えてひと言物申す

多忙でもおやつは別よもう三時

和歌山市 喜 田 准 一

ときめきであればよいのに不整脈

成るように成ると決めたら据わる腹

手固くて話に夢が無さ過ぎる

揺れ動く心の襷を覗かれる

変わり身の速さ覚える宮仕え

和歌山市 武 本 碧

言い訳を聞くたび心寒くなる

知恵競べしても所詮は蛙の子

反芻をしても消化しない刺

谷渡りしそうあなたの甘い声

伏線を敷いて愚直な亀になる

和歌山市 柏 原 夕 胡

にんげを避けてにんげん恋うている

天敵へ夫の名前加えとく

人間のかたちの鬼が多すぎる

ぬくぬくの居場所足元にあった

距離置いて人間像が浮き上がる

和歌山市 堀 富美子

ひと日行くきりりと締めて朝の経

インスピレーション今日はいい事ありました

あちこちに朝が鳴り出す電子音

年金が忙しく動く春が舞う

今年こそ抱負は歳を数えない

和歌山市 松尾 和香

川柳の奥義へ試行錯誤する

奥の手はポッケに入れたまま余生

最終の出番私の白い道

そろそろと子に託す旅支度する

川柳へつながる言葉探す里

和歌山市 上田 紀子

蒼天に弱音は吐かぬ山登り

ハードルを上げて希望を膨らます

デリケートな心のベール剥がせない

躓いて転んでやっと眼を覚ます

いい人のままでは淋しい花暦

和歌山市 土屋 起世子

流れには逆らいません蟹の穴

お誘いのデート偶数年金日

老い支度ブライドだけは放さない

生真面目で苦勞の種を背負ってる

長くなぐ林檎の皮を剥いている

岩出市 藤原 ほか

サスペンス我が家の鍵はどこへやら

やりすごすそれも生きぬく知恵と知る

怒るなど今日も唇噛み締める

天命と思いふんわり受け止める

切り替えてやっと本音で向き合える

海南市 小谷 小雪

都合良い言葉の一つ平均値

目を細め新メンバーを迎え入れ

愛用の老眼鏡を買い替える

筆ペンは下手でも和紙によくなじむ

独り居にまさかの時の笛を吹く

紀の川市 北山 絹子

美男でも私好みの顔がある

ランキング付けられそうな長い顔

ユニークな顔が並んだ入社式

細長く生きる二人の設計図

病床の姑は突然ありがとう

田辺市 岡本 昇

堂堂と年寄りらしく生きている

粥啜り平均寿命超えました

金貯まり自分の足で歩けない

しなやかな竹の節目にある命

国会はすったもんだで多数決

鳥取市 森 山 盛 桜

遠からず妻と手つなぎするだろう
齢を経るたび妖怪になつて行く
本意だけ喋れば息継ぎが出来ぬ
吸い込んだ精気吐息になつて出る
純だった学芸会に戻りたい

鳥取市 河 川 無 限

年金の枠でちんまり生きている
寄せ書きに託す復興への祈り
風掴み風と語つて風を知る
柵越えて僕も岬の馬になる
サイン帳回し卒業近くなる

鳥取市 土 橋 はるお

フラ踊る女の腰の柔らかさ
腰据えて飲まれりや困る酒がない
どじょう掬い腰が命の踊りだぜ
ジャンケンに負けて禪一丁だ
別嬪さんと同じ飯を食つたのに

鳥取市 岸 本 孝 子

みよちゃんのじよじよが待つて春よこい
春の服に出番まだかとせかされる
神からの預かりものを磨いてる
幸せはあてにされてる家事雑事
二人なら残り物でもごちそうだ

鳥取市 有 沢 せつ子

文才が無く五七五も光らない
コーヒーが朝の心身揺り起こす
ためらつていれば自動のドアが開く
ストレスはデパート回り置いてくる
心配は今日忘れたく受話器取る

鳥取市 中 村 金 祥

天皇は鉄の心臓かと思ひ
ドックから帰りグルメを食いまくり
極秘会談あつて世の中うまくいく
老後とは言わせぬ古希のボランティア
老母作るレシビメタボに縁がない

鳥取市 福 西 茶 子

この齢で百点なんて無いドック
すぎた日の愛は錯覚だったかも
悪妻になりきり主夫を育てあげ
もつたない除雪費用と葬儀代
六十五歳まだ働けという政府

鳥取市 近 藤 佳 子

窓あけてすぐ窓しめる今日も雨
寒くとも文句言わない地藏さん
大根がもうすぐ炊き上がる匂い
うぐいすが騒ぎはじめた無人駅
家中の手摺りに助けられている

鳥取市 夏目 一 粹

空っぱの頭叩かれても痛い
にんげんの声はときどき浮沈する
沈黙の中でおびえている指名
笑顔でも神経質な人がいる
人間はしぶといものよペンをとる

鳥取市 福永 ひかり

足す元氣歳を重ねてからの赤
あれそれでびったり合っている呼吸
スケジュール腹を満たしただけの昼
ああでもないこうでもないの机上論
考えぬことが解決策になる

鳥取市 加藤 茶人

五線譜に笑いがもれるはひふへほ
日本海荒れてなんぼの蟹うまい
孝行は居るだけで良い声聞かせ
離婚する元氣もなくて蚊帳の外
朝は来る春は来る吉報を待つ

鳥取市 春木 圭一郎

本当の思いやりとは荒つばい
カッコいい背中を子には見せてやる
当たり前思えることがありがたい
日常に気配る夫婦仲がいい
存在を許し合ってる友がいる

鳥取市 竹口 清信

今日も無事暮らせたことに感謝する
悩んでも成るようにしか成ってない
仕事では俺の流儀を通す気だ
無駄なこと分かれば始めからしない
遅しく生さんと生きた気がしない

鳥取市 奥谷 彩子

四面楚歌弥陀の温もり掌にうける
六根清浄情けにすがり山登る
胸のうちそのまま写しとる鏡
暗夜行路太鼓と笛の二人旅
味方の矢空気が読めず背に受ける

鳥取市 鈴木 一弘

水たまりさけて回覧板まわす
卒寿経て学びつづける人の道
からくりが九の値札にあるようだ
最果ての卒寿の海辺波静か
咳払いまさか拒否とはおもわれず

鳥取市 永原 昌鼓

クラシック聴いて紛らす齒科の椅子
プライドも売るデパートの包装紙
作り置きカレーが旨い次の朝
老いふたりつい作り過ぎる料理
人間が作る薬も原爆も

鳥取市 吉田 孔美子

自立の芽見守る森の幼稚園
就活婚活ポロボロの皮財布
Uターン改めて知る自由財
グリーンの夢もしもの時は半分個
海外留学女の陰を追いつ帰国

鳥取市 西川 和子

背伸びして乗って下りるにおりられず
お手本を真似て本物には遠い
少しずつ自分の色が見えて来る
お手本を越せぬが僕の自信作
お手本がいいから僕もほめられる

鳥取市 中宇地 秀四

極楽も地獄もあったダイヤ婚
ほろ苦い想い出浮かぶおぼろ月
体力が弱り涙腺ゆるみ勝ち
年金で過疎地にこもる老い二人
夕焼に明日を託すむら雀

鳥取市 前田 楓花

メロドラマ見ると昔が蘇る
我ままを言わせて傍に居て欲しい
遅刻して言い訳ばかり思いつく
寂しさと不安とりまく北の町
あと少し別れの時間欲しかった

鳥取市 高浜 勇

視野欠けてせめて心は拡げたい
よその児の見守りばかり老夫婦
会話ないままの夫婦で元気でぬ
娘に貢ぎなお疎まれる役の父
花言葉わからぬ人にプレゼント

鳥取市 平尾 菜美

あれこれと継ぎ接ぎ姑の政
てにをはの方程式がまだ解けぬ
じゃあまたと逝けたらいいね一人旅
明日知れぬ命はやばや過せない
里山に本領ひらくバラダイス

鳥取市 吉田 弘子

金婚を過ぎても意見一致せぬ
増えてゆく老斑に長生きの相
啓蟄に春告草は未だ蕾
にんげんも冬眠らしき永い冬
晴れマーク週間予報またもなし

鳥取市 池澤 大鯨

噂好き自分のことは口にせず
また挫折語るに足りるものはない
諦めを他人は達観と見てくれ
普請なら充分時間かけてする
分家二代目あと継ぎのこと考えず

鳥取市 池原 天馬

男逝く国会ニュース好きだった

大いなる幻影を見る平和まだ

特売日優等生の卵買う

喜寿は若死傘寿すぎれば天命と

ツイッターもネットも無理だ川柳を

鳥取市 深澤 千恵子

真つ直ぐに生きていたいと背を伸ばす

親ばかりいつになつても直らない

打算では長く続かぬボランテア

恨めしい雪もめぐみの水となる

何もない幸せ知つて楽に生き

鳥取市 宮脇 道子

積雪に大豆が覗き春遠い

震災一年次の災害恐れ待つ

知人の呆け我が身に置いて明日を見る

地球上何を怨むか震災津波

鎮魂の祈り孫達平和待つ

倉吉市 野口 節子

腹割つて話す相手が居て足りる

手塩にかけた花の笑顔を見て飽かぬ

絢爛と咲いて蝶々の舞いを待つ

古里の花は癒しの彩で咲く

荒ぶ世を花いっぱい飾りたい

倉吉市 猪川 由美子

手古摺つて振り回される沖縄だ

その丸刈りパフォーマンスとちやいますか

年取つて肌ケアさばり更に老け

皇太子マイホームパバしつかりと

長寿四姉妹国会へまで駆り出され

倉吉市 山本 玲子

図書館を出てお喋りの仲間入り

ふる里の山はわたしに逆らわぬ

老い二人喧嘩も仲の良い勲章

横向きのままで伝えるから誤解

座り込む客は長居を決めている

米子市 竹村 紀の治

弱音吐く誰にも聞かれないように

朗らかになれる葉を持つている

亡妻の誕生日なので花活ける

助手席に神を乗せたい雪の道

為るように為るさと決めてもう一杯

米子市 成田 雨奇

日記帳恋のページが破られた

見せられぬページ自分史進まない

焼酎はやめてやっぱり酒にする

それなりのカーブ体にあつたがなあ

終戦後男先生教室に

米子市 中原 章子

サンキューのシャワーでパワー湧いてくる
ひたすらに走り続けて今がある
ピンピンと生きてコロリは難しい
余力あるときにブレーキ踏んでいる
先を見据えしなやかに我が身を削る

米子市 後藤 美恵子

税還付得しように思わせる
アスファルト割れ目に春の精ねむる
飽きぬおひと子どもと大人同居する
ひと言が欲しい目だけじゃ物足りぬ
絆奏でる被災の松のバイオリン

米子市 高田 振作

川柳のネタを横取り妻が詠む
金偏も女偏にも飽きました
アバウトな男と言うがA型だ
鐘一つの人生でしたワッハハハ
祝日に日の丸の旗出た昭和

鳥取県 深田 倶久

高枕やつぱり悔いは抱いている
還暦のおやじの写真が傘寿問う
内緒だよあちらこちらで立ち話
逝く友を見送っている鯉のぼり
見おぼえがあいまいそつと横を向く

鳥取県 岩崎 和子

さざ波が立つたらそつと歌うたう
漂白のキラキラ日差し布巾干す
外出の朝の仏前灯がともる
出稽古のお相撲さんに湯気が立つ
テレビから熱気いただく大相撲

鳥取県 山下 節子

老後ですまだわくわくと趣味の会
断捨離のけじめに迷う戦中派
方言も一緒くたですメール来る
腰痛に行動範囲狭められ
暦ではけじめのつかぬ天気です

鳥取県 佐伯 やえ

つまずいた石にお札を言つて春
仏さまにお逢いする日は紅さして
どん底でみがいたペンと生きている
荷にならぬように足腰きたえとく
子に譲る畑きれいにならしておく

鳥取県 細田 裕花

日向ぼっこ毛玉取り器と遊ぶ午後
予告編五感を刺激して終る
三歳の疲れを知らぬ好奇心
人脈は名刺を持たぬ人ばかり
深刻な話止めよう虹が出た

鳥取県 斉 尾 くにこ

青い夢語る少女のなごり雪
やさしさが少し遅れてシャボン玉
テールを飛び交う知性から花火
力量の器が鯛をひきたてる
信じてる軽く言われて逃亡者

鳥取県 山 本 正 光

人生のおまけで生きるありがたさ
老木の梅耐えぬいて花咲かす
恋人でないがとつても好きなのひと
いい予感あるので髭は剃っておく
これ以上無理だ限度と言つて呑み

鳥取県 松 川 行 男

腹さする女医さんの目をじつと見る
雑談もできる田舎の医者通い
山は春ざわめいて友計報知る
冬衣裳増えてしまった春着出す
腰あげるまではニュースを読んでいる

鳥取県 竹 信 照 彦

無欲かと聞かれそうでもない返事
釈迦如来と阿弥陀如来とどう違う
金のあるヤツも出さなくなるお歳
路の臺去年の日記見て探す
見舞いした友にもらつてくる元氣

鳥取県 西 谷 悦 子

友という財産のある安堵
約束は阿吽の中にある夫婦
ポケットにやつと収めた乱気流
修飾語要らぬざらりと生きてゆく
もうひとつの影が私に意見言う

松江市 松 本 文 子

以下同文いつも同じ位置に居る
未完でも私らしく纏めよう
思うようにいかぬ自然も人の世も
触れあつた肩ふんわりとした誤解
背の高い人が私の邪魔をする

松江市 川 本 畔

よく切れる頭敬遠されている
葱刻む三月春の音を混ぜ
一帖へためらいながら横たわる
あやふやな風だ右とも左とも
雑音の中に芽生えるものがある

松江市 小 川 注 湖

五月晴れ弁当開く孫主役
朝市に笑顔と自慢の品並べ
朝のチラシタ餉の膳に並んでる
朝食べたもの何ですか聞かれてる
ぜいたくは自由に背伸び出来ること

松江市 三島 淞丘

雑音の中に真実聞き分ける

春朧忘れてならぬ人忘れ

邪念との戦つづける喜寿の春

七十路へ趣味のひとつが花咲かす

目を瞑る女の覚悟見てとれる

松江市 松本 知恵子

三・一一方丈記出し読み返す

冬越した春に味方の顔揃う

雑音を追えば火の粉がふりかかる

糸電話ぷつぷつ切つてさようなら

罪はもう許されてゆく春の雪

松江市 錦織 禮子

雑音にまみれて帰る頭陀袋

学生の部屋探しする風物詩

晴れ女ためらつた傘置いて出る

行きすぎて立ち止まる焼いてもやさん

浅い春南天の実が和ませる

出雲市 伊藤 玲子

薦外され松も私も深呼吸

囀りの森をたずねて活もらう

会いたいと思つた頃に逝つたとは

雑音と思つた言葉杖になる

二人三脚結び直してもう少し

出雲市 小白金 房子

百姓に定年はなし農の詩

稲藁の文化大きな技を編む(宝船)

縁あつて肩荷をおろす春の婚

ずつしりと膝に這い寄る児の匂い

改札を抜けて故里顔が待つ(帰省娘)

出雲市 多久和 敬子

相槌の途中居眠りしてしまふ

真相を知っているのは茜雲

花一杯飾り寂しさ紛らわす

子育てで娘段々強くなる

今日よりも明日大きな輪が出来る

出雲市 岸 桂子

ナツメロに忘れたはずの顔が浮く

肩書きがなくて名刺が作れない

脳内革命五感びりびり春を呼ぶ

たとえばの話が好きで机上論

風ひとつ越えて私が甦る

島根県 伊藤 寿美

ラストラン象はゆつくり群を出る

ゆつくり動くわたし独りの時間軸

反故にした約束胸に蹲る

胸の痞流した孫の合格票

ポーカーフエース何も見ぬ振り聞かぬ振り

美作市 山本玉恵

花嫁の姿が見えぬ狐雨

みぞおちのあたりで過去がさわぎ立つ

明暗のドラマを刻む土の橋

意地張って今生きてます背の曲り

この今を生きてる流れ雲走る

美作市 大石 あすなろ

振りあげた父の拳は本物だ

聞き役にまわろう恋の物語り

多数決不満の声を置き去りに

手みやげを持って小骨を抜きに行く

定位置に座った老父の鼻眼鏡

竹原市 岩本笑子

アメリカへおいでよ軽く言うけれど

ひらかなで書くのがんの字優しいね

石段の向こうに春はきつと来る

逃げ急げと私の影法師

水ぬるむプラス思考の夫といふ

竹原市 石原淑子

躍りなさいホワイトデーの魔女の靴

ぎりぎりのどんでんがえしゆめにみる

ここに来て美容ドリנקのんでみた

ばあちゃんが笑う教祖になりました

竹の里竹の紙です竹の筆

府中市 岩本雅代

日溜りの中で聞いている地獄耳

直線をS路と悟る人と棲み

ばらの棘戦う気持ち捨てました

何時の間に車掌ばかりの縄電車

世渡りが下手でケイタイよう持たぬ

府中市 藤岡ヒデコ

長所が短所自分で気付かない個性

ナツメロが青春時代を引き寄せる

青春の一直線の息づかい

3・11黙祷からの趣味の会

三月の雪にも負けぬ庭の草

府中市 馬場利子

字余りの遊びを風の野に晒す

モラルの美しさヒトを引きつける

口止めた本人から口を割る

ウオーキングふたりで和む歌がある

さつき晴明日のヒントが解けて来る

宇部市 平田実男

泥の舟かも知れませんが日本丸

反対は建前基地が生きる糧

冷や飯がやがて血となり肉となる

東電のバツジ萎びるだけ萎び

だんだんと他人の顔をする実家

東かがわ市 川崎 ひかり

森守る人は森から守られる
さつそうと走った過去をもつ廃車

無意識の仕種に出てるお人柄

おっとりとしている人の七変化

昭和史に水盃という別れ

高知市 小川 てるみ

ゆうらゆら揺れてるうちに気が変わる

敵か味方かロボットが進化する

哲学の道の桜の物思い

ここ一番神が私に背を向ける

若者の叫びアラブに春がくる

高知市 小澤 幸泉

万歩計さびついたまま永遠の夢

ふるさとの山河に夢も歌もなし

思い出のひとは越後で母となり

あの秘密まだ裏町に生きている

女房に内緒で聞く古日記

西予市 黒田 茂代

神聖な宇宙支えている香炉

さあ元氣お出しと波のオノマトペ

トンネルを額縁にして天守閣(大洲城)

記憶の奥に咲く赤い花白い花

春の空雲の白馬が駆けてゆく

あづき

(つづき)

富山市 有澤 嘉晃

一粒も残さず昭和育ちです

ぶどうつてよいな同士に囲まれて

ガソリンの値上げ横目に一万歩

「お大事に」薬に愛のある言葉

岐阜市 平野 あずま

家系図を広げ先祖の声を聞く

マンネリの空気吐き出す深呼吸

それぞれの時計で生きる三世代

通販のモデルにつられ買った悔い

和歌山県川柳協会発足20周年記念 全国誌上川柳大会

- 題と選者 各題 2句
「川」 森中恵美子・小島 蘭幸
「つなぐ」 村上 氷筆・新家 完司
「リズム」 佐藤 美文・梅崎 流青
「古道」 三宅 保州 謝選

○投句料 1000円

○投句締切 5月31日(木) 必着

○投句先 〒642-0011

和歌山県海南市黒江1-341

三宅 保州 あて

TEL/FAX(073)482-5098

問い合わせ・連絡先

〒640-8111 和歌山市新通7-17

古久保和子

TEL/FAX(073)423-8930

主催 和歌山県川柳協会

川柳塔の

川柳讃歌

(89)

木津川 計

歲月にすまぬすまぬが積んである

山 本 希久子

へすまぬすまぬを背中にきけば／馬鹿をいうなどまた進む／兵は徐州へ前線へー

負傷した戦友を背負い、麦また麦の戦野を兵たちは声を殺し、影を落して進んだというのである。徐州占領（昭13）後、日本は兵を武漢に向ける。どこまで続くぬかるみちぞ、の勝ち目なき侵略の無暴な戦争に往き、命長らえた兵たちのほとんどは死に絶えた。

無論、「麦と兵隊」が主題ではなからうが、重たいさいつがこの句には、ある。

梅干しの歴史唐辛子の歴史

牧 野 芳 光

戦中、日の丸弁当が奨励された。弁当箱に詰まった白い飯の真ん中に梅干しが一つ。が、芋のツルや米粒なき雑炊が主食になっては、日の丸弁当は夢のまた夢だった。梅干

しをこしらえたのは日本の母たちだった。惣菜もままならぬ貧しい暮しを助けて、梅干し婆になるまで梅はつけられたのである。

唐辛子でキムチをこしらえ続けたのも、朝鮮のオモニ（母）たちだった。民族のエレジー「アリラン」と唐辛子の歴史が重なる。

それならば真つ赤に枯れてやりましよう

居 谷 真理子

ブルースは切ないがルンバは熱い。若き高峰三枝子が歌ったう嘆きの空の夕焼けは／バラの花よりなお紅い／燃やせ情熱 歌えよルンバ。「情熱のルンバ」は茜色の夕焼けや、紅いバラよりなお赤いのである。

そんな情熱色の真つ赤に枯れて、わたしの真実を見てもらいましょう、と切った啖呵の真理子さんも情熱家だった筈である。

向日葵の大声で立つ枯れて尚（秋元不死男）「死して後」む」を超える向日葵の情熱だ。

ときめきという点滴で老いを討つ

山 岡 富美子

『若きウェルテルの悩み』で知られるドイツ最大の作家・ゲーテが一九歳の娘を恋し、求婚までして失恋したのは七四歳のときだった。ときめきという点滴で老いを迎え討つのも八三歳で一期を終えた。

臨終の床での最期のことばは「鎧戸（よろいど）を開けてくれ。もつと光を」であった。

富美子さんは老いたりといえどもまだ光を浴び、全身にときめき色の血をめぐらす。

平凡という贅沢ならばしています

太 田 扶美代

「平凡」の用例を広辞苑に引くと、「平凡に暮す」とあり、愛用する現代国語辞典には「一生を平凡に終わる」とある。扶美代さんの解釈をこの用例に重ねると、「贅沢に暮す」「一生を贅沢に終わる」が平凡ということになる、が扶美代さんの本心ではない。

「平凡」本来の意味は「ごく普通であること」。そんな暮しが贅沢ならば、私たちの生き方はなんと貧しいことか、も扶美代さんの本意ではない。質素な普通の生活で十分とする生き方の勧めなのだ。私も賛成です。

製紙会社つてそんなにもつかるの

田 中 章 子

章子さん、よう読んでくださいました。

一〇六億円もの巨額をカジノでわずか一年の内に乱費した井川意高なるアホはんの行状に呆れた。大王製紙社員の平均年収は五七三万円。社員一人の一八五〇年分が一年で消えた。ああ、アホラシヤの鐘が鳴る。我が家では、もう「エリエール」を使わない。

〔上方芸能〕誌発行人

自選集

小島蘭幸

春の雨家族旅行のプラン組む
書斎春安楽椅子で見る夢は
ホワイトデーが嫌いな男達である
スイッチが入ると鷹の眼になった
三十年は生きると決めているのだが

塩満敏

羽曳野にいやしの殿堂つくります
歳時記に鶴彬忌載せたいね
ふるさとの空に連なる浪速です
妻の庭百花繚乱咲きそう
スタッフは女ざかりの美女ばかり

新家完司

町内を視察しながらウォーキング
背すじ伸ばして若者とハイタッチ
悪役は不本意ですと啼くカラス
何とまあ面白い文字凸と凹
偏西風蛇行の如く千鳥足

恒松町紅

老いすすむ葉いつしか数も増え
雑音が入り話がすすまない
平穏な空幸せをふと思う
目も耳も悪くなつたと老いの愚痴
笑わせて背なをくすぐるやわい指

津守柳伸

微笑みが戻る雪ん子雛まつり
口コミに釣られる主婦の情報網
携帯を持たぬ園児の自己主張
毎月の湯宿感謝をする居職
予報士の顔晴れやかに桜便り

遠山可住

ござござと煎じ薬に凝りはじめ
平成へまだ戦友という絆
夫唱婦随でゆく老々の万歩計
一万円ではあきまへん宝くじ
老いの手に合う雪かきで冬が済み

都 倉 求 芽

ひととせの確執花は背負わない
青空と会話を交わす花の道
花の橋渡るヤジロベエ鼻唄で
クラクションうるさいところは咲かぬ花
改革が進歩になると限らない

土 橋 螢

年齢もひとつ大きくなった春
貧しさの穴が大きくなるばかり
地獄絵の豪華版から竜踊る
太陽に囃され雪が消えてゆく
尻尾かくして善人の真似とする

西 出 楓 楽

やさしさに触れたくて手を温める
今日という日に一献を進ぜよう
よく笑う人でピエロは務まらぬ
昨日ばかり追いかけている目惜時
重箱の隅に真相詰めておく

仁 部 四 郎

「或る意味」の「或る」を説いての解説者
「或る意味」の「或る」はまともな告白か
「或る意味」の「或る」はやっぱり自己弁護
「或る意味」の「或る」に正解ありません
「或る意味」の「或る」にオトナはさわらない

林 瑞 枝

どうぞと言う心の客間胸にある
蕾を三つ男性笑い薔薇を買う
あこがれの帽子が陳謝くり返す
生い立ちを語るむかしの知恵袋
日本列島くるまだらけのバス旅行

前 たもつ

優しい目の主治医二度まで巡り会い
怪しい者じゃないと看護士名札見せ
こんなことまでナースにさせていいですか
入院して体重増やすとは不埒
まどろむことなく神に守られ退院日

政 岡 未 延 子

北斗七星これだけ覚え世を渡る
星占いどのシナリオも私向き
くたびれぬ程度遊びの風の中
風は多彩ひと色ごとにある情け
まだ呆けはきてない風に負けぬ声

三 宅 保 州

ゴールインしたらだあれも居なかった
出る所へ出るほかはない心太
ロボットも捨てられている不況風
名人の包丁少し斜に切り
客に背を向けて熱演する指揮者

宮西弥生

風花に誘われ心まだ青春
生きのびる日に言葉は飾らない
ひとり来てひとり合掌山の春
愛燦燦生命線と背伸びする
明日路の仏は好きな女客

おかげさま

八木千代

体調のよい日はいそいそと炊事
よくよく嚙んで臓器に負担かけぬよう
移動手段は流れ作業で胃腸まで
腸には腸の仕事があつておかげさま
アリガトウ働き尽くす器官たち

八十田洞庵

分別が欲しい魔性の声高よ
古い書架カーマストラその隅
また素通りかピカソの目笑うてる
ゴルフ狂今日はゴマすり役らしい
天と地に生かされ老いること知らず

両川洋々

浄土まで歩くと亡父の足を揉む
西方へ亡父は菩薩に手を引かれ
消防車くらいじゃ胸の火は消せぬ
俺の子だ偏差値高い訳がない
手打ちには遠く除染の日がつづく

河井庸佑

目の動き真と嘘を読み分ける
核心に触れて心の動き見る
纏まらぬ意見司会者腕を見せ
無意味ではない撤退も策の内
準備した祝辞が先に出て焦る

川上大輪

強かな蜷すべては吐き出さぬ
讚美歌で出会い別れは御詠歌で
伝書鳩だった定年までの俺
圏外でしつかり解す肩の凝り
辞書を繰る行方不明にならぬよう

木村あきら

旧型で時化には強い父の船
二番手に着けて余裕のある走り
壁一重御隣り同士仲が良い
残り物食べてカアさんよく肥り
家庭円満中心点に父の椅子

小西雄々

すり足で来る春を待つ雪囲い
両隣お向いさんも高齢者
一人より二人で歩きたい砂丘
酒の出る話へ重い腰を上げ
五線譜もすこしは読めて歌が好き

第130回 大阪川柳の会

日時 6月4日(月) 17時開場・18時締切
会場 ホテルコムズ大阪 地下1階アーバンホール
宿題と選者(各題2句)
△「神話」樋口 裕子 △「困る」宮田 宣子
△「転機」村上 直樹 △「シャツ」住田英比古
会費 1000円 欠席投句 6月2日まで 本田智彦 古
〒532-0025 大阪市淀川区新北野1-3-4 706

命まで取るとは言わぬ梅一輪
長靴を履かせた猫にうら切られ
川柳を尊敬草間彌生殿
もつと勉強をしなはれ陶冶に詩
夕焼けを捜しに母の靴がない

板尾 岳人

雛飾る雛のおしゃべり聞こえそう
上京に雪長靴を買う破目に
ゆとりある暮らしに声もやわらかい
我慢すれば味が味方をしてくれる
傘寿とやしみじみ轍ふり返る

奥田 みつ子

ぐつぐつと眠り樹の芽のいい目覚め
りんご樹の意見に耳をかたむける
剪定を学ぶどの瞳も生き生きと
気の緩みふいと突かれた逆転打
胡蝶蘭少し気楽にしてごらん

斉藤 嘉

温故知新

『清水白柳遺句集』より

あこがれの対角線にあるひとみ
ズボンに折目なし芸術家がすわる
米に手を触れることなく値を定める
マスコミが老人と書く年になり
金殖やす近道をしてサギに合
割箸でつままれ毛虫うろたえる
共稼ぎ突然の母しめ出され
やみ市の時代がうづく半長靴
電化して牛を知らない児に育ち
追跡のスリルにも似たハイウエイ
片恋のノートの端を捨て切れず
椅子の堅さに文学をもて余す
日銀に人影がなし淀屋橋
アメリカをモデルにすれば金が要り
光栄へ木綿ながらも紋を着る
舌打ちと共に座を立つ手くらがり
お一人に一本という味気なさ
同性の目を意識して恋終る



川上大輪選

八幡市 今井万紗子

いい風が擦っていく旅ごころ
指切りを覚えてますかちぎれ雲
落ち込めば赤いマニキュア付けてみる
十指みなようガンバツタ撫でてやる
妙なところいうっかりが父に似て
雑音からいい話だけ聞いておく

河内長野市 針生和代

あの日からまだとうとの一年目
風になった人増えていたクラス会
三寒四温首伸ばしたり縮めたり
進まねば老いにどっぶり浸りそう
錆止めにカルチャー梯子しています
身の丈の欲はまだ持つ笑い皺

大洲市 花岡順子

脳の錆何回洗つても落ちぬ
厄介なものに女の子の涙
優しくはするな不甲斐ない僕に

あふれ出る涙が洗う鍋の底
ゆつくりと力抜くのが難しい
逃げるが勝ちそんな世の中生きてきた

山鹿市 米加田恭代

実現はいつになるのかいい手相
きれいだったそう言われても喜べぬ
辛口を満面笑みでコーティング
年金でオモチャ位は買えるかな
やんわりとしたたかに生き猫柳
ふかひれを思い出すよなつけまつげ

和歌山県 森下よりこ

ご近所にクラス集まる場所がある
明日の段取り狂わす夜半の雨の音
年金談義ますます不安増してくる
いのししのしつぱ並べて干してある
春の夢いっぱい球根の目覚め
蟠り溶かすうらかな春日

高槻市 田 中 由美子

さよならの涙の先にある自由
生涯を本音で生きて傷だらけ
正直に生きて小さな灯をともし
焼き豆腐のようにこんがり嫉妬する
雨降ってよかった家裁から夫婦
会える日は目覚し時計などいらぬ

松江市 山 根 邦 代

楽しいと思う心でこれから
好きな物食べなきゃあとがありません
聞きあきた話しがまたも持ち込まれ
絵手紙に春待つ花の輝きが
世界遺産行ったつもの街歩き
時々自分も褒める事にする

三田市 上 田 ひとみ

何度でも泣いて笑って今日の空
特別な言葉残さず式の朝
逢いたくなったら呼んでみて私の名
何もかも支配するのはその瞳
忘れた訳じゃない 強くなっただけ
お手伝いさせて下さい私にも

広島市 岸 本 清

老人会全員揃い安堵する
大笑いするから病魔寄り付かず
燕から学ぶ子離れ親離れ

出し抜けに手の平返す天の邪鬼
トイレ中電気消されてうろたえる
押しながら我が身を思う車椅子

岸和田市 増 田 隆 昭

遠くから手を合わす師の家族葬
コンビニの握りに母の愛がない
楽しい会ならば少々遠くても
無常とはこれか身に染む通夜の帰途
健忘症すすむ妻の名出てこない
いつか来る末期動揺せぬ覚悟

篠山市 北 澤 稠 民

何もかもやる気無くして酒を飲む
青空に老いてはならぬ背伸びする
パソコンに腹を立てても物言わず
ため息を寝言にいつて目が覚める
減らず口老いて益々盛んなり
熱帯が今日の疲れを忘れさす

宇部市 高 山 清 子

肩書きが取れて生身の価値を知る
知らぬふりするも友への想いやり
距離置きたい人がちよいちよい寄って来る
帯叩きさあ戦よと夜の蝶
黙殺をされて負けたとほぞを噛む
変化球投げライバルの腹さぐる

佐渡市 高野 不二

相模原市 赤木 妙子

足どりも危なっかしく来る見舞
受診日に前の葉が残ってる

手当等なくても育てて来た子供

善人がまだまだ生きている投書

新聞で高校受験試みる

塩竈市 木田 比呂朗

年金が嫌う五月のカレンダー

去年からドラマのようにまだ揺れる

葉桜も屋根のシートの吐息聞く

カラオケの余韻引きずる仕舞風呂

実直な生き方きらう鯨尺

福島県 七ツ森 客山

柩打つ音が読経の中にある

喧嘩相手の卒寿の母の軽い骨

一周忌海の心を聴きに行く

明日へと何度も夜に誓い立て

上々の出来に陥穽用意され

東京都 井上 つよし

停電で一句浮かんだ雪明り

笑点が健康法の老夫婦

茶柱が立った甲斐無く参加賞

先生よりも老けた生徒のクラス会

訓練の避難スムーズだったのに

杖持たず今日も娘にぶらさがる

生きねばならぬ孫の子供を抱くまでは

知人には逢わずじまいの古里の道

三つ四つ忘れて八十路恙なし

捨てられぬ一箸ほどの冷や御飯

豊橋市 藤田 千休

一身上の都合で痩せるダイエット

酸欠を防ぐ節穴ここかしこ

錆止めを塗って若さをキープする

家計簿に妻の溜息てんこもり

適齢期過ぎて規制を緩和する

京都市 清水 英旺

親不孝子不孝ながらある絆

顔じゃない立振舞の女振り

しまい忘れ鳴る風鈴のうつけ音

賽銭勘定どこか神様らしくない

人の世は厄介なものでも生きる

大阪市 安藤 なつこ

幸せにロールキャベツが煮えている

娘が自立するため親がまず自立

夢をみるのに年齢は無関係

人のため祈れる人の美しさ

祈るより一緒に泣いてくれる人

大阪市 松田 聰

素直さが心惑わす時もある
ドラマだと知っているのにのめり込む
聞こえない見ないふりをする平和
気のきいた言葉ひとつで笑みがでる
泣き叫ぶ子供に負けぬのも嬉

堺市 羽田野 洋介

情報過多どれを信じてよいのやら
断捨離を進め身辺軽くする
いつも通り夢だけもらうジャンボくじ
波風にも顔をそむけぬ老いの意地
志まだ道半ば老いの坂

貝塚市 石田 ひろ子

車では見えぬ景色を歩が拾う
ご会葬御礼ばかりの掲示板
誕生日何も無いけど紅をひく
レストラン幸せそうな顔ばかり
顔知らぬ母に鏡の中で逢う

河内長野市 谷 久美子

不機嫌な顔が鏡を曇らせる
即答を避けて回りの様子見る
気持だけ勝っていますと空威張り
決めた事守れない子の自己主張
一回忌避難袋を確かめる

河内長野市 松岡 篤

サインより三文判が信じられ
ついでにとされる質問要注意
あの人の土産地酒と決めている
僕の道ナビゲーターは僕の妻
試供品つなぎ美肌を保ってる

吹田市 藏田 光子

読書きらい後悔してる語彙語感
老眼がなおさら本を遠ざける
学ぶことまだまだあつてページ繰る
泣かされても半分こする気のいい子
雑音で半分聞けず空返事

豊中市 池田 純子

激安の旅はかけ足心置き
マフラーを取ってごらんと春一番
コーヒーのシミも思い出亡父の服
偶然が微笑んだから一歩出る
重ね着を一枚脱いで春を待つ

富田林市 関 よしみ

水仙の白い香りで洗う脳
この高さ届くとくり返す助走
虹が出たそろそろ二人仲直り
幸せの形で走るランドセル
封筒にスルリと入ったのは誤字

富田林市 山野寿之

おみくじの恋は叶うと出たけれど

溺れてる俺を見ているネオン街

僧が呼ぶ春はもうすぐ火よ水よ

遠くからそつと見ているそれも愛

続編を探し続ける芋の蔓

寝屋川市 岡本 勲

春風がそつと追憶語り出す

年金だけで赤字出さない妻がおる

はればれと胸ときめかす夢二の絵

せめて一つは役に立ちたいボランテニア

風邪の床夫の炊いた三分粥

東大阪市 西田 いくひろ

確定申告済ませて頭軽くなる

ゴルフマナー出来てもスコア伸び悩む

根回しが利いて意見が一致する

夫婦でも懐具合は明かさない

バーゲンは半値以下まで買わず待つ

枚方市 河田 洋子

置く場所を決めてたはずがそこに無い

忘れても笑ってすます歳になり

たんすには忘れられない母心

年忘れ派手な格好してみた

カレンダーメモを忘れず見る日課

神戸市 能勢利子

早い目に家出ていつも待つはめに

どっさりの没句にめげず天目指す

一夜潰け試験終ればみな忘れ

飾らないそれが私の生きる術

秘密持ち寝言でばれるのが恐い

神戸市 輿水 弘

満腹の旅の土産は話しだけ

妻の目が家計簿開き腕を組む

晩酌で一人舟こぐ父がいる

よちよちの素足で大地つかんでる

亡き祖母の立ち振る舞いはもらいます

神戸市 木村 忠義

まだいける老いの心に種をまく

百歳のカラオケパワー衰えぬ

転ぶたびなにかを学び立ち上がる

B面の心が同意してくれぬ

善いことを考え気持ちよく生きる

神戸市 山根 弘子

主婦の座を嫁に譲って趣味に生き

子に譲る言葉は一つありがとう

ためらってチャンスのがしたプロポーズ

川柳は老いの二人の潤滑油

志立てて青春ど真ん中

篠山市 酒井真由

ひっそりという居酒屋の片隅に

大笑いしたあと不意に泣きじゃくる

一芸に秀で天涯孤独なり

私の涙ひとつぶさしあげる

春一番大阪維新加速する

西宮市 株元玲子

この一年絆の一語考える

笑い合う友のいる今ありがたい

コンパスで自分の世界描いてる

目標のない道ゆるり歩きます

昨夜の土砂降りも今朝はご機嫌で

奈良市 大久保真澄

重すぎる絆引き裂きたい時も

嗜むって底抜けに飲むことです

すぐキレる何とやらやましい若さ

捨てられず片付けられずすわり込む

出来のいいダンナだ妻を頼らない

和歌山県 小川イセ

湯呑みから話こぼれる掘炬燵

老いて尚多忙な日日のありがたさ

五年日記まだまだ元氣三年目

ペチャンコにされた夢まだ捨て切れず

地下足袋をぬぐ充実感が満ちてくる

倉吉市 田中紀美恵

春の草背伸びしすぎて睨まれた

お土産を開ければ旅の匂いする

パソコンはいい仕事する友達だ

妻三役掃除洗濯賄い婦

寒い夜は熱燗のめと胃が騒ぐ

米子市 野川宣子

満天の星が邪心を捨てさせる

日本語の話せぬ花が店先に

耳を澄ませば地球の軋む気配する

空っぽの腹案民をもてあそぶ

揉めぬように空っぽ金庫見せておく

米子市 見山温子

雪が止みしだれた竹が背を伸ばす

恵方寿司一本食い無理になる

雪が消えほつと束の間黄砂来る

原発の救世主は何処にいる

春日和行きかうマスク花粉症

松江市 藤井寿代

瓦礫にもめげずタンポポ自己主張

畑うつ今日という日を楽しんで

ころころと笑えば金もまわり出す

文句も言わずついて来るのは影法師

グリーンシャワー浴びて人間取り戻す

岡山市 工藤 千代子

指紋ベタベタ重い手紙を頂いた
花曇り小さな嘘に責められる
去る人も去って身軽になった著
正直に律義に回っているお寿司
歯の欠けたところにプライドが触れる

岡山市 藤 成 操 江

相談という名で決を迫られる
絵手紙のさくらに行くと出す返事
さりげなく今日も探している眼鏡
百均に行けばいつもの顔に合う
歳月が癒してくれた喪の痛み

竹原市 若 年 幸 子

鬼を飼いだりの砦ガードする
人生はパズルゆっくり解くことに
リモコンが賢くなって仕切られる
嬉しさも悲しさも皆仏前へ
デジカメへ私の遺影まだ撮れぬ

四国中央市 篠 原 久

今日の愚痴みんな掃除機吸いました
唐辛子効いた答えを差しあげる
友見舞う笑い袋を両の手に
京料理中味に味方する器
心揺れる諭吉目の前向き来する

阿波市 三 浦 千津子

晩年の手習い調子付いて来た
年波や残り時間は宝物
嘸み合わぬ話と悟るちぎれ雲
失敗を笑えばなしにする時効
満開のさくら描き足すものはない

松山市 神 野 きつこ

納骨日晴れ間に咲いた寒桜
新しい墓に並んだ父子の壺
開眼供養水子が亡父を手招きし
雛飾り今年の春も眠りこけ
親切にされて疑い深くなる

香南市 桑 名 孝 雄

春ですねラン・スー・ミキが萌えている
梅一輪あれよあれよと春になる
雑草がゲリラのように顔を出す
大根を蒔いて日本の自給率
なんとまあ頼りなかった力こぶ

札幌市 佐 藤 登美子

豪雪地めざめの遅い猫柳
春嵐霧氷の華も乙なもの
口を開け昼寝の君へ恋も冷め
芸の無さ裸自慢と寒いギャグ
電話魔の友へ居留守のメッセージ

横浜市 巖田 かず枝

お互いを惚けないように見張ってる

年毎に子等と会食増やす日々

使いたい言葉の一つお陰様

アイライン引いて目力強くする

静岡市 渡辺 芳子

当り前みんな違つてみんないい

解り合える人だけが泣く葬儀場

こうなりたくない見本の人がしゃべってる

過去全部背負つて今を生きている

熱海市 三谷 圭角

三分咲き花より多き目白かな

夢に出た母と畔でのお弁当

ひよつとして当るかもかと宝くじ

どの医者も加齢のせいと腹が立ち

愛知県 樺 嶺 志

メモ持ちつ今日も買い過ぎにわか主夫

心決め捨てた手紙をまた拾う

余所の孫行儀の悪さつい比べ

災害に備えるよりもつい一杯

江南市 脇田 雅美

梯子酒口を開ければ舌もつれ

口下手と演台立てば雄弁者

吊り橋を無事に渡つて握手する

捨てられた猫をペットに癒す日々

大阪市 高杉 力

大好きな持ち歌先に唄われる

入浴剤今日は熱海で明日草津

母の声聞こえてきそう初メール

春のせいにしておく上着脱ぎ忘れ

大阪市 西川 冷子

ふる里はすぐそこなのに原発地

命縮め仮設暮らしの先見えず

形見分け大事に眺め涙する

頬なでる風の温みは浅い春

大阪市 前川 善之

マイナンバー罪を犯したように見え

宝くじ当らぬものの代名詞

夫婦ならあれこれそれでわかり合う

渡す人渡せぬ人と悩むチョコ

大阪市 太田 としお

大臣より偉い人です御袋は

自分自身を叱りつけない時がある

政治家を責めて自分を慰める

斜めから見れば政治家おもしろい

大阪市 吉田 知之

自販機の釣銭数え慎重派

君が代に起立しないとクビと言う

名を忘れ軽い会釈で急ぎ足

大和撫子知らぬ若者増えている

大阪市 平井露芳

赤飯をチンして食べた誕生日
念入りの手洗い爪を先ず切つて
内視鏡会社の不正まで見えず
春雨や濡れたらやつぱりあきまへん

大阪市 安田由美子

コンクリートのお堂に赤い前垂れが
二歳児が数珠を手にして祈ります
インフルエンザビニールテントの待合室
ペット豚ゆらりゆらりとしつぱ振る

大阪市 梅里南天

生き物が光り震えるこの世界
おみなごの涙に溶けた赤い月
冬も良し宇宙の寒さ知る時に
彗星の蒼いしつぱを齧りつつ

大阪市 柴本ばつは

八十八夜母の手揉みが光つて
長いものには捲かれましようと言がいう
社のゴミ出し社長がしてるこの不況
踏みどころ踏んでおります次期課長

大阪市 浅井公平

年とれば淋しくなると今解り
年老いて絆の意味が解りかけ
船旅がしたい金なし暇もなし
仲間割れ直す努力もまた楽し

堺市 増田和幸

枯木には水は無駄だと福祉切り
長生きを自慢できない文明国
知事市長踏台にして永田町
宿と餌少なくなった雀の子

堺市 近藤治子

銀しやりがまぶしく見えた成長期
アニメ見て笑い転げている若さ
一粒のチョコがほっこり温める
開いたり閉じたりはしゃぐランドセル

池田市 上山堅坊

居酒屋の音階狂う政治論
川柳で凌いだ妻の突然死
そわそわとさせる小さい隠しごと
電力不足なのに勧める全電化

池田市 多田契子

老友と花をひとひら着る梅見
花大根教えて兄は認知症
ストレスがたまっただけで医院出る
悪い事必ず当る処世訓

泉津市 助川和美

松屋町値と相談の雛の顔
ベランダに布団の花が咲く団地
氷枕一人暮しは寂しいよ
いい嫁や生きてるうちに言うてんか

泉佐野市 稲葉 洋

菌ブラシが一本朝のスターター

まだ死ぬ気ないから三つ禁守る

これでええこれしか出来ぬ昨日今日

詩情など無いがホロツとする夕陽

交野市 田岡 久幸

こういう本があると話した君は亡し

けんかしたもとを忘れている平和

東大でこんなものかと見るテレビ

疎まれる訳が蛇にはわからない

河内長野市 八木 加修子

身籠った娘に幸あれと背に祈る

ひらひらと妖精のようプリマ舞う

言い分けをいっばい用意肝日

新しい春を何回見てきたか

河内長野市 木見谷 孝代

頭打ち変形しても意地通す

骨折り損しても身につくものがある

絵手紙が未知の私を掘り起こす

手になじむ紬の温み針仕事

河内長野市 山本 エミ

止められぬ酒と煙草とお茶漬けも

墓参り煙ただよう石地藏

子を叱る鬼の心と母心

靴鞆スーツに合うかりハール

河内長野市 穂口 正子

一言もしゃべることなく死んだ犬

小百合より若いはずだと妻を見る

この亭主「退屈男」か「光圀」か

仲直り出来ず言葉に角残す

河内長野市 辻村 ヒロ

元氣だね夫婦喧嘩を子が笑う

朝ごはん薬のために食べている

隠したい私もさらすペンの先

年金に相談してる旅プラン

河内長野市 藤塚 克三

逃げ腰で代官妻に物申す

朝光に生きる道筋教えられ

鍵穴が合わない二人すきま風

あても無く時代遅れがこち良い

岸和田市 中岡 香代

胸の奥誰にも言えぬ人が住む

改めて挨拶すると潔い風

被災地の一番星はママの星

折り返す頃にロマンの切れっ端

豊中市 貝塚 正子

外面は良くて家では恐い顔

赤い服還暦すぎて好きになり

近ごろはトント見かけぬ赤電話

ウォーキング見知らぬ人と歩調合い

豊中市 石橋 優明

古畳間がごろりと横になり
車掌さん板尾岳人さんの声だ
空耳か春の小さく爆ぜる音
どぶ板の下から鬼がこんには

豊中市 荒巻 夢

カットした髪の長さよ春日和
美容院鉢の先に噂のせ
電線に鳥が群れてゴミ会議
鯛のあらぎよろりわたしを睨んでる

豊中市 源田 啓生

歳のせい納豆ほどに粘れない
磨り減った靴が歴史を刻んでる
少しづつ老いを囁んでる洗濯機
みんな行くあの世のビデオあれば良い

富田林市 古田 千華

廃村の噂の庭は花吹雪
青空はどこへも逃げぬ花吹雪
天上の父母に聞きたい二ツ三ツ
頂点を目指して蹴ったゴール球

寝屋川市 小谷 滋彦

列島をくの字に曲げた大寒波
惜敗をかさねて獲った甲子園
意見より空気で決まる恐ろしさ
高齢化つぎに来るのは長寿税

羽曳野市 磯本 洋一

国難の時を尻目にヤジ議會
公約の横に消しゴム置いている
山の道落葉カラコロ鬼ごっこ
食べ難いハンバーガーが何故流行る

羽曳野市 安本 美喜

くちびるを閉ざし偽り語らずに
就活の不安座禪を組んで居る
アイシャドー入れているような桜鯛
思いきり漫画の読める春や春

枚方市 坂本 ミヨノ

スランプをワイングラスに癒される
検診の結果祈りて待つ怖さ
病弱と愚痴を言うては旅が好き
五線譜を無視で歌湧く音痴です

枚方市 松原 保

ほけ防止歩きながらの般若経
電飾の影に隠れたホームレス
タバコダメ医師の目を見て降参し
復興を政治と風が通せんば

松原市 大嶋 信次

花だより花の心を探りたい
がん年齢わが細胞のぐれ始め
タクシーに乗ると景気を尋ねたし
街路樹のクロガネモチの自己主張

松原市 市川 雄太

八回をしのぎ抑えに後任す
大阪のパワーを皆に届けよう
口元の確認もするマーケティング
人々の絆深めた震災後

箕面市 寺井 柳童

子の前はまだ照れ臭いベアルック
噛み慣れてやつとしつくり総入れ歯
医者の前元氣に見せるやせ我慢
儲けたと思う一日閨年

箕面市 酒井 紀子

逢いたいと風の便りに聞きました
私の為にだけ買う冬の薔薇
風向きが変わってきました宴のあと
置時計少しなまけていいのです

八尾市 前田 紀雄

病み上り初の外出無事帰還
取り敢えず生きる妨げ無くしましよ
節電で我家の主役カイロです
七巡目未だ好い事何もない

八尾市 山根 妙子

ランドセル爺や婆やの夢背負い
挨拶はしたけどえーとどなたかな
昼休み新入社員らしき群
指先でページをめくるスマホ連

八尾市 田邊 浩三

寒梅も除染作業に目をそむけ
休肝日梅酒をそつと舐めてみる
イスよりも手当増額望む妻
わが家でも亭主八策ひねる妻

大阪府 小栢 こずえ

負けん気を心のバネにして暮す
来る当てもないのにポスト覗いてる
振り下ろす鍬に手心啓蟄日
子は巣立ち親を送って開花する

大阪府 坂口 公子

つくづくと齡争えぬ三面鏡
五体満足下には出来ない皆の恩
冗談の百三十迄は軽そうな
料理好きついて来ないのが老いの口

大阪府 神野 千恵子

脳内を飛び交う疑問符感嘆符
ありがとう人と人との潤滑油
日記からはみだしそうな嬉しい日
つもりだけ一杯詰めて旅に出る

大阪府 高木 道子

どことなく手配写真の様な顔
一徹も溶かす柔軟剤の酒
お水取り走る火の粉が春を呼ぶ
三月の道は掘ったり埋めたり

大阪府 若月 祐作

奈良県 谷川 憲

米寿越え葉一粒良しとする
かに喰いに雪山見ての旅も良い
雨に下駄露天風呂などはしこして
感謝こめボジョレヌーボー飲んでます

大阪府 畑 中 節 子

竹藪が鳥籠となる裏の山
ない知恵を時々振ってたしめめる
我がままな人生ドラマ自主自演
芽柳のさみどり淡く春動く

奈良市 前田 弘 恵

スピーチの半ばで頭白くなり
義理果たし財布緩める戦中派
雛まつり幾つになっても心浮き
お笑いは万能薬と落語追い

奈良市 矢野 良 一

めんどうだ相槌打って済ましとこ
老いたなあ嘘をつかない影法師
検診で葉の数がまた増える
雨の午後川柳塔を読みかえす

奈良市 尾 畑 なを江

安眠はピアノソナタを聴いてから
貼り替えた障子に猫の体当たり
不器用な人で言葉も飾らない
耳元でイヤイヤをするイヤリング

聞き分けのないパソコンに困ってる
上澄みの底にうごめく悪だくみ
スマホ見て新聞読まぬ朝電車
この世になお役割残す古稀の春

和歌山市 坂 部 かずみ

寄せ植えの個性バラバラ助け合い
新聞を閉じて事件も忘れられ
一寝入り春の身体になつていく
新聞の地震に包む青いネギ

和歌山市 磯 部 義 雄

身長は止まり体重だけ増える
春が来たセンバツが来たお祭りだ
十五歳女鳥人ソチで飛べ
被災地へまだ続けねば義援金

岩出市 村 中 悦 男

連続日記私は強く生きている
小さな段差拾って年にさからわす
しわの奥少しピンクが枯れ残る
焦ってる心正せと釘曲がる

紀の川市 辻 内 次 根

米を研ぐやはり男の洗う音
感謝する度に自分が見えてくる
年金で食えるかどうか試し中
十キロの地下で何かがある地鳴り

田辺市 大峠 可動

鈴ばかり集めて熊に見栄を張る
夫婦とは語り尽くせぬものを持つ
四月馬鹿つくり話に酔うている
四捨五入あとはわたしの命です

紀の川市 楠原 富子

後戻り出来ない過去にしがみつく
勢いに乗って渡った向う岸
判決に古い時計が動き出す
電話口鬼が仏の声となる

橋本市 石田 隆彦

春うらら猫は声上げラブコール
赤赤と燃えて手を振る瀬戸夕日
赤い夕日明日またねと顔かくす
偏差値に門閉ざされた志望校

尼崎市 田原 一兆

旧漢字戀は相寄る動きする
孤立無援道幅すこし広くとる
曲解に冬の居心地耐えて春
熱あつのうどんにつこり寒の入り

尼崎市 小池 幸子

春暖に散歩の距離も徐々に伸び
冬ごもりしたい日もある八十半ば
飲んだかな時々悩む八十路の記憶
ささくれた心和ますハグ効果

加東市 岩本 美緒子

寒い日は焦らず巡る春待とう
捨てるもの娘に整理任せます
日本の節目うれしい春です
束の間の刻を忘る筆余生

加東市 安達 厚

鉛一つもらって和むバスの旅
もうどんな保険もいらん八十路です
年寄りをうるうるさせるピッピ
干柿のような顔だと孫笑う

加東市 黒崎 美沙子

退院の許しもらって食すすむ
健康で作句の出来る有難さ
言葉尻とらえひろがる風に舞う
年老いて義母の気持も分りかけ

川西市 山口 不動

ポストから相手に渡る音がする
マドンナの風の便りを待っている
完成が間近の家の夜なべの灯
定期便夕日に向かいまっしぐら

川西市 日野岡 和之

山妻はバレンティンと弾くピアノ
見かけよりころをみてる子等ずばり
泣き笑い嬉しすぎての泪顔
年金も老後のためと貯める癖

神戸市 長川 哲夫

母だけを信じ過ぎた虐待死
後出しの鉄咎めるシオマネキ
惜しむ春ウインクしてるダルマの目
お互いを氣遣いながら内裏雛

神戸市 玄 番 美恵子

ボンコツも夢はてるまで走ります
羨して私色になるベツト
お人好しあされる程のくぎ煮炊く
腹帯にそっと手を添え待つ命

三田市 雑賀 一 泉

スカイツリー元気をくれる立ち姿
ロボットもそのうちきつと怒りそう
子供らの笑顔で溶かす夫婦仲
阿修羅像二時間並び垣間見る

三田市 辻 開 子

青空があればこれせよと背中押す
折角の講演の声小さくて
朝寝した昼寝も出来て夜も早寝
一分のリハビリをせぬもどかしさ

篠山市 永井 かほる

年毎に欠点ふえて困る日々
仲よしの友に欠点よくつかれ
売り言葉買って欠点拾われる
雑草の元氣もらいに菜園へ

篠山市 谷 田 多美子

わくわくと今日が終ってまたあした
自惚れてのった踏台ふみ外す
生かされて今朝も豆腐のお味噌汁
一坪の庭に春の香春の詩

篠山市 藤井 美智子

目立たずにぶさひたひた忍び寄る
孫達は冬でもアイスクリーム党
人生の階段勢いつけのぼる
済んでからあれやこれやと悩む癖

篠山市 沢山 啓子

子供等の老後を案じ日々老いる
震災で持論を変える哲学者
拾い猫いつか夫婦になつて春
東北のどこに届いた我が温み

篠山市 酒井 健二

おすましで歩く貴女も歳をとる
残り湯の温みを流し春を知る
波の音黙祷で聞く北の海
ちぐはぐな願い集める宮参り

篠山市 石田 久子

筋書きはいらぬ女のきまま旅
待つ方も待たせる方も気が焦る
老いるとも心の化粧忘れずに
悩み事同じ友とで話し合い

戦争の話を拒む母の耳

篠山市 佐々木 勇

英語にはピリオド打てと鍛えられ
真つ当な一人称で生きて行く
沖繩の悲劇を残す不発弾

宝塚市 丸山 孔一

はるばると旅路を想う湯の香り
立ったまま靴下履けるまだいける
投げ込んだ不平屑籠溢れ出る
迷ったらやれとあんたは言うけれど

西宮市 泉水 牙子

お日さまに晒すわたしの裏表
一万歩あるける足に感謝する
耳たぶが伸びそう重いイヤリング
わたくしがこわれぬ内に恩返す

三木市 山口 久子

初孫に祖父母が飾るおひなさま
昼寝して真夜中起きて五七五
孫叱り子から叱られ曾父母なり
リハビリに昔なつかし唱歌かな

鳥取市 津村 律子

春心奈大和歩夢の初節句
嬉しい出費年金だけで足りません
甥五人姪八人の総本家
広島も名古屋出雲も近くなる

十指みな役目果して生きている

鳥取市 山口 千代子

酒の力で本音ボツボツしゃべり出し
恋や愛有るから此の世楽しめる
振り返り若さの宝今何処へ

倉吉市 岡崎 美知江

嫌な事胸に畳んでしまう癖
幸せだ静かに飲めるぜいたくさ
車座の一升瓶が輪を保つ
やりくりのうまい大臣いる我が家

鳥取市 大前 安子

甘えては突っ放されて築く愛
祖母の所作ひな壇飾る孫の所作
三色の話しながら雛へ餅
懐手していた夫も雛語り

鳥取市 坂本 とも湖

お陰様老母の笑顔に助けられ
独特な君のオーラが僕に見え
希望への道は曲れど一本だ
彼の手紙人柄が出て好きになり

米子市 後藤 宏之

走り書きメモを渡して目で合図
あとがきのページ見てから読み始め
空耳かうれしい知らせは抓る
大勝負顔を見合つて形見分け

八十二臓器提供拒まれる

米子市 小塩 智加恵

孫結婚私も曾孫抱けるかも

コーヒ―が沸くとパン焼くストーリー

三十年貰った年金孫に消え

米子市 湯浅 久司

元氣だね文芸欄に友の詩

義援金還付は受けぬつもりです

不文律文字にできないことだから

雪掻きの準備ができて部屋にいる

米子市 生田 寒之

幸せはおでんの汁で猫まんま

どうにでもなりそうな日が時にある

ピンポンに返事してからよっこらしょ

東電が頭チョイ下げ値を上げる

米子市 加藤 正二

どっこいしょ腰に伺い立ち上る

惚けまいと思っても字はよく忘れ

探し物日課になってひと騒ぎ

大雪が田舎の暮し曝け出す

米子市 田村 周子

空っぽの脳味噌さらえボケ防止

老いの身に病と寒さ攻めてくる

耳遠くオレオレさぎと珍問答

母が選んだ婿はやっぱり日本一

永田町壁に耳ある目もござる

境港市 中井 虎尾

政治劇民はあきれて見てござる

消費税上げちゃあならぬ選挙前

虫偏に蛙や蛇もある漢字

鳥取県 田口 清帆

いつまでも若くありたい初鏡

東日本飛躍を目指し復興を

寒波来るたび避難の人想う

朝一服心癒され満たされる

鳥取県 大塚 美代子

焼芋の匂い団地の主婦集め

松茸の匂いを嗅いで回り道

春が来て草の匂いを嗅ぐ子犬

ナフタリン匂い放して雛祭り

鳥取県 飯野 菖子

初詣で日本の明日は絆です

願いごと聞いてくれない神がいる

願っても何時も晴れとは決まらない

何処までも絆の風が吹いている

鳥取県 橋谷 静江

羽ばたいて登竜門を潜る孫

子や孫がスーブのさめぬ距離にいる

次世代の育ち盛りへ投資する

私の時いた種です孫曾孫

孫成人晩酌の友一人増え

鳥取県 岡村孝明

カーブ投げ妻の反応待っている

せつかくの抹茶お点前吾独り
独居爺今日も一日物言わず

安来市 原 煩惱児

隠しても蟻が探して菓子食べる

忘れ物日に危険度増える爺

花の咲く道を探して老い二人

まだ生きる生きねばならぬ医者通い

松江市 相見柳歩

美作市 小林妻子

目次には未来を照らす音を書く

外国に遊びに行つていて不況

くすぐってケンカが終わるふたりです

豊作を祈らぬ年はない祭り

見つけたよボタンをはずす時の癖

山歩き春だはるだと路の臺

仏との約束をして生を受け

極楽へ辿りつくとは限らない

出雲市 黒目英男

岡山市 永見心咲

長い旅終えて安堵の胸をなで

花便り騒ぎときめき連れて来た

国会のスロー論議に寝てしまう

めを出した浅蜷つついてみたくなる

最終章思い描けず悩んでる

プランター分葱が溢れ出て四月

川柳は人生の友楽しまん

授かった命に押されゴールイン

雲南市 菅田かつ子

倉吉市 堀 かずこ

生き生きと出て行く今朝の靴すべり

ひとり身に世間の風が身にしみる

憧れは驚でした鳥の仔

健康を取り戻したい今年こそ

窓際に疲れた顔のシクラメン

孫を見てニコツと笑顔叱れない

また会おうその指切りの重たすぎ

ふと思う身寄らない身の先のこと

雲南市 武島 ちよえ

倉吉市 前田 喜美子

絞つても出ない知恵です借りにゆく

老いの身は心に何時も探しもの

聞いてます耳から耳へ抜けさせて

迷走の舵取る総理日々頭痛

マイペース脱線もしいい仲間

わくわくはないが八十路の誕生日

すぐそこで春が行ったり来たりする

優勝にオーラ漂ういい笑顔

竹原市 土井輝恵

北九州市 小松紀子

辛口の医者の言葉を聞き流す
ホームには行きたくないとリハビリへ
些細な事で尊敬したり怒ったり
小さい幸数えて今日も黄昏れる

竹原市 六田半徳

福岡県 本田さくら

がれき処理法に基づく協力で
備えよう日本列島大地震
この夏へ節電新エネ知恵を出せ
復興はまず政治から迅速に

山口市 中前幸子

唐津市 吉富節子

紺碧の海からひろう青春譜
どこまでも歩く一直線の道

歯並びの悪さ標準語にならぬ

金魚鉢ゆらりゆらりと明日を描く

今治市 渡邊伊津志

唐津市 岩崎實

早寝早起き守って今日を生きている

馬鹿笑いした日はいつも熟睡す

幸せの物指し変えた大地震

人生にあるのは何時も今である

高知市 三谷待太郎

唐津市 北村松風

何かにと諦めないけど頑張れない

ボケ来てもマニフェストなど当てにせぬ

庭に来るメジロどうしたどこ行った

またかいな再発防止に努めます

物忘れ思い出せたら良しとする
出来ること出来る時にはする余生
アバウトに生きてストレスためぬ知恵
七十路まだまだ若いこれからだ

冬將軍雪をたつぷり置きみやげ
孤立死をただ壁だけが見届ける
宝くじ夢買う人の長い列

患者さん杖にかわいいマスコット

またひとり赤線を引くクラス会

こんな時こうしてくれたと亡夫想う

間を置けば見えない物も見えてくる

高い鼻折られ相談困り果て

落ち込んでばかりいられぬ日は昇る

立ちあがる度合が長くやつとこさ

聞きあきた昔ばなしがはじまった

ぼとぼととしづくが落ちて消えてゆく

沿道の旗にランナー背を押され

ニューモード着せたペットで応募する

菜種梅雨いつお日様の顔みせる

十三の階段普通通造らない

佐賀県 清水園實

祖先には子孫繁栄感謝する

赤ちゃんが急になき出し一安堵
人の道ふみはずさずに父母の顔
年毎に高くなるのは風呂のイス

山鹿市 三谷 たん吉

利口なら自然の力で生きられる
孫どもよ政治化学に近づくな
政界の絆は全て銭がらみ
心にも無いこと言う奴多過ぎる

シドニー 坂上 のり子

病む友を見舞うブーケに祈り込め
健康食あれこれ勧め先に逝く
名と顔のピント忘れた頃に合う
ニュー水着いかにも泳げそうに見え

メルボルン 藤原 ポン吉

桜色ほんのり染めて巣立ちます
梅をみてなにかそわそわ春が来た
桜餅がぶり匂うは祖母の顔
旅立ちと言われ背中を押す桜

弘前市 高橋 洋子

節分会海に向こうの豆を撒き
春の陽へ飛ばしたくなるシャボン玉
動かない雲よ確かな悠長さ
見納めと桜何年見たことか

弘前市 高森 一吞

出会待つ野良で息子は嫁さがし
ポイントは一言葉が言わせない
秘書室の電話知ってる内緒ごと
ベストセラー五十六年の絵日記

昭島市 野口 忠

冷え込んだ晩にあいにく酒が切れ
春動くバレンタインのチョコ売場
断りの電話の語尾が霧の中
やあやあと会った相手の名が出ない

東京都 大竹 一良

解ったの言葉一つの老夫婦
変化する時は総じて悪くなる
あきらめて次の機会を待つ意志を
馬鹿もんと言われて嬉し真の友

東京都 高岡 弥生

最後にはどんな仕事も人柄よ
寒すぎて花粉飛ぶ時期待つてみる
返事なし心が痛む我が友よ
飛び立てる時を待つて我が息子

清瀬市 岸 愛三

離れば離るるほどにふくる恋
声と笑み江戸のしぐさが胸にくる
千貫の岩にただつぶされる我
失恋のあと待つ酒の依存症

(有澤嘉見さんと平野あずまさんの句は46頁にあります)

新川柳鑑賞 (3)

麻生 路郎

細い道との無花果も手がとどき

(雨 吉)

空は碧い。空気は澄みきっている。背後には山が迫っている。家と家とを縫うて細い道が少しづつ登り坂になり、無花果が道端へ突き出ているというような情景が眼に浮んで、詩情豊かな句である。

母は来すたのんだ梅の壺も来す

(霞 乃)

都会へかたずいている娘から、国の母へチヨイチヨイ出て来るように云つてやつてもなかなか腰が上らないのが国の母である。娘には逢いたい、さてとなると、何んとか彼とか故障が出来る。そしてこのびのびになつてしまふ。「母は来す」と、ブツつけに上五が、そうした事情をうなずかせるに足る表現となっている。

母が来ないために、「たのんだ梅の壺も来す」なのである。娘にとつては母にも逢いた

いが、梅干は故郷をかみしめるためのノスタルジヤなのである。

落下したイチゴ家でも買つていた

(白 水)

出はじめの苺なんて、口にするのも、もつたないと思うほど値段が高い。それを、ちょいちょい横眼で睨んで通っていると、いつのほとともなく値段が下がっている。そこで、食後にとつて買つて帰つたら「家でも買っていた」というのである。苺に限つて、そんな場合があるのも、色彩の魅力がそうさせるのかも知れない。

王の座にましますメロン売れ残り

(柳川亭)

果物屋の店は街さへも美しく見せる。いろいろの果物が、いろいろの色彩で、陳列されているからである。

その中で特に美しいという訳ではないが、珍しいのと、風味が高尚なのと、姿が偉大でしかも高価な点から王座を占めているのがメロンである。そのメロンが売れ残つたのを「王の座にまします」と擬人法で、しかも敬語で表現しているところに、何だかみじめさが強調されている。寧ろユーモア味を感じさせられるのである。

よつこでバナナを買えと
ねだつたに

(吟 女)

ある町角でバナナのたたき売りをしているのが眼に這入つた途端に、今は亡き子が偲ばれたのである。

女親らしい追憶でもあるし、「ねだつたに」の措字が、追憶であることを確定させているではないか。「バナナ」も動くようで動かないことを思うと、この句は多分作者の実感なのであろう。

買つて食つ蜜柑じゃないが皮のかさ

(旭 童)

作者は農家の人であるから、その実感をそのまま句にされたものと思う。喰べ終わつた時のみかんの皮のうす高いかさを見て、買つて食う蜜柑ではないが、こんなにも沢山な皮を捨てるといふことに、勿体ないような気がしたのである。

物を作る農家の人として物の尊さをしみじみと、考えさせられたであろう。

上五音、中七音で農家の人であることを巧みに描出しているではないか。

(新川柳鑑賞は「川柳雑誌」に昭和28年10月号から昭和34年5月号まで連載。原文のまま)

中島生々庵句抄

(句集『生々楽天』から 昭和五十一年発刊)

昭和二十七年～三十年

とんがった妻の寝顔に老いが見え

或る時は妻の寝顔も神々し

いら立てば猫の寝顔に教えられ

名案へ妻はフフンといっただけ

神経の細かい同士さぐりあい

葉など効きますかいなと死んで行き

せめて楽に死ねる葉を聞きたがり

共稼ぎ汗の尊き語り合い

もう敵をのんで横綱順を待ち

順番が乱れて姉が売れ残り

やつと来た順へ売り切れ申し候

へんくつはへんくつとして丸められ

せつかちへ踏切の汽車のろいこと

悪筆へ電報という重宝さ

祝電がハネームーンに間に合わず

倦怠期ただ訳もなく無口で居

国訛りはつきり出して酔うている

思案して居るのと違う歯の痛み

商売気たった一度の顔なじみ

誹風柳多留一篇研究 81

小栗 清吾・伊吹和男
山田 昭夫・増田忠彦
山口 由昭
清 博美

640 百旦那へハすりこ木をまわすなり

小栗 百旦那は、貧乏檀家。錢百文しか布施をしないの意で、寺方からいう。すりこ木は、僧侶または坊主頭の医者を書つていう語。「すりこ木」を何と見るかによつて解釈が分かれる句と思うが、

味噌すりの廻ル所は百旦那

四四六

の句と同じ意味の句ではないかと思う。

味噌摺坊主は、寺で、炊事などの雑務をする下級の坊主。(日)

布施の少ない百旦那は、寺方の扱ひもぞんざい。例えば盆の棚経などもせいぜい所化を派遣するというようなことを詠んだ句と思う。「すりこ木を廻す」を「牡丹餅製造」と

とれないこともないが、牡丹餅製造はすりこ木で「突く」「小突く」と表現するのが自然のようである。

すりこ木でこづくハやすい法事也 二二 19
すりこ木のしづかに廻るとろ、汁 玉 21
山口 賛。回す(派遣する)をすりこ木を回すにかけたのだと思います。

清 賛。

641 道の子を生酔あいしく行キ

小栗 愛するは、子供などのきげんをとる。あやす(日)。

生酔の行動を観察した句。上機嫌で道端にいる子供に愛想を振りまいたりしながら、よ

ろよと歩く。生酔としてはタチのいい方である。

生酔とはひ込みやうに道を行キ 明八信3
清 賛。

642 品川でこんやのむすこどらをうち

小栗 品川遊里が最も繁盛するのは、正月、七月二十六日のいわゆる「六夜待ち」。一方、紺屋の信仰する愛染明王の縁日が二十六日であることから、紺屋は品川遊廓のお得意ということになっている。主題句は、それを詠んだだけの句であまり面白くもないが、格別からくりがある句ではなさそうである。

車座へ紺の手の出ル六夜待

初38

清 賛。

643 乳もらいに行きまわつてと太三十日

小栗 大三十日に「乳貰いに行き廻っておりました」と、赤子を抱えた父親が言っているということ。「大三十日」であるから、言っている相手は「掛け取り」で、借金の言い訳をしている句ともとれる。ただ、大三十日はみな忙しいので、他人の子供に乳をやる暇など無い。乳貰いはどこへ行っても冷たく断ら

れるのは事実であろう。言い訳説を否定はしないが、大三十日の悲しい乳貰いの句でも通ると思う。参考までに「万句合」の前句は「うらみ社すれ」。

乳もらひのつきとばされる大三十日

安元義一

乳もらひに來年來なのいそかしさ

安八礼九

伊吹 礎稿の大三十日の悲しい乳貰いに賛。

清 掛取りまで行かずとも可?

644 色男とぶだとしなのなづられる

小栗 よく分からぬが、色男というにはよほど縁遠い信濃者を「よう色男、どうだい」などとなぶつていてという軽い情景描写の句か。「どうだ」を強く取れば、「一緒に吉原へ行かないか、どうだ」とからかっているともとれる。

山田 礎前説に賛。

色出入にハかゝわらぬしなのもの 一七四三

清 同。

645 あいおとつさまとかい巻ぐるみ出し

伊吹 嫁が赤ん坊を綿入れの夜着に包んだま

ま差出し、夫にその子守りを頼んでいる。江戸時代の亭主もなかなか家事に協力的だったようだ。

あいちつとおとつさまへとおつつける

一八二八

清 賛。

646 六郷で打ツはとかける式三人

伊吹 六郷は、浅草寺の北側にあった山形本庄の二万石藩主六郷伊賀守の江戸屋敷。そこで正四つ（午後十時）を知らせる拍子木を打っているよ、と言つて引け四つ（午後十二時）までに吉原へと急ぐ遊客が三三人駈けている。

あ の四ツは六郷さまと四ツ手かけ 一四三
六郷をこへるとみへる江戸と京 一九五七
清 賛。

647 ねがひすじにも三味せんをひく女

伊吹 この女は、踊り子とも妾とも考えられるが、おねだりをするのはどちらかと言えはお妾だと思う。筋は、事柄。三味線を弾くは、そのままの意でもよいが、人の話に調子を合わせたり、人を惑わすような言動をする意も

ある。いつも三味線を弾いているお妾であるが、願ひ事をする時にも相手に調子を合わせたり、惑わせたりする、とらえどころのない罪な女なのである。

清 賛。

648 常の日ハわたし守さへありやなし

伊吹 「伊勢物語」九の、

いと大きな河あり。それをすみだ河といふ。（中略）渡守に問ひければ、「これなむ都鳥」といふをきゝて、

名にし負はばいざこととはむ都鳥
わが思ふ人はありやなしやと
などからの文句取り。常の日を梅若忌のみ以外とするには無理があるので、花見時分以外だと思ふ。三月十五日の梅若忌や花見で隅田川の土手が賑わつてないときには、渡し守もいるかないかの状況である。

気ハありやなしやとすひく角田川 三三九

山田 賛。

永ひ日になるとせ話しひ渡し守 梅二四

小栗 賛。文句取の句ですから、「常の日」の定義はあまり気にせずともよろしからん。ふだんは。

清 賛。

愛染帖

新家 完司 選

通販の社長の声が高すぎる
豊橋市 藤田 千休

(評) 独特の九州訛りで商品を紹介する社長。人柄は悪くなさそうだが、甲高い声がやささか耳触り。テレビを消せば済むことだが……

飼主と犬のマナーが一致する
高知市 小川てるみ

(評) 犬と一緒に立ち小便?ではないだろうが……犬に糞をしていない人は、子供の頃にしっかりとした躰を受けていないのだろうか。

子に見せる背にアカンベとでも書くか
奈良市 大久保真澄

(評) 子は親の背を見て育つという。もちろんこの「背」は比喩だが、Tシャツの背に「アカンベ」と書いて見せるのは愉快。

本物の愛ですつと片想い
鳥取市 福西 茶子

(評) 想いを告げることが出来ない、いや、絶対に告げてはならない片想い。だからこそ純粹でありずっと続いているのだ。

寄せ鍋と決めてゆつくり竹を踏む
藤井寺市 侯野登志子

(評) 寒い日はおいしくて身体が温まる鍋物が一番。しかも、手間がかからないのがいい。段取りを考えながら、余裕のひとつき。

かかりつけの神社に参る子の大事
交野市 田岡 久幸

(評) 医者と同じように、神社にも「かかりつけ」があるのだ。氏神さまも常連には格別の計らいをしてくれるのかもしれない。

大好きな言葉は「棚からぼた餅」
和歌山市 柏原 夕胡

(評) 何とまあ正直な。誰だって好きだが、「ラッキー」と小躍りするようなのは滅多に無い。これからあるのだろうか?

日本人らしいおかすが減っている
堺市 大隅 克博

(評) 唐揚げとかハンバーグなどで育った子供たちが今の若いお父さんやお母さん。日本が長寿国なのは日本食のおかげなのに……

夫のこと思つて今日も米を研ぐ
三田市 石原 歳子

(評) もしかすると、ご主人は臥せておられるのかもしれないが……。お元氣なら、強烈なおのろけ、「ごちそうさま」である。

死を意識したときからが人生だ
堺市 澤井 敏治

(評) たしかに、残された日々をいか過ぐす

かが最後の難問。「終り良ければすべてよし」と、微笑んでグッバイしたいものである。

和歌山市 福井 菜摘

雑魚と雑魚だからしっかり手をつなぐ
米子市 加藤 正二

食うこととトイレは人に頼めない
篠山市 沢山 啓子

あの日から一年経つてまだメタボ
羽曳野市 永田 章司

口惜しいと涙の粒もでかくなる
箕面市 広島 巴子

見舞状出した自分が風邪をひく
大阪市 井丸 昌紀

黄信号おいでおいでと呼んでいる
京都市 三宅 満子

割り勘が暗算出来る今日の牙え
鳥取市 土橋はるお

掛け違い釘笑わぬ仏さま
河内長野市 穂口 正子

病越へブラのしめ付け心地良い
大洲市 中居 善信

立春大吉恋などしよういい陽気
和歌山市 武本 碧

ごはんより好きな薬を抱いて寝る
篠山市 酒井 真由

おしゃれして今日も元氣に医者通い
福岡県 七ツ森客山

尼崎市 長浜 美龍
わたくしの慰め方は知っている

鳥取県 竹信 照彦
啓蟄に山陰人も動きだす

和歌山県 森下よりこ
予想する残り時間の伸び縮み

枚方市 伊達 郁夫
死にそうなる量の薬で生きてます

大阪市 田浦 實
ペットフード酒のつまみと間違える

八尾市 宮崎シマ子
いいんです悲しい時は踊ります

三田市 北野 哲男
春なので靴音高い靴を履く

藤井寺市 太田扶美代
少しづつ間が抜けて来て敵が減る

松山市 神野きつこ
夫との会話にはいい換気扇

堺市 加島 由一
寒桜女ひとりの旅も良い

堺市 加島 由一
ゴミ置き場井戸端会議するカラス

五時からの気力にかけりなかりしか
ブレーキを踏むとエンストするところ

橿原市 安土 理恵
甘酒はありがたいけど紙コップ

風の糸とくに切ってあげたのに

尼崎市 小池 幸子
宝くじあたった人は手をあげて

京都市 高島 啓子
五億円ひよつとしたらと思わせる

藤井寺市 鈴木いさお
身の丈の暮らしはやはりつまらない

米子市 中原 章子
ときめかぬ物から捨てることにする

高槻市 富田 美義
妻逝つて涙で星が倍の日々

鳥取県 斉尾くにこ
愛情も写してほしいレントゲン

高槻市 片山かずお
いらつしやいお疲れさまとウォシュレット

大阪府 津村志華子
お得意でしようといエロの役がくる

三田市 上田ひとみ
少しづつ目覚めが早くなつて古希

ひとり居の侘しさ胸がきゅんとなる
ほつぺの黒子これはわたしという証

三田市 上田ひとみ
どうせならひとりで入りたいお風呂

神戸市 山口 光久
反省しなくなると肩はこらない

長生きにするのですねフルムーン
テレビ消すように消したい苦い過去

鳥取県 石谷美恵子
反省も早い忘れののも早い

大阪市 小谷 集一
聞き上手プライバシーに触れてくる

岡山市 工藤千代子
夫にも出来る話とせぬ話

海南市 三宅 保州
力とは同じ所が減る靴よ

江南市 脇田 雅美
採血をされて鉄分補給する

鳥取市 土橋 螢
さむらいの骨が埋めてある皆

奈良県 渡辺 富子
バカ臭いテレビで憂さが倍加する

たつぷりの自由で老いがうるたえる
弘前市 高瀬 霜石

馬鹿やつてバカやつてまた朝が来る
鰹節パリわたしのおまじない

芦屋市 黒田 能子
後ろ姿だけなのに席ゆずられる

弱かった子供の頃が嘘のよう
寝屋川市 籠島 恵子

聞き捨てにならない事も聞き捨て
続編のために納豆食べている

豊中市 水野 黒兎
終電車今日のドラマの四コマ目

折り紙の難所に指が太すぎる
香芝市 大内 朝子

すつぴんのゴミ出シマスク便利です
ど忘れの加速そろそろ危ないな

三田市 福田 好文

生簀の鯛余命知ってか覇気がない
酒だけは尺貫法でないとだめ

倉吉市 岡崎美知江

夢の中夫に呼ばれ墓参り

母が呼ぶ声で体調すぐ読める

榎原市 居谷真理子

老いという確かなものにつるたえる

陰口を言ってくしゃみを二度ばかり

堺市 荻野 像山

命綱の臍も今では用がない

母ちゃんが出てきて耳栓を外す

鳥取県 平木 公子

切符買っただけのボタンに時間くう

身長が測れぬほどに丸くなり

香南市 桑名 孝雄

休肝日なしで八十二まで来た

ノンアルコール俺の歴史に傷がつく

大阪市 古今堂蕉子

御先祖様息子結婚いたしません

簡単に破れるように子にバリア

米子 高田 振作

ボケぬよう趣味すりゃ年金が足りぬ

無言電話こちらも無言根くらべ

大阪市 谷口 義

タイムサービスですお茶を入れるのも

素戔鳴尊が氏神さんである

堺市 奥 時雄

人柄はいいがと言って貶しだす

三田市 久保田千代

律儀にも三度きちんと腹が減り

鳥取市 岸本 宏章

ゲームする子らはマニュアル見えない

和歌山市 古久保和子

ここ一番うぬばれ鏡拭いてから

河内長野市 村上 直樹

先人のよござ試した雲丹海鼠

大阪市 柴本ばつは

亡くなられやっとお詫びが言えました

高槻市 初代 正彦

旅先まで無理をしなやと母の声

藤井寺市 鴨谷瑠美子

台所がキッチンになる見積書

唐津市 井上 勝視

犬猫も高い医療に慣れてきた

鳥取県 西谷 悦子

血圧も一緒に上がる光熱費

弘前市 福士 慕情

影もまたヨッコラ腰を撫でている

大阪市 神夏磯典子

精いっぱい吠えねば政治曲がりだす

三田市 雑賀 一泉

朝ドラの変わるその都度老けていく

大阪府 高木 道子

三月の道は掘ったり埋めたり

岸和田市 森元ふみよ

合格証かすかに震え我が娘の手

唐津市 樋口 輝夫

かるた取り読み人の父酔うており

奈良市 加門 萌子

なつかしいああ故里の凍て鰯

奈良市 辻内げんえい

老舗より僕にはやはり妻の味

鳥取市 永原 昌鼓

私の弱点知っている主治医

高知県 小澤 幸泉

家出しても娘は生きている生きている

富田林市 山野 寿之

水溜りまだ飛べるぞとスクワット

寝屋川市 森 茜

葛根湯のんでぞくぞく雪もよい

富山市 有澤 嘉晃

風呂上がりやっとうと自分の顔になる

鳥取市 有沢せつ子

春一番まだスカーフは離せない

三田市 堀 正和

先生がネクタイ締める参観日

紀の川市 宇野 幹子

それぞれの歴史が見えるクラス会

大阪市 岩崎 公誠

休肝日やめると元氣湧いて出る

大阪府 米澤 俣子

五色豆春のいろから減っていく

松江市 三島 淞丘
一刀両断 妻の切れ味衰えぬ

鳥取県 細田 裕花
知らぬ間に記憶のページ数が減る

尼崎市 春城 年代
白足袋を近頃履いたことがない

札幌市 三浦 強一
個性まで似てきて夫婦五十年

大和高田市 鍛原 千里
命名へ墨たつぷりと含ませる

岸和田市 増田 隆昭
止めたなら尚呆けそうで止めぬ趣味

日高市 根岸 方子
砂利道も懐かしいねと姉妹旅

堺市 羽田野洋介
お隣と出会い百均買いそびれ

豊中市 松尾美智代
スイーツを食べてる時は生きている

鳥取市 竹口 清信
酒のんだ時だけ遅しくなれる

三田市 上垣キヨミ
こぼれても下戸には惜しくないお酒

弘前市 稲見 則彦
感想文書くためにだけ読書する

神戸市 山田婦美子
テンションがだんだんあがる叱り声

松原市 市川 雄太
自分のミス目立ち自信がかすれてる

豊中市 池田 純子
粋なんて言われてみたい丸い顔

河内長野市 藤塚 克三
粋と野暮ゲートボールで好敵手

安来市 原 煩惱児
老い独り掛け声だけは日に幾度

鳥取県 山下 節子
イクメンになった息子を不安がる

奈良市 岩本 浩二
黄泉へ行く旅のお供に酒タバコ

三田市 田中 章子
便利さに慣れて落としてきたころ

川西市 山口 不動
付け文は社会の窓が開いてます

西宮市 泉水 冴子
露天風呂いい句浮かんでメモがない

枚方市 二宮 山久
寝付かれぬ朝の三時にベンを持つ

富田林市 古田 千華
藍ねむる壺を見回る深夜二時

大阪市 坂 裕之
あしたより今日を大事に古稀の春

鳥取市 吉田 弘子
いい加減北風小僧逃げてくれ

和歌山市 松尾 和香
冷えた身を湯船で癒やす今日の幸

京都市 坪井 孝一
小春日に綿菓子機買い子と遊ぶ

倉吉市 野口 節子
記憶回路昨今波浪注意報

姫路市 古川 奮水
口だけは達者で杖は放さない

池田市 栗田 久子
老女には老女といっちゃだめですよ

田辺市 岡本 昇
野仏の肩にほんのり陽の匂い

岡山市 藤成 操江
期する事あつてすき焼晩ご飯

塩竈市 木田比呂朗
衰えを嘲笑してる糖衣錠

生駒市 飛永ふりこ
ファスナーも荒い扱いにはすねる

神戸市 輿水 弘
独り言犬もオウムも聞き飽きた

河内長野市 針生 和代
歳騙す化粧春日に見抜かれる

松江市 相見 柳歩
大切に空を映して水たまり

鳥取市 平尾 菜美
ストレスが溜り眠れぬダイエット

唐津市 山口 高明
定退で妻のお抱え運転手

堺市 宮本かりん
二人居るだけで部屋にもあつたかみ

宇部市 平田 実男
お経より供句へ遺影笑み給う

共選欄

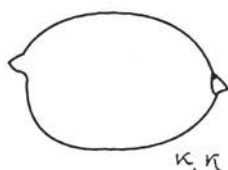
檸檬

檸檬

抄

(薫風書、カットとも)

(投句 738句)



「ざわめく」 福士慕情選

ざわめきの張本人は僕だった
鬼太郎がざわめく街の立役者
ざわめきが止んで大人の顔になる
会場をどつと湧かせたユーモア句
ざわめきの中で三番唄い終え
拍子木のチヨンがざわめき吸い上げる
ざわめいた分だけ損な役回り
ガーデニング花のざわめき聴こえそう
ざわめきを逃れわが家の茶に憩う
ざわめきを起す噂の種を蒔く
ざわめきを連れて渦中の人がかかる
マスコミがなんだかんだと煽りたて
山里の暮らしざわめくロケーション
遠足がうれしい子らと乗り合わせ
ざわめきを連れて北上するさくら

枚方市 二宮 山久
鳥取県 吉野いさお
高槻市 富田 保子
三田市 堀 正和
大阪市 高杉 力
貝塚市 石田ひろ子
鳥取市 加藤 茶人
枚方市 海老池 洋
大阪市 板東 倫子
和歌山市 喜田 准一
愛知県 早川 遼行
大阪市 近藤 正
阿波市 三浦千津子
河内長野市 坂上 淳司
出雲市 竹治ちかし

「ざわめく」 池森子選

ざわざわとなにわ市庁舎落ち着かず
維新だと八策などとざわめいて
おだやかな海がざわめく領海線
ざわめきながら春が山から下りてくる
哲学の道がざわめく三分咲き
ざわめきを連れて北上するさくら
虫達のざわめき土に春の音
やつと春きたとざわめくいのちたち
花だよりざわざわと女靴
ざわめいているのは胸に春の文字
村のマラソンに高橋尚子さん
ざわめいて男の祭山車走る
ざわめきはなんだなんだと好奇心
ざわめきが好きて応援外野席
風評にざわめく国の遅い春

河内長野市 坂上 淳司
大阪市 江島谷勝弘
鳥取市 中村 金祥
松江市 松本 文子
大阪市 津守 柳伸
出雲市 竹治ちかし
豊中市 江見 見清
枚方市 海老池 洋
橿原市 安土 理恵
紀の川市 辻内 次根
堺市 奥 時雄
姫路市 古川 奮水
松江市 石橋 芳山
羽曳野市 福田 悦子
奈良県 渡辺 富子

花の下どの人間も騒がしい
 通り抜けざわめき残し散る桜
 啓蟄を待つてざわめく変な虫
 ざわつた教室チヨーク飛んで来た
 雪の精世のざわめきに蓋をする
 手土産がざわめきの種置いてゆく
 ざわめきもびたり固唾をのむタクト
 会場がざわめく行の飛ばし読み
 友の計報ころろざわめく戻り寒
 終章でいつもざわめく句読点
 開票の結果ざわめく集会場
 ざわめいた国会何も決まらない
 交代をしてもざわめき増すばかり
 おだやかな海がざわめく領海線
 ざわめきの余韻にじっと目を閉じる
 震度5にざわめき揺れるシャンデリア
 被災地の風ざわめくと鳴り止まぬ
 除染除染風化するまでおさまらぬ
 風評にざわめく国の遅い春
 ざわめいた海が素知らぬ振りを
 東北の空でざわめく渡り鳥
 ざわめきが想定される首都直下
 ギリシヤ発ドミノ倒しがやってきた

鳥取市	森山	盛桜
羽曳野市	福田	悦子
倉吉市	前田喜美子	
堺市	近藤	治子
大阪府	高木	道子
米子市	中原	章子
河内長野市	村上	直樹
豊中市	江見	見清
尼崎市	長浜	美龍
京都市	坪井	孝一
加東市	黒崎美紗子	
泉大津市	助川	和美
鳥取市	西川	和子
鳥取市	中村	金祥
松江市	相見	柳歩
松山市	神野きつこ	
和歌山市	磯部	義雄
鳥取市	池澤	大鯨
奈良県	渡辺	富子
倉吉市	山中	康子
弘前市	今	愁女
鳥取市	津村	律子
堺市	内藤	憲彦

老木もざわめく深い春の森
 除染除染風化するまでおさまらぬ
 ざわめきが何時もうるさい熨斗袋
 いつまでもざわめく砂糖糖きび畑
 公園にざわめく声が聞こえない
 ざわめきが目から耳から都会の夜
 ざわめきを連れて渦中の人がある
 あの日から胸の鼓動が鳴り止まず
 爪先の夢がざわめくトリーシューズ
 ざわめきの中で三番唄い終え
 花の下どの人間も騒がしい
 人ごみの修羅場命も軽くなり
 ざわめきの中にうっかり蹴躓き
 ざわめいた風の言葉と木のことは
 ざわめいたむかしの人に会釈する
 ざわめきから逃れ明日の風を読む
 ざわめきを抜けざわめきの中にいる
 パン皿でざわめくヒトたちの爪
 終章でいつもざわめく句読点
 ざわめきの中でピエロの無表情
 飽きもせずざわめく中に紛れ込む
 年金がざわめき生きているのが不安
 ざわめきの向うで回る風車

堺市	西村りつえ
鳥取市	池澤
高槻市	富田
堺市	志田
富山市	千代
奈良県	有澤
愛知県	大久保真澄
塩竈市	早川
今治市	木田比呂朗
大阪市	渡邊伊津志
鳥取市	高杉
鳥取市	森山
鳥取市	平尾
雲南市	菅田かつ子
大阪市	升成
黒石市	佐藤
府中市	馬場
藤井寺市	利子
松山市	太田扶美代
京都市	高橋
大和郡山市	宏臣
和歌山市	坪井
吹田市	孝一
鳥根県	柳弘
伊藤	敏子
伊藤	寿美

犬猿の仲が結婚するらしい

西宮市 足立 茂

鳥獣戯画闇夜はきつとさんざめき

西宮市 山本 義子

過疎の村熊がざわめくから困る

鳥取市 竹口 清信

ざわめきの中でピエロの無表情

大和郡山市 坊農 柳弘

ざわめきを抜けざわめきの中にいる

藤井寺市 太田扶美代

ときめきへ血のざわめきが恥ずかしい

香芝市 大内 朝子

野も山もざわめく春のせめぎあい

尼崎市 小池 幸子

大穴の出たざわめきと紙吹雪

札幌市 小沢 淳

あちこちがざわめきだして医者通い

芦屋市 黒田 能子

五臓六腑ざわめくことが多くなり

河内長野市 針生 和代

鳩尾のざわめくものが裁けない

和歌山市 古久保和子

身に覚えあつてざわめく心電図

和歌山市 土屋起世子

唸る撥背筋ざわめく津軽三味

弘前市 高森 一吞

泣き上戸笑い上戸もいて楽し

篠山市 酒井 真由

白骨を見てざわめいている樹海

川西市 西内 朋月

ボタンボタンと沈黙破る春の音

青森県 松山 芳生

ざわめきの心に月が満ちてくる

鳥取県 佐伯 やえ

天寿全う子どもが遊ぶお葬式

弘前市 高瀬 霜石

ざわめきが駅まで続く勝ちゲーム

鳥取市 岸本 宏章

秀 句

一匹の蜂に授業を止められる

横浜市 菊地 政勝

秒針がざわめいている新記録

奈良県 中村 勝弘

ざわめく血あした謀叛を企てる

紀の川市 楠原 富子

地球のざわめきに生き方を問われ

さいたま市 星野 育子

ざわめきも耳にやさしく響く春

豊中市 池田 純子

ざわめきが止んで大人の顔になる

高槻市 富田 保子

ざわめいた後の余韻を楽しまん

東かがわ市 川崎ひかり

雪の精世のざわめきに蓋をする

大阪府 高木 道子

開幕前のざわめき夢をふくらます

大阪市 田浦 實

春雷にざわめく花は実を結ぶ

富田林市 関 よしみ

耳の奥府にモノクロのざわめき

富田林市 中井 アキ

いち日の喧騒溶かし切る夕陽

神戸市 山崎 武彦

ざわめきの上手品の鳩が飛ぶ

鳥取市 中宇地秀四

桃色の封書にざわめいたポスト

橿原市 居谷真理子

真つ二つの意見中庸が制す

生駒市 飛永ふりこ

不退転異口同音をすくい上げ

横浜市 小野句多留

ざわめきも生活音の幸を知り

大山市 吉田 幸子

お別れでざわめいている紙コップ

奈良県 中村 勝弘

天寿全う子どもが遊ぶお葬式

弘前市 高瀬 霜石

体中あちこちざわめいて辛い

寝屋川市 富山ルイ子

春のゲームざわめくは言霊か

尼崎市 春城 年代

淋しくてざわめきの種まくカラス

福岡県 林 さだき

秀 句

笑わない眼のざわめきを持ち帰る

鳥取県 斉尾くにこ

ざわめきのない街でした無題です

富田林市 古田 千華

鳩尾のざわめくものが裁けない

和歌山市 古久保和子

英語 de Senryu ⑤

麻生路郎句集 『旅 人』

英 訳 吉村 侑久代

(岐阜保健短期大学)

貧しさに だんだん仲がよくなつて

*poverty makes
the friends close
gradually*

嘘と嘘 女いよいよ美しく

*lie and more lie,
woman becomes a beauty
more than ever*

～リバーウィローのため息～

明治・大正期を代表する英語学者・教育者であった斎藤秀三郎(1866~1929)は多くの英語教科書とともに、英語辞書・文法書の編纂に従事しました。中でも『斎藤和英大辞典』(日英社 1928)は現在も復刻されていて、多くの読者を確保するほど内容の濃い辞典です。彼は熟語を最重要事項と考え、『斎藤和英大辞典』の序文で「日本人の英語は、有る意味で、日本化されなければならない」と述べています。そして多くの文例に、和歌・俳句・漢詩・川柳・都々逸・俗謡・甚句・慣用句からの英訳を120以上も取り上げています。その一例として川柳の英訳を紹介しましょう。

「居候三杯目にはそつと出し」

The dependant asks/A third refill of rice/In a hardly audible voice

居候はアメリカ英語では dependent となりますが、『斎藤和英大辞典』出版当時の日本はイギリス英語の全盛期でした。斎藤自身は英米両語に長けていましたが、イギリス英語の dependant を使っています。日本では現在アメリカ英語の dependent の方を使うことが多いですね。それにしても今の居候はこのような心遣いをするでしょうか。

築 く

小寺 花峯選



無重力活かして築く宇宙基地
泣き笑いともに築いたためおとみち
妻築く笑いで和む家族愛
積み上げた小さな汗が築く夢
築城の裏面を語る民の汗
借金で築いた庭を持って余す
半世紀過ぎた我が城すき間風
金婚の家晴れて良し降って良し
マニフェスト信じて明日を築けない悦男
時々妻とも握手してますか
爪に灯をともし築いたウサギ小屋
日の丸で明日の幸せ築けるか
一代で築いた城が崩す
これからを築く二人の薬指
ローン済みバリアフリーでまたローン
ゆっくりと築いた家で丸く住み
人並みの幸せ築く老いの日日
我が胸に築いてみたい涅槃像
新家庭築く相手を募集中
一代で富を築いた寄付もした
大切な我が家をむしる保証印
築いても浮気に脆い夫婦仲

一 粋
花 匠
一 風
千 恵子
美 義
宏 章
和 幸
悦 男
喜 忠
公 誠
一 呑
ひろ子
一 子
安 子
幸 子
森 生
雅 明
四 郎
一 花
像 山

青写真だけは立派なうさぎ小屋
新築に妻のバートであたま金
裸一貫築いた城へひとり住む
三十年ローン終れば壊される
新しい店が仮設にわき返る
人生を築いてやがて紙おむつ
復興をはばむ瓦礫に罪はない
マイホーム鉄筋ですと言うカラス
手鍋さげ辿つてみれば共白髪
新築のローン背負つて蟻になる
二人三脚築いた城に二人きり
どしゃぶりも自分を築く一ページ
三代目築いた城に穴あける
石垣を築いた人のあぶら汗
地位築くため毎晩の苦い酒
佳

砂の城だった自覚のない孤独
人生を積み重ねて五合燭
天
人脈を築くおでんにコップ酒
善 信
坂本蜂朗
ミツ子
雅 美
美 恵子
千 代
客 山
朝 子
強 一
則 彦
古 拙
慕 情
捷 也
宏 子
靖 博
裕 之
石 霜
蓄 水
五 月
嘉 見
扶美代
正 和
善 信

燕

島 ひかる選



日本元気が今年もツバメ来てくれるみつこ
燕来る季節を待つて里帰り
雪形が燕となつて初夏津軽
燕の絵色紙にのせて春となる
ツバメ見てベッドの妻は初夏を知る
ふる里へちゃんと戻つて来るつばめ
住み難い日本と知らず燕来る
つばくらめ帰る軒なし瓦礫跡
被災地でツバメ戸惑う軒さがし
改築をしてから燕来てくれぬ
洋風の家が燕に嫌われる
燕には済まぬマンションまたふえた
電線が地下にもぐつて見ぬ燕
燕よりカラスやハトが来て困る
燕来い軒も田んぼもたんある
お家賃はいりませんよと燕待つ
家に来い帰る所の無い燕
間違わず表札読んでくる燕
おだやかな心に飛んでくる燕
いつからか人を信じて住む燕
放射線知らぬ燕の宙返り
東北の燕たち異はつくれたか

時 雄
客 山
千 恵子
嘉 見
シマ子
照 彦
五 月
茶 子
惠 美
節 子
四 郎
宏 章
ひろ子
慕 情
愁 女
倫 子
朝 子
捷 也
智加恵
則 彦
典 子
みつこ

巣造りのつばめせっせと幸運び

下校時そとと確め燕の巣
燕語が解つたように話す父

おい燕帰るみやげはなにがい

子育ての燕励まし励まされ

子だくさん燕の子ほどいた昔

少子化の郷に燕の子沢山

子育ての燕にエール無農薬

燕の児顔じゅう口で駄駄こねる

ばあちゃんにあやされてる燕の子

燕の子母を信じて開ける口

ねだる子へ凜と嫉の親つばめ

燕にも劣る育児のため夫婦

巣立つまで立入禁止燕の子

断捨離を許さぬ父の燕尾服

佳

みちのくの復興下見する燕

燕見た話題で弾む老い二人

ご無沙汰の燕と無事をしゃべり合い

あの日から主がいらない燕の巣

岩燕崖の危うさ知っている

人

大空を燕の如く戦闘機

地

嫁ぐ娘へ寡黙な父の燕尾服

天

復興の兆しツバメが戻った日

軸

日本を忘れることのない燕

いきなり

宮尾みのり選



いきなりを時々義母が提げてくる

いきなりもいなくよくよせずに済む

大地震きつと何にも出来やせぬ

願いごとと言う間もなく流れ星

いきなりの涙の意味を計りかね

ウインクをすればいきなりアカンベエ

辞めまですか残りますかと人事から

検診で暮らし変えろと迫られる

結論を先に言うから身構える

抜き打ちの検査現場をあわてさせ

いきなりの指名に惑う脳回路

いきなりで目をむいている冷凍魚

いきなりの計報涙も出てこない

いきなりのパンチを浴びて湧くファイト

何で来たかと叱られに行く子の下宿

旧姓でいきなり呼ばれ過去と会う

向かい風いきなり話題途切れさす

流れ星いきなり昏奪われる

ひと言にいきなり出口閉ざされる

いきなり来てもコンビニも無い過疎なのよ

運不運出会いはいつもハプニング

ケータイで要件のみの愛想なさ

千代子

(吉)弘子

美千代

寿之

まみ子

千歩

(片)忠

伊津志

裕之

章司

菜摘

志華子

(岸)孝子

隆盛

輝夫

すみ子

ゆきの

(渡)富子

(中)章子

萌子

直

靖博

欲の皮いきなり剥いて慌てさす

普通の日々いきなり呑んだ大津波

いきなり化粧で脱皮する少女

エンディングノートいきなり母が買う

退職日いきなり離婚切り出され

いきなりの邪魔が入って座をこわす

ピーポーがいきなり止まるお隣で

いきなり核が飛んで来そうなお隣から

早熟の子からいきなり虚をつかれ

損得にいきなり覗くエゴの顔

前触れのないリストラという非情

軽いドアいきなり開けた間の悪さ

赤信号平気で渡るおばあちゃん

摩り減っていきなり切れる赤い糸

いきなりを想定外と言葉変え

佳

いきなりがビックリ箱に詰めてある

いきなり昔に還る母を抱く

いきなりスパイライバルも焦ってる

いきなり返す言葉はきつと本音

シベルトいきなり変えた暮らし向き

人

いきなりに積木倒れた訳でない

地

いきなりと言うが今まで言えなんだ

天

いきなりに備えエンディングノートなど

軸

飛び出した犬でギブスの三ヶ月

照彦

(上)紀子

(矢)五月

雅明

花匠

英子

孝雄

さだき

克三

恭昌

(花)順子

霜石

千恵子

一兆

芳山

ひろ子

茂代

よしみ

ちかし

正雄

弘風

田中章子

初歩教室

題一形

鈴木公弘

①「かたち」という言葉には様々な漢字が当てられています。まず国語辞典を開いてみてください。

②何を主張したいのか、「場面」を絞って描いてください。

③川柳の基本は、自分の喜怒哀楽表現であり、叫びの文芸と申しても過言ではないでしょう。ですから、感情が読者に伝わってこない句は、味のない味噌汁みたいなものです。思いっきり自己表現してください。

④細かい話ですが、初歩教室では送り仮名も添削の対象とします。読めればいい、という考え方もありますが、それは一つの技巧として、次のステップで学んでください。

「少しだけ手を加えた句」

原 生きてきた背筋変形しているな 備 富子
添 生きてきた背筋変形してしまふ
原 見合する形だけよと正座する 山 弘子
添 この見合い形だけよと正座する

原 おいしいね姿形はよくないが 紀美恵

肩の力が抜けていて日常性ある句になりました。しかし、美味しい物が何であるか見えません。踏み込んでください。

原 形だけ気持通わぬはかなさに 一 良

添 形見せても気持通わぬはかなさに

添削の句では、上5の部分を7音字にして、気持ちを通じあわない儂さを強調してみました。川柳の基本形は575となっていますが、それでは表現できない場合には、リズムが崩れない範囲で上の部分を膨らませても構わないと思います。

原 お転婆も着物を着ると形あり 登美子

添 お転婆も着物を着れば形でき

原 湯呑み割れ形有るもの何時の日か 秀子

添 いつの日か湯飲み茶碗も割れるもの

原 高台へ移転の形夢夢し 勝 治

添 高台へ屋形を移す夢の夢

原 何故減らぬガレキの山が悲しくて 洋 一

添 連峰の形のガレキ見て悲し

「…の」「…の」と書き続けることを「の重ね」と言います。この場合「連峰の」も「形の」も「ガレキ」に係ってきて、その状態を示す用法になります。そこで「の重ね」の句は説明になるのでよくないという方があります。しかし、逆に言えば「ガレキ」の状態を強調しているとも言えます。

う。私は認めます。

原 形式で押した判子に縛られて 篤

句の内容に異論はありませんが、下5を「縛られる」と言い切ったほうが、迫力が出ます。

原 古稀となり形作りの準備する 律 子

どんな形を造ろうとしているのか明確に述べてください。

原 シャボン玉形色々舞い上る 久 子

添 シャボン玉色も形も変えて飛び

原 流行を追うファッションは後回し 開 子

添 流行のファッションなんて後回し

原 本奔を抑えて型にはめたがる 孝 代

添 奔放を抑えて型にはめたがる

ある程度川柳に馴染んでこられると、お題をヒントと考えて句作されるようになります。それ自体は成長の証しですので、喜ばたいと思います。ただ「形」という題に対して、あえて「型」を使つたのには意味があるでしょう。この二つの「かたち」は一般にどう発音するのかを確認しておいてください。

原 放射能形無い身で人を刺す 孔 一

添 放射能形ないまま人を刺す

添 放射能形ないまま人を刺す

原 きめ事を形だけする自分流 美紗子

自分流と書く川柳が増えてきた感じがします。5音字ですし、流行語の一つみたく

な言葉なのもかもしれません。しかし、何を
やつても考えても「自分流」という現実
無に等しいと思います。ご検討ください。

原 マニフェスト政治が売りの空手形 志郎

添 マニフェスト政治家が売る空手形

原 盆栽梅切込み過ぎて形歪み

添 盆栽の梅切り過ぎて形歪み

原 新形のインフルエンザ被曝する

添 新形のインフルエンザ抱いている

原 批評家は三振しても形ホメ

「形ほめ」のほうが、雰囲気が出ます。

原 街を行く後姿はみな美人

添 街を行く後ろ姿はみな美人

原 ロボットという人形が幅利かす

添 人形のロボットに指示されそうだ

原 忌みつき形ばかりの御香典

実話として成り立つ句です。ただ、受け

取り方によっては突き放した、きつい感じ

がします。

原 美容師の魔法に馴染む癖ある毛

添 美容師の魔法素直に聞く癖毛

【衝撃性がやや欠けていた句】

目標を形にしたい習い事

皆違う人生模様形なし

私なりの形で生きることにする

割れおき安くその上味もいい

ちぐはぐをつくりながら添う夫婦

スキージャンプ見事な着地した笑顔

のり子

四角形年を重ねて円形に
形よい口からもれる淡い嘘

形より中身で勝負したいなあ

立ち姿いつのまにやらくの字型

オムライスをケチャップで文字彩った

尾に鱗をつけて話に角が立ち

【入選句】

形よく仕上がり鉢に笑み浮かべ

被災地の未来はきつと晴れマーク

靴買う品質よりもまず形

雪の上猫の足形追うてみる

大津波形あるもの皆渡り

体形が幸せそうな八ヶ月

形から入って心置き忘れ

親だとは形ばかりで育児投げ

読みかけの本の形で二月去る

ブリブリの尻の形は大投手

脳死の子生きる形を変えただけ

顔形そっくりですが他人です

一日が形状記憶されている

形に似えの象形文字に見るロマン

形の良い靴ほど足が文句言う

安全に親の足形踏んで生き

似て欲しくないところまで似る息子

俺に似よ俺に似るなと子を思ひ

たの作品でしようか。

【佳句】

早い者勝ちで決まった形見分け

宏之

(高) 弥生

美知江

裕美

眞砂子

雄太

(燭) 節子

孝明

真由

智加恵

温子

吉太郎

ひろ子

きつこ

心咲

(宮) 俊子

滋彦

(安) 由美子

久美子

治子

宏造

正二

こずえ

憲

たの

宏之

手綱持つ妻に形状記憶され

形式にとらわれすぎて動けない

菜の花へ折り紙着せて雛まつり

イケメンを形無しにする花粉症

まる三角四角みないいい友だち

弓形の月でブランコしてみたい

容姿端麗見合い写真のすごい技

乱切りの大根みんな上手く煮え

顔形こたわらないが気にはする

【今月の推せん句】

茄子胡瓜やつぱり器量よしがいい 大久保真澄

茄子の表面に成長過程のシミがあつても

構わないとか、曲がつた胡瓜でもいい、な

どと言う人がいますが、正直なところを聞

けば、この気持ちが一般的だと思ひます。

整形で顔はきれいになりました 山本 エミ

女性には本格的に化ける時の順序がある

と聞きました。まずは顔の整形手術。親の

遺産を切り刻むとは、親の顔が見たい気が

します。この句「顔は」の「は」が生きて

います。

首切った形歯磨き使い切る

なんの異論もありません。素晴らしき着

眼と言葉遣いです。

【私の句】

一本の矢に陣形を崩される

ホツとした形に眠る負けいくさ

(登載漏れの方は役員が添削して返却します)

上山 堅坊

定廣

加修子

安子

道子

(株) 玲子

(山) 妙子

(編) 則彦

正子

一泉

秀句鑑賞

同人吟 中居善信

— 4月号から

否定語に封印をして世を渡る

高瀬 霜石

僕は否定語に封印はしていない。物事を見る場合、否定から始まる、それでいいのか。もつと違つたものは無いのか？ベターだと思えば賛成する。原発反対運動をもつと続けておくべきだったなと思つている。

愛犬を亡くしてからは冬籠もり

柿花 和夫

避難した一人の女が、被災地に残してきた犬や猫の事を気にしているニュースが流れる。戦後と違つてひとり暮らしの人が多くなつた。東京では一家族の人数が一・九八とか。ペットでも飼わねば寂しくてたまらない。

一匹になつて男は橋わたる

太田 昭

私は一匹が好きだ。団子になるのは思想が無い人に見えて好きになれない。生きて行く自信があるから一匹でおれる。持論をきちんと持つている。だから怖くない。

去るものは疎し忌明けの折を食へ

宮尾 みのり

寂しいね、後五年もすれば平均寿命、クラスメートの四分の一は亡くなった。誰が先に逝つても奇怪しくない年齢。ご法事の折を食

つい最近、愛媛新聞の1ページを潰して正

岡子規没後百十周年の記念行事の一巻として行われた俳句大会の最優秀句、及び優秀句が発表されていた。

最優秀句

秋日和キャッチャーとして父を握え

優秀句

伸ばした手掴んでくれる人がいる

三代目受け継ぐ徹の醤油蔵

お帰りの声弾ませて大根炊く

などである。これらの句を見たとき、俳句と川柳の境が無くなつた事に寂しさを覚える。季語の無くなった俳句、口語体で読まれる俳句、だが一つだけ違うものがある。突っ込みの深さである。川柳でしか表現の出来ないものがある。ここに私は安堵する。

トーストが焦げるやさしさ足りぬ朝

志田 千代

毎日の暮らしの一コマである。お互い理解しあっているようでもふと気づく、もしかして父さんを無視しているのではないかと。

爪ばかり伸びるいくじのない月日

木本 朱夏

この人の六句、どれを拾い上げてでもいいのだが、この句が一番人間臭いと思つた。とてもシビアに自分を見つめている。こんな生き方でもいいのだろうか、だらしなく過ぎて行く月日。

雪景色二羽のガラスが居るばかり

今 愁女

この句を単なる風景描写と見るのは早計である。風景描写の底にあるのは、雪深い弘前の暮らしである。句から想像できるのは冬木立と雪に覆われた山々を窓から覗いている一人の老女。もうこの句は忘れないと思つた。

ビル林立酸素の薄くなる都会

海老池 洋

東日本大震災のニュースを見るたびに、戦争で焼野が原になった都会を思う。バラックの家を建ててそこに住み着いた。そこから這い上がる人々。人間の逞しさである。

べながら、折を食べが虚しい。

今日何度笑ったかしら化粧とる

鴨谷 瑠美子

これも寂しい句だ。ひとり暮しをされているかも知れない。友達と会わなければ、友達に電話でもしなければ笑うこともない。もう暖かくなったから、外に出ればいい、街に出れば笑い袋も落ちている。

一筆箋くらいが丁度いい話

堀 正和

大洲高校に名物のPTA会長がいた。後に市長になった川柳仲間なのだが生徒にとでも人気があった。卒業式などで長々と祝辞が続く。やつと順番がきて紹介をされた途端に会場が渦となる。生徒達は知っているのです。「卒業おめでとう」これだけであつた。

ふかふかのお芋を屁理屈の前へ

山岡 富美子

これは参った。どうしたんかね、お芋は食べたんだろうか。

うまいうまい、これが川柳。

よく見ればお地蔵さんは稚児の顔

川端 一步

日本人は拝むのが好きだ、お地蔵さんも、七福神も、お寺もお宮も。五百羅漢の顔もしげしげと見たことは無いのだが、稚児の顔の

お地蔵さん、水子地蔵は子供の顔だろう。

三姉妹法事のたびに比べられ

山田 耕治

この頃は親戚と言えども行き来をしなくなった。お祝い事も内々で済ます。ややもすると葬式も家族葬などといってこつそり済ます。だが大方は七回忌位までは行き来する。そのたびに三姉妹が話題にされる。

隅っここの座席が性に合っている

西内 朋月

どの会合でもそうだが、早く来た順に後ろから席を取る。日本人の癖だろう。だが時々ど真ん中の席を取る人がいる。一言居士と言われる人である。またこの会合も揉めるかも知れない。

雪国に申し訳ない陽が海に

福本 英子

和歌山や愛媛あたりで住む者はそう思う。五センチも積めばニュースになる。今年は雪除けのブルはとうとう走らなかった。だが、台風の通り道ではある。

ない袖は振れぬ総理を変えたとして

加藤 茶人

〇〇党さんも地に落ちたなと思う。誰だつて消費税なんか口にしたくない。東日本の大震災の後始末をどうすればいいんだ。ない袖

は振れないに決まっている。

選択肢なかった道を越えてきた

福永 ひかり

小学校二年生の時が終戦であつた。あのこの時代の時代に私達は何が選択出来ただろう。食べるものが無い、勿論ランドセルも帳面も鉛筆もないこんな時代を経験した。だから僕たちは逞しく育った。

調子いい女は笑うのが上手い

石橋 芳山

話を逸らさないようにけたけた笑って話を合わす。いい気になって腹んなか全部吐かせてしまふ。もう後の祭りである。

プータンに教わる足を知る暮らし

古手川 光

文化とは縁遠い暮らしの中で、村人たちは分け隔てなく食べ物を分け合う。そして皆で助け合う、こんな光景は日本にも昭和の初期まではあつた。そうすることが人間だと思つた時代があつた。古い話である。

倦怠期などあつたかしらと万華鏡

春城 年代

漬物石に母の元気が生きている

米澤 俣子

秀句を沢山落とす事になった、申し訳なく思っています。これが現在の私の力です。

— 水煙抄

秀句鑑賞

— 4月号から

夏 目 一 粹

忘却とせめぎあつてゐる記憶力

藤 田 千 休

記憶と忘却は相關關係にあります。人はみな加齢と共に忘れやすくなりますが、せめて二つ覚えて一つ忘れるくらいにしたいものです。記憶力には限界があるようです。

比べてはならぬと思つても比べ

山 根 邦 代

比較とは人・物・金までも比べてしまひます。ましてや心理的な優越感と劣等感まで比べると厄介なことになります。「ならぬと思つても比べ」、それが人間の性と言うものでしょう。「人の振り見てわが身を直す」、くらゐにとどめたいものです。

ハイと言つ言葉がとてむずかしい

小 林 妻 子

失礼ながら柳師の妻子さんの句を頂戴しました。「ハイ」と素直に言うことは歳をとれば

とるほど難しくなります。私の級友に、何の拘りもなく子供のように「ハイ」と返事をする人がいますがとても爽やかで好感が持てます。

眠りからさめぬ薬が欲しいとき

酒 井 真 由

ちよつと穏やかならぬの感じます。睡眠薬を飲むとよく眠れますが目は覚めます。下五が「欲しい時」となりますと、たまには熟睡させて欲しいと言ふことでしょうか。

一本のクギを頑固にしている

神 野 千 恵 子

にんげんの日常生活においても錆ついたクギのような人が居て一筋縄ではゆきません。誰しも歳をとると頑固になり折れたくないのです。これでは錆止めも効きませんよ。

夜泣きした息子が夜泣きされている

山 口 不 動

ずいぶん凝つた一句です。でもよく解ります。息子さんからお孫さんへと「夜泣き」が引き継がれ、その情愛と空しい因果応報が感じとれます。夜泣きは切ないですよ。

ひだまりで昼寝をしてる雪だるま

新 保 登 美 子

ユーモアと情緒ある一句に魅せられました。日向でうとうと気持ちよく寝ている雪だるま

：寝入ってしまったら、さあ大変。解けないうちに目を覚まして。

輪を抜けて今宵は月に逢いにゆく

工 藤 千 代 子

「輪を抜けて」と「逢いにゆく」から想像すると、「月」は愛しい人と読みました。でも遙かなる日の思い出でしょうね。

核心にふれると声が震えちゃう

岡 崎 美 知 江

核心を突いたり触れたりすることは、それなりに覚悟がいるものです。緊張感が声を上擦らせるのです。

なるようになって生きてる古いひと曰

針 生 和 代

「なるようになって」が気に入りました。おつしやる通りです。明るくお達者で。

病院を出て人生の深呼吸

石 田 隆 彦

ああ無情竹馬の友も杖について

近 藤 秋 星

窓の陽がベッドの老母を勇気づけ

坂 本 と も 湖

老いを知る去年はできたことなの

湯 浅 久 司

ふりかえりみればシャボンのようだった

後 藤 宏 之



追悼 田村邦昭さん

少しだけ口をゆがめた笑顔好き

川柳らくだの会 池澤大鯨

訃報が届いたのは、二月十日のこと。都合で葬儀は延びて十三日。折しも雪が五十センチも積った直後として寒い日であった。親戚の他には、電通退職者組合の方が多数、それに町内会の主な方、「川柳塔」からは新家完司副主幹が参列され、「川柳らくだの会」は全員が参列した。会場に入りきれないほどであった。

昨年七月頃がん発覚。奈良に在住の息子さんの所へ出かけて告げていたらしい。

句会には、十月まで平常の状態で出席され、十月末に入院。あちこちに転移していたらしく、十二月に入ると、もう食べられなくて吸入器に頼られたと言う。一月には「野の花病院」(終末医療施設)へ転院されていたとのこと。

入院されるまでは、自分のことは句会仲間の人に語られず、退院を待つて忘年会をしようとか、出来なかったので代りに新年会を計画しようとか、気にはしていたが、それほどさし迫った病状だとは思わずに

かった。会員数が比較的少ないグループなので、快癒して顔を出されるのを心待ちにしていた矢先の訃報だった。

息子さん宛に手紙を出されていて、その中に「ありがとう」と書かれていたとか。息子さん曰く、「私の方が言いたい言葉でしたのに」と。

次に葬儀会場のロビーに張り出されていた邦昭さんの句

変化球知って人生幅を持ち

かなりいいほめられたって負けは負け人はみな支えあつて生きている

三食をどんぶりばかり妻不在

錯覚を苦しめないから生きられる

砂浜で波がやさしく声かける

がん告知うけて命のありがたさ

自分史を書けば少しの嘘が出る

老梅が咲いたと妻が嬉しがり

不揃いが好きだ個性がにじみでる

風鈴の音から昔の風を聞く

つくつくと眺める子らのいい笑顔

うっかりと手を上げたままおろせない
ハミングが合わず二人仲がいい

夏がくる泡のうまさにもまた生きる

初恋がまだに消えず老いが来る

つらければボタリ涙を落しやいい

昭和六十一年NTT退職。退職後に川柳を始められた。NHK川柳教室を皮切りに

「川柳塔おとり」を経て、「川柳塔」同人

「川柳らくだの会」に所属していた。その間、

川柳塔まつり、全日本川柳沖縄大会、国民

文化祭ひろしま川柳大会、西日本川柳大会

など、意欲的に参加されていた。

家庭では、大きな声を出されたこともな

く、近所でも信望があり、町内会の役をた

びたびこなされ、趣味のそば打ちや将棋を

楽しんでおられたと聞く。

「川柳塔」12月号、最後の投句から

呼ぶ声が遠くになつて雨の音

ナース達天使の心忘れたい

いつまでも忘れたくない亡母の声

逆らつた口も今では丸くなり

ベトベトの付き合ひだけは遠慮する

子供らに残すことが見当たらず

私は川柳を通しての付き合ひでしたが、

ときに一緒に飲んでほぐされていました。

positioningを決めて静かに威厳みせ(大鯨)

合掌

第一回 春の川柳塔まつり誌上大会

第一回春の川柳塔まつり誌上大会に際し、全国各地から 765 名のご参加、ご支援を賜り、ありがとうございました。また貴重な誌面を割いて誌上大会要項をご案内いただきました各川柳社、個人的にそれぞれご紹介下さいました各位のご厚情に、心よりお礼を申し上げます。

投句された作品は、無記名の句箋のまま 6 人の選者に送って選句して頂き、受付番号と照合して作者名を記入いたしました。選者の方々のご苦勞に深く感謝いたします。

入選作品は各題とも平拔 111 句、秀句 10 句、特選 1 句、計 122 句です。各題の特選句は下記の通りです。

各 題 特 選 句

雑 詠	旅	ひ ら く
小 島 蘭 幸 選 後から抱き締められた春だった 大阪 上 嶋 幸 雀	田 中 新 一 選 心まで貧しくならぬよう笑う 大阪 出 口 セツ子	新 家 完 司 選 いい旅だったとキーホルダーを買うう 大阪 内 藤 憲 彦

ひ ら く
西 出 楓 楽 選 一冊の旅へ作者にいざなわれ 奈良 居 谷 真理子

ひ ら く
川 上 大 輪 選 蕾が開くいのち万歳するように 大阪 寺 川 弘 一

ひ ら く
平 石 隆 子 選 ひらめきは手すりの切れたあたりから 大阪 赤 松 ますみ

ひらく 雫石隆子選

雪積めば雪をもたげる雪中花
 ひらくまで分からなかった花の色
 ちゃんと手を洗う握手をするために
 週刊誌ひらいて足の爪を切る
 痛点的深いところで桜咲く
 東北の幕開け漁だ初日の出
 臥す母に春の障子をあけ放す
 山越して愁眉をひらく三分粥
 背開きになっても私ワタシです
 ドア開けるこれが私の返事です
 返り咲くときの確かな帯の位置
 なんとなく携帯ひらく雨の午後
 新聞をひらくと呻き声がする
 聖書ひらくホテルの所在なき夜に
 生命線いまどの辺り手相みる
 風呂敷をひらけば母の匂いする

兵庫 大黒 政子
 大阪 大川 桃花
 青森 高瀬 霜石
 和歌山 楠見 章子
 奈良 水津加央里
 大阪 内田志津子
 兵庫 山崎 武彦
 大阪 石田ひろ子
 宮城 西 恵美子
 大阪 関 よしみ
 大阪 森中恵美子
 大阪 小川賀世子
 島根 伊藤 玲子
 埼玉 中村 伸子
 鳥取 羽津川公乃
 島根 渡辺 柳子

大学に秋入学の風が吹く
 酒とろり閉ざした心ひらかせる
 妻退院カーテン広く広くあけ
 喝が貰いたくて創刊号ひらく
 パイパスで開く命のいとおしさ
 傷心を塞ぎきれないカットパン
 花ひらく早や一年の浦霞
 僧越ながら晩秋の胸などいかが
 ラストページ勿忘草が咲いている
 思い出を確かめたくて古日記
 公開と言うがやっぱり隠してる
 灰色の雲に向かつてヒラケゴマ
 チューリップひらき校庭除染中
 朝刊をひらくと熱いお茶が出る
 結んではひらくりハビリわらべ歌
 花ひらく頃の峠の茶屋が好き
 パラパラと開く無策のマニフェスト
 愛の鍵心の穴に挿してみる
 おはようと仏壇の扉を開く
 すぐ開く晴雨兼用母の傘
 十指みなひらいて闇を立ち上がる
 青い鳥ひらく心へやってくる

神奈川 山崎 修二
 大阪 安芸田泰子
 兵庫 伊勢田 毅
 広島 小島 蘭幸
 兵庫 泉水 冴子
 宮城 木田比呂朗
 兵庫 長川 哲夫
 愛媛 高橋 宏臣
 大阪 太田扶美代
 三重 上垣内利凡
 大阪 羽田野洋介
 鳥取 新家 完司
 和歌山 木本 朱夏
 広島 村上 和子
 愛知 住田勢津子
 兵庫 今井 寛
 福島 菊田 信子
 大阪 鈴木 楽鬼
 兵庫 藤井 宏造
 埼玉 星野 育子
 和歌山 宇野 幹子
 鳥取 春木圭一郎

一献一献心開いて無二の友
弁当箱開くと母の応援歌

子供らは未来をひらく鍵をもち
差別など決してしない自動ドア

開運を賭けておとこの作業服
四捨五入すると未来がひらけます

いじわるの開いてみたい腹の中
しばむ日もひらく日もみなわたし色

パワー全開ガッツで取った金メダル
五感みなひらき佇む風の中

グーからパーはうら笑顔になったでしょ
泣きに行く母の戸いつも開いていた

ノックされおんなのひらく春ごろ
瓦礫野に愁眉を開く雛祭り

リビングでひらく小さなお仏壇
竹の皮ひらくと温い塩むすび

夢開く日までノックをし続ける
この先はネット開けというイジメ

司馬遼をひもとき私だけの夜
懸命に追ってじりじり水があく

パンドラの箱をひらいた原子の火
海の深さへ握ったままの手を開く

京都 清水 英旺

大阪 福田 悦子

大阪 大浦 初音

和歌山 福重 美子

鳥取 上田 宣子

大阪 小谷 滋彦

鳥取 深澤千恵子

和歌山 木村 徑子

高知 小川てるみ

大阪 針生 和代

奈良 安土 理恵

兵庫 田中 章子

奈良 大内 朝子

宮城 吉川 留藏

兵庫 亀岡 哲子

鳥取 竹村紀の治

大阪 北出 北朗

宮城 あきたじゅん

栃木 三上 博史

佐賀 西村 正紘

大阪 山岡富美子

愛媛 花岡 順子

私を開いてみれば母ばかり

団塊へ老境の戸が今ひらく

少年のきつと翼になる両手

肅々と復興の扉をひらく

コーランを開くと今も砂嵐

絆への目を見開いた三・一一

美しい嘘聞きながら大欠伸

盃を重ねひらいた貝の口

三分咲き風の耳うち待っている

セシウムなど知らずに開く桃さくら

傘だけは俺の意のままワンタツチ

隣には負けてしまった暮らしぶり

古事記を開く国生みのおおらかさ

どこ押せばひらくだろうかバカの壁

心ひらくたった五文字のありがたう

家計簿に開腹術の跡がある

地に足を着けて女の開拓史

勤行のただひたすらに明日をみる

コチョココチョをすると蛤本音吐く

朝晩の開脚骨はまだ丈夫

女上位ルーツは天の岩戸から

努力した石の上には花ひらく

大阪 平井美智子

鳥取 加賀田志延

奈良 小林すみえ

鳥根 藤井 寿代

高知 小原 圭二

大阪 藤井 則彦

大阪 高杉 千歩

埼玉 古田 美雄

大阪 美馬りゅうこ

宮城 佐藤 安子

長野 岡田 淳

大阪 江島谷勝弘

大阪 早泉 早人

大阪 宮崎シマ子

大阪 岩佐ダン吉

愛媛 神野きつこ

和歌山 松原 寿子

宮崎 間瀬田紋章

鳥根 山根 七七

鳥取 福西 茶子

高知 桑名 孝雄

高知 近森 かよ

秘密抱き開く深夜の水中花

パソコンをひらき四次元の孤独

馥郁たる香皇后様の水仙花

五七五にそろりひらいていく心

アルバムをひらけば父の戦闘機

満開はもつと先だと生きている

歎異抄ひらきころの錆落し

み仏が春だひらけと微笑んだ

花落とす雨また花を開く雨

頑張った人には春の扉開く

マルクスをひらきカストリ呟った日

瓦礫田に開墾魂立ち上がる

ひらいたら次の扉が待っていた

開いた手赤ん坊には歯が立たぬ

いま泣いていたのにひらくコンパクト

地図ひらく嗚呼いまここが揉めている

辞書ひらく指の先から熱くなる

ダービーのように改札ひらくべし

真剣に叱ってくれた平手打ち

まほろばの歴史をひらく正倉院

チューリップ開いたままでなぜ腕く

仏壇をひらいて今日を締め括る

大阪 柿花 和夫

大阪 江見 見清

大阪 源田八千代

大阪 中崎 深雪

兵庫 中塚 礎石

佐賀 坂本 蜂朗

大阪 村上 直樹

奈良 加門 萌子

佐賀 江下 正義

鳥取 牧野 芳光

大阪 初山 隆盛

宮城 十二 佳句

和歌山 堂上 泰女

富山 有澤 嘉晃

広島 田中 敬子

広島 國實 力

鳥取 八木 千代

大阪 西村 哲夫

岐阜 草野 稔

兵庫 古川 奮水

北海道 青木ひろこ

広島 鴨田 昭紀

明日拓くために向日葵蒔いている

新春へ傘寿の翼を一ぱいに

精一杯生きたドラマに陽を当てる

バラの花やさしい風にはこぼる

被災地の子等の笑顔が明日拓く

今日ひらく味噌の香りと湯気の声

思春期の扉は少しずつ開く

秀句

ジャンケンポン人生賭けたパーを出す

炊き出しの釜ひらくとき日本人

つぎの代につなぐ定めで花開く

蕾が開くいのち万歳するように

日本をひらく風の子育てねば

星空は無料開放されてます

衝動的に開くのは月見草

胸底の荒野ひらいてみませんか

千枚田拓いた人も見た夕日

祝開店仮設の夜に赤提灯

特選

ひらめきは手すりの切れたあたりから

軸吟

がらんどろの海辺の町に目を見張る

大阪 村上 玄也

大阪 畑中 節子

宮城 小山 翠泉

大阪 宮前 秀子

兵庫 竹内 肇

鳥取 斉尾くにこ

岐阜 武藤 敏子

大阪 渡辺たかき

奈良 板垣 孝志

大阪 近藤 正

大阪 寺川 弘一

鳥取 山中 康子

和歌山 三宅 保州

京都 高島 啓子

鳥取 倉益 一瑤

大阪 奥 時雄

宮城 水戸 一志

大阪 赤松ますみ

宮城 雫石 隆子

ひらく 川上 大輪 選

封筒をひらくと母の声がする

お小言も心開くと沁みてきた
生きてる証古傷がまたひらく

あの時の花が開いた無人駅

風やわら握り拳をひらかせる

差別など決してしない自動ドア

バラ開くもう後悔はせぬという

世界への夢をひらいたトーシューズ

小坊主も悟りひらいた顔でくる

開けゴマ鏡の中のほくに言う

口開くまでは品性疑わず

世の中はどうあれ四季の花開く

ペチャンコの財布開いて子に見せる

熱湯に貝が抗議の口あける

あじの開き二人で分ける朝ごはん

たとう紙をひらくと傷がまた疼く

北海道 三浦 強一

大阪 落葉 ふみ

大阪 升成 好

愛知 林 柳泉

和歌山 福井 菜摘

和歌山 福重 美子

広島 岩本 笑子

兵庫 西村まさ子

高知 百田 快風

青森 高瀬 霜石

福岡 坂本 弘子

兵庫 東馬場美和子

大阪 加島 由一

岐阜 草野 稔

大阪 大西 晴雄

宮崎 黒木せつよ

半びらきの門扉いらいら揺れている

人の道はずさぬように眼をひらく

どこ押せばひらくだろうかバカの壁

開発がふるさとを消す歴史消す

騙された後のサイフがひらかない

ジャンプ傘突然ひらきうるたえる

ジャンケンをしたら皆んながパーを出し

風呂敷をひらけば転ぶ里の味

第二章私の夢がまたひらく

ダルマの目あいた途端に高飛車に

春ですねえ窓をひらいて蝶になる

下萌へばつと右脳のひらく音

新聞をひらくと呻き声がする

孫が目をはつちりひらく子守唄

夢ひらく春一番が吹いたから

握りこぶしひらけば消えた肩のこり

さあ窓を開こうこの世信じよう

おみくじを開く一〇〇円分の吉

仏壇を開けるとご先祖が笑う

ケセラセラ開き直りが上手いから

終止符を打てずに開く第二章

老母の文ひらけば雪が降っている

大阪 宮本かりん

鳥取 中村 金祥

大阪 宮崎シマ子

京都 都倉 求芽

大阪 高木 道子

鳥取 吉田 陽子

兵庫 矢野 野薫

鳥根 小白金房子

宮城 真田 義子

鳥取 夏目 一粹

広島 若年 幸子

奈良 水津加央里

鳥根 伊藤 玲子

大阪 神夏磯典子

大阪 池田 純子

大阪 安芸田泰子

奈良 居谷真理子

京都 高島 啓子

大阪 谷口 義

和歌山 上田 紀子

愛知 高浜 広川

鳥根 伊藤 寿美

口ひらく大臣の目が泳いでる
 平成の天の岩戸をひらきたい
 開運のお守り効き目ないみたい
 花ひらく私の根雪とけてくる
 開かねばすぐに忘れる日記帳
 うやむやという解決でお開きに
 嘘かほんととか唇をひらく
 転勤に慣れて荷物は開かない
 花ひらくときは一報下さいね
 朝刊をひらくと熱いお茶が出る
 パラパラと開く無策のマニフェスト
 花が開けば景気よくても悪くても
 手のひらをひらくと見える過去未来
 瓶のふた開ける許せぬことばかり
 道草で心の扉ひらかれる
 むすんでひらいてだんだん心丸くする
 小袋を開けて幸せ溜めてます
 美しい嘘聞きながら大欠伸
 静かですふたりの手話がひらきだす
 成長と共に親子の距離ひらく
 好奇心ページをひらく度騒ぐ
 開くまであなたにノック繰り返す

鳥取 前田喜美子
 広島 石田 素風
 京都 三宅 満子
 奈良 飛永ふりこ
 大阪 指宿千枝子
 大阪 島田 誠一
 鳥取 土橋 螢
 大阪 穂山 常男
 和歌山 古久保和子
 広島 村上 和子
 福島 菊田 信子
 大阪 荻野 像山
 奈良 古川 洋子
 青森 中村みのり
 和歌山 堀 富美子
 広島 古田比呂子
 高知 坂本紀美子
 大阪 高杉 千歩
 大阪 柴本ばつは
 和歌山 楠原 富子
 広島 藤岡ヒデコ
 大阪 山野 寿之

晴天になればひらいてくる心
 ケータイを開いて孤独確かめる
 手遅れのメスは開いてすぐ閉じる
 背開きにしたい男の影を踏む
 窓あけています笑顔を待ってます
 妻の乱天の岩戸はいつひらく
 時季はずれ開く花にもある事情
 千羽鶴ひらいてほしい明日を待つ
 見ひらいた人形の眼が乾いている
 どんと来い扉ひらいて待っている
 非常口ひらくことなく生きている
 忽然と独り芝居の幕が開く
 むすんでひらいて平均寿命またのびる
 夢開く日までノックをし続ける
 踏み絵踏む新たな僕に会いたくて
 自分から心ひらけば済むものを
 ひらく度別れの顔をする極
 脳細胞全開にして恋をする
 胸襟を開いたウソを聞かされる
 倒れないようにつま先ひらいとく
 窓を開け風と話をふくります
 心ひらくとぽつと明るい音がする

大阪 鴨谷瑠美子
 愛知 市村 文男
 大阪 米澤 俣子
 兵庫 長浜 美籠
 岡山 山崎三千代
 広島 田中 敬子
 大阪 井丸 昌紀
 奈良 粉原 トシ
 兵庫 山崎 武彦
 鳥取 前田 楓花
 兵庫 斉藤 幸男
 香川 田岡 弘
 島根 安黒登貴枝
 大阪 北出 北朗
 奈良 山田 順啓
 広島 吉永 団風
 岡山 宮崎かおる
 鳥取 細田 裕花
 大阪 井上 一筒
 徳島 徳長 怜子
 兵庫 西口いわゑ
 兵庫 梶元 世津

タイムカプセル開ける少女になりたくて

花も女もひらく美学を持っている

口ひらく度に石段踏みはずす

遺言書開封までの和やかさ

遺言書ひらけば愚痴のてんこ盛り

行間にわたしの窓が開けてある

握り拳開いて笑うことにする

ドレッサーひらけば女まだ疼く

がん二回ひらき直って生きている

一行目ずるい私を書いてある

ドア開けるこれが私の返事です

いざと言う時にはひらく知恵袋

夢に見る除染が済んでひらく窓

散る定め知って見事にひらききる

ふたごころ無いから両の手をひらく

ひらいたらきつとあなたは逃げるから

ひらいたら次の扉が待っていた

煎っても煎っても弾けない一粒

コンパクト開きおんなになる女

この扉ひらけばきつと居るあなた

思い出をこぼさぬように開く傘

欲があるからしつかり両目ひらいとく

青森 池 汀柳

大阪 森中恵美子

京都 藤井 文代

大阪 笠田 幹治

兵庫 濱邊稲佐嶽

大阪 中島 華

奈良 松本 柁子

香川 清川 玲子

和歌山 森下よりこ

兵庫 上田ひとみ

大阪 関 よしみ

鳥取 竹口 清信

大阪 岩坪 幸子

青森 碧井 溪翠

愛媛 宮尾みのり

京都 松田 俊彦

和歌山 堂上 泰女

青森 齋藤 紀

高知 岡村 千鳥

奈良 安土 理恵

兵庫 山辺 和子

鳥取 倉益 一瑤

同じとこ亦かと辞書に喰われる

人生の要にひらく父の口

花ひらくひとりぼっちの私にも

お開きになってひとりを持て余す

たまに開帳せねば窒息する秘仏

開運を賭けておとこの作業服

その中の一輪だけがひらく罪

秀 句

新聞をひらく昨日にいた私

週刊誌ひらいて足の爪を切る

生流転扉ひらいたばつかりに

希望が見えたとき涙腺がひらく

もう開くこと無いあなたとの扉

少年のきつと翼になる両手

平和だと窓を全開して思う

星空は無料開放されています

ひらくまで分からなかった花の色

ひらいても父は助けてくれぬ地図

特 選

蕾が開くのち万歳するように

軸 吟

ひらくとき花は故郷を向いている

愛媛 古手川 光

鳥取 門村 幸子

大阪 谷川 生枝

大阪 日野 愿

三重 橋倉久美子

福岡 石田 耐

宮崎 間瀬田紋章

大阪 藤原 昭

和歌山 楠見 章子

青森 石澤はる子

鳥取 斉尾くにこ

大阪 古今堂蕉子

奈良 小林すみえ

大阪 藤井満洲夫

和歌山 三宅 保州

大阪 大川 桃花

和歌山 牛尾 緑良

大阪 寺川 弘一

和歌山 川上 大輪

旅

西出楓葉選

空想の旅もケータイ切っておく
旅の朝妻は連続ドラマ見る
ちぎれ雲ふわり旅情の中にいる
振り分けた旅の荷物は愛と憎
アナログ派を癒す八十円の旅
駅前うどん屋方言も食べる
傷ついた心は旅に行ったきり
新しい風に焦がれる旅靴
生き残り賭けて旅立つ稚魚の群れ
大胆になる旅先の非日常
帰る家有るから旅をしたくなる
旅人の絆育む囲炉裏端
旅人の個性土産に顔を出し
人生は旅お土産を買い過ぎる
孫つれて絵本の中で旅をする
半世紀時間旅行のクラス会

岐阜 草野 稔
大阪 松尾美智代
愛媛 黒田 茂代
大阪 池 森子
和歌山 酒井 純子
宮崎 中武 弓
和歌山 柏原 夕胡
鳥取 門村 幸子
大阪 村上 直樹
和歌山 古久保和子
大阪 北村 賢子
大阪 初代 正彦
佐賀 峯 仙子
青森 碧井 溪翠
鳥取 山本ふみ子
兵庫 朝日 弘茂

西郷さん新幹線に目を見張る
かえらない旅にいったか折鶴よ
旅先のゴリラ愛想が悪かった
きつとある旅路の果てのユートピア
床のべに来て海鳴りを教えられ
誘われる事も無かった一人旅
パワーを貯めて最後の旅を楽しもう
百態の風におどって旅衣
その時は悔いなき旅と言うつもり
山や川越え妻という花畑
痛だとは知らない母の旅笑顔
あの鳥に代わり他国の空見たい
旅を描くでつかい画布を胸に抱く
初めての街も旅では懐かしい
旅先の雪は他人の貌で降る
やさしさが身に沁む旅のハプニング
旅立ちは一緒と妻は無理をいう
いい旅は温泉が好き人が好き
白銀の屋根に民話が満ちる宿
ひとり旅大きな花を咲かせたい
イケメンの仏と恋に落ちた旅
想い出を捨てて始まる旅がある

大阪 藤島たかこ
鳥根 松本はるみ
大阪 谷口 義
京都 都倉 求芽
兵庫 山田 耕治
大阪 沢田 和子
鳥取 政岡未延子
岡山 山本 玉恵
大阪 伊達 郁夫
佐賀 坂本 蜂朗
佐賀 久場美穂子
佐賀 江下 正義
大阪 粕山 隆盛
大阪 寺川 弘一
岡山 工藤千代子
大阪 津守なぎさ
青森 福士 慕情
大阪 吉田 信哉
和歌山 大城 好男
鳥根 黒目 英男
大阪 大島 友子
香川 田岡 弘

見えぬものの旅の道中見えてくる
 向い風仕切直しの旅つづく
 旅は佳境充電したら帰ります
 浴衣掛け歩いてみたいシャンゼリゼ
 旅立ちを知ってか庭の桜咲く
 思い出を忘れる旅のひとり膳
 五七五に詠んで心の旅続く
 旅の雲郵便局をたしかめる
 旅を行く緑の風を懷に
 福耳の羅漢を探す春の旅
 一人旅ぶらり五感を解き放つ
 断つはずの未練湧き出る旅の宿
 世界地図広げてみれば旅心
 年金の顔色を見て旅に出る
 私から私へ送る旅便り
 ブータンへ龍を育てるパスポート
 妻の旅食べましたかと聞いてくる
 旅立ちが待ち遠しげな千羽鶴
 そう言えば見かけぬ男二人旅
 携帯に旅の思い出詰めておく
 我が町をしみじみ歩くすでに旅
 旅人として足跡を置いてゆく

和歌山 土屋起世子
 兵庫 山崎 武彦
 京都 山本 昌乃
 京都 松岡 七郎
 大阪 池田 純子
 奈良 田中カズ子
 東京 高澤千恵子
 宮城 中條 節子
 兵庫 今井 寛
 大阪 平井美智子
 大阪 広島 巴子
 大阪 鈴木 楽鬼
 和歌山 川上 智三
 島根 安達 幸子
 大阪 指宿千枝子
 大阪 美馬りゅうこ
 宮城 吉川 留藏
 兵庫 前川 淳
 大阪 藤井 則彦
 鳥取 大塚美代子
 鳥取 元吉 慶子
 広島 八木 千代

お帰りとボクの枕が待っていた
 旅先で飲み大阪府知事になる
 方言を予習していくひとり旅
 あらいやだ月も一緒に露天風呂
 いい旅だ喜怒哀楽は湯気のなか
 受けた恩忘れず畳む旅衣
 旅先のきれいなトイレ忘れない
 セシウムに気ままな旅は許すまい
 旅立ちへ父が手渡す白い地図
 いい旅だ風が微笑みかけてくる
 旅の果て誰かが待っているかなあ
 探さないで下さいという旅だった
 コケシの肩にあの日の旅が蹲る
 旅に出た福沢諭吉帰らない
 桜はらはら旅の予定はこのように
 絵ハガキを自分に宛てて書く旅愁
 小さい旅スカーフだけを取りかえて
 旅に出る笑い袋の満ちるまで
 地吹雪をおもしろがっている地酒
 私を鍛える旅はまだ続く
 人生の旅なかばにてどっこいしょ
 仮の宿あと何泊の旅だろう

大阪 志田 千代
 大阪 奥 時雄
 大阪 江見 見清
 大阪 大隅 克博
 兵庫 北澤 稠民
 三重 上垣内利凡
 鳥取 吉田 弘子
 大阪 上嶋 幸雀
 大阪 安芸田泰子
 和歌山 福井 菜摘
 大阪 植村 喜代
 和歌山 三宅 保州
 兵庫 春城 年代
 島根 山根 雪代
 島根 長谷川博子
 大阪 藤井満洲夫
 大阪 徳山みつこ
 奈良 山本 柳昌
 奈良 齋藤 保子
 大阪 古田 千華
 京都 藤井 文代
 奈良 安土 理恵

人生の秋色旅は今佳境

塩こしう足してふたりの旅続く

荷くずれをゆつくり直すフルムーン

たましいが旅に出たまま帰らない

人の世の旅傷舐めてきず舐めて

時々神と行き交い古道行く

疲れたら森へ話を聞きに行く

この世からあの世へミステリーツアー

かげろうが揺れてる単線の旅情

一人旅詩人の顔を持ち歩く

いい旅をして来たらしいあかね雲

少年の旅圏外となる地まで

デジタルにまみれた我が身洗う旅

タンポポは美しい日に旅に立つ

一人旅です海荒れてますあらかしこ

西行忌に旅に出ようと決めている

道連れに選ぶのなら山頭火

有馬の湯愛の残高確かめに

旅楽し風の言葉がみな違う

みんな旅人私の横を通り過ぎ

ういのおくやまなおはるかなり旅続く

残高がゼロになるまで旅続く

大阪 針生 和代

和歌山 玉置 当代

宮崎 黒木せつよ

島根 仲田美千代

奈良 小林すみえ

大阪 吉村久仁雄

兵庫 堀 正和

大阪 前原 正美

大阪 荻野 浩子

香川 清川 玲子

青森 石澤はる子

徳島 徳長 怜子

兵庫 村上 氷筆

広島 石田 素風

兵庫 山本 義子

大阪 近藤 北舟

大阪 高田美代子

大阪 俣野登志子

奈良 枋原 トシ

和歌山 森下よりこ

兵庫 亀岡 哲子

鳥取 細田 裕花

しあわせの脆さに気付く旅の鈴

途中下車旅がヒントをくれそうだ

フルムーン還らぬ刻を埋めながら

北帰行胸のさざなみ鎮めんと

旅人を詩人にさせる風のいろ

ジグソーパズルに私を嵌める旅をする

生命線妻のは長くあれぞかし

秀句

食べることと見ること生きることが旅

この村に泊っていそう山頭火

段落をつけて陶冶の旅に出る

手付かずの森を探してひとり旅

旅はいい鱗も音をたてて落ち

旅をひとりちいさな恩をまた重ね

旅に来て洗う私の裏おもて

旅に出て細胞一つ足してくる

自転車で昭和さがしの旅に出る

旅の空呼吸自然になつてくる

特選

一冊の旅へ作者にいざなわれ

軸吟

透明になりたくてゆく旅三日

奈良 中山恵美子

広島 古田比呂子

奈良 佐藤 辰雄

和歌山 木本 朱夏

大阪 海老池 洋

鳥取 牧野 芳光

青森 高瀬 霜石

奈良 松本 柁子

大阪 柴本ばつは

大阪 中島 華

大阪 早泉 早人

大阪 吉村 一風

大阪 森中恵美子

岡山 福力 明良

和歌山 山西 佳子

奈良 渡辺 富子

大阪 出口セツ子

奈良 居谷真理子

大阪 西出 楓楽

旅

新家完司選

たが少しゆるめて旅の湯にひたる

鈍行でしみじみ胸にしみる酒

傷癒えておいしい風と旅に出る

ホカ弁を食べながら見るグルメ旅

円高につられふわふわ旅の空

故郷に旅人として迎えられ

押入れの旅行鞆が大欠伸

絵ハガキの蟹に誘われ冬の旅

B級のグルメ訪ねる小さい旅

円高に妻が地球儀回して

親子旅水木ロードのいい疲れ

脱皮して故郷の駅を発つ四月

談笑の渦に囲まれ旅まくら

旅人になって立ち食いそば吸る

旅仲間絆深まる珍道中

お土産を配ってやっと旅終る

佐賀 久場美穂子

奈良 島岡美智子

兵庫 東馬場美和子

鳥取 高浜 勇

和歌山 武本 碧

大阪 安芸田泰子

鳥根 三島 吉英

大阪 笠田 幹治

大阪 岩崎 公誠

大阪 田邊 浩三

鳥取 石谷美恵子

愛媛 古手川 光

鳥根 小白金房子

大阪 鴨谷瑠美子

大阪 田付 絹枝

大阪 大隅 克博

旅終えて家の茶粥のうまいこと

たまに出る旅が夫婦の潤滑油

旅なれて試食ですます土産物

余生とは言うまい旅はまだ途中

炭坑節おどって旅をしめくくる

旅終えて眠る日いつか雲流る

デパ地下の名産展で舌の旅

一泊の旅を洗濯機に放る

アルバムに旅の絶頂期を残す

漂泊の旅は女に似合わない

白銀の屋根に民話が満ちる宿

手術跡旅館の風呂で競いあい

病床に元気を呉れる時刻表

母白寿いつもの旅は墓まいり

この旅を続けるための第九聴く

ひとりでは何処へも行けず地図の旅

ワンカップ片手に楽し寝台車

旅三日そろそろ家が気にかかる

日暮れには家族なつかし旅の空

次は何処と旅の帰りに旅プラン

旅に出る飲屋のツケをみな払い

ケアの母連れ出しカフェへ旅五分

和歌山 堂上 泰女

鳥取 田口 清帆

兵庫 矢野 野薫

高知 小川てるみ

鳥根 安黒登貴枝

大阪 荒巻 夢

奈良 池田貴佐夫

宮崎 間瀬田紋章

愛媛 花岡 順子

和歌山 木本 朱夏

和歌山 大城 好男

鳥取 大倉 孝二

大阪 丹後屋 肇

大阪 北川やすの

宮城 あきたじゅん

広島 守本トヨコ

大阪 吉田 知之

大阪 植村 喜代

鳥取 山本ふみ子

大阪 大川 桃花

大阪 日野 愿

岡山 宮崎かおる

羞恥心忘れぬように旅をする
海外に来てまでメールしなくても
男たちを裸にしている旅ごころ
仏壇の花を入れ替え旅に出る
お取り寄せネットで今日もグルメ旅
どこ行くのしつかり付いて行くツアー
旅先のきれいなトイレ忘れない
方言の接待うれし旅の宿
ゆくあてのない旅海を見えています
独り旅びつたりと合うウイスキー
思いつきの旅は三丁目の夕日
旅の空丹頂鶴が舞い下りる
自転車で昭和さがしの旅に出る
極楽を探して歩く旅なかば
津軽三味忘れられない旅となる
床のべに来て海鳴りを教えられ
旅はいい座つていけば膳が出る
出張の帰途は竹輪とワンカップ
散歩道コース変えたと旅気分
アロハの風詰めて帰った旅靴
旅の空ふと見上げたら祭り風
カラオケのマイク放さぬバスツアー

大阪 渡辺たかき
大阪 高杉 力
大阪 森中恵美子
愛知 城山 道子
宮城 佐藤 安子
大阪 江見 見清
鳥取 吉田 弘子
鳥取 西谷 悦子
兵庫 酒井 真由
大阪 上山 堅坊
兵庫 黒田 能子
鳥根 錦織 禮子
奈良 渡辺 富子
鳥取 土橋 螢
兵庫 吉村めぐみ
兵庫 山田 耕治
大阪 木見谷孝代
高知 小原 圭二
宮城 大久保元司
大阪 米澤 俣子
鳥根 熱田熊四郎
鳥根 三島 崧丘

フルムーンになつても歩幅合わせま
ハネムーンの思い出せるフルムーン
好きな本抱いて鈍行ひとり旅
我が旅は年に一度の帰省のみ
鈍行の旅で天国までいか
せかせかと生きて今宵は旅の宿
荷ぐずれをゆつくり直すフルムーン
この世からあの世へミステリーツアー
ありがとう世界の旅をお茶の間で
弥次喜多を妻と演じて旅途中
バスの旅後部座席が盛り上げる
青春切符広島やきを食べに行く
抽選ですか天国往きのバスポート
遺伝子にすり込む旅のいい景色
恩人に鮮魚を送る北の旅
歯車が軋みだしたら旅にでる
紙コップ潰して今日の旅終る
アイパッド小脇に連れてプチ旅行
バス旅行喋りまくって大軒
みちのくへおいでおいでと招き猫
旅支度スマホとカード2枚だけ
コーヒーがことさうまい旅の朝

三重 北田のりこ
奈良 山田紀代美
大阪 高田美代子
大阪 岩坪 幸子
和歌山 楠見 章子
鳥根 多田志津子
宮崎 黒木せつよ
大阪 前原 正美
広島 石原 淑子
大阪 坂 裕之
和歌山 福呂 秀子
大阪 石橋 直子
岡山 山崎三千代
大阪 加島 由一
大阪 鈴木 敬二
大阪 山岡富美子
大阪 沢田 和子
大阪 富田 美義
鳥根 尾原 米估
鳥取 藤原 鬼桜
兵庫 朝日 弘茂
三重 橋倉久美子

手に取るとおしゃべりします旅プラン

墓だけが待つ故郷へ帰る旅

手付かずの森を探してひとり旅

千円の靴でも旅の空青い

束の間の旅を楽しむシャボン玉

旅に出て細胞一つ足してくる

旅の朝妻は連続ドラマ見る

パリに来て日本のアニメ見ています

ケンカせぬ約束をしてフルムーン

福耳の羅漢を探す春の旅

地方紙を読むのも楽しい旅の宿

様ざまなトイレ見てきたバスツアー

お土産をさがし廻って旅終る

旅ひとりおまけにもらう大落暉

逝くときもふらりと旅に出るように

一冊の旅へ作者にいざなわれ

旅立ちへ背中を押してくれた母

ハワイまでアノ木ナンノ木見に行った

東北を旅して何も手伝わず

森を出て森に還ってゆく満

一年の旅の列車が早すぎる

保険金沢山かけて空の旅

大阪 立蔵 信子

大阪 小谷 集一

大阪 早泉 早人

和歌山 土屋起世子

岡山 福力 明良

和歌山 山西 佳子

大阪 松尾美智代

愛媛 神野きつこ

大阪 増田 隆昭

大阪 平井美智子

兵庫 藤井 宏造

愛知 早川 遡行

大阪 左右田泰雄

和歌山 木村 徑子

京都 松田 俊彦

奈良 居谷真理子

和歌山 喜田 准一

鳥取 竹信 照彦

広島 重家三の丸

栃木 萩原 鹿声

和歌山 川上 智三

大阪 北村 賢子

人に道聞くのが好きで旅に出る

ぬかるみの旅をあなたと半世紀

一万円未満のツアーよく喋り

アフリカを出て人類の長い旅

宿帳に喜寿や傘寿の字が踊る

遍路旅きょうも無欲になりきれず

サービスイリア私のバスはどれですか

秀句

くちづけをすることもないフルムーン

七十億旅人乗せている地球

デジタルにまみれた我が身洗う旅

食べることと見ること生きることが旅

ジャガイモを食べに富良野の辺りまで

小さい旅スカーフだけを取りかえて

我が町をしみじみ歩くすでに旅

イケメンの仏と恋に落ちた旅

旅先のゴリラ愛想が悪かった

春風とセブイレブンまでの旅

特選

いい旅だったとキーホルダーを買う

軸吟

元気な顔だけでよろしい旅土産

大阪 藤原 昭

岐阜 草野 稔

愛媛 宮尾みのり

長崎 才木 八郎

広島 國實 力

鳥取 福西 茶子

大阪 井丸 昌紀

三重 吉崎 柳歩

鳥取 奥谷 彩子

兵庫 村上 氷筆

奈良 松本 柁子

愛媛 中居 善信

大阪 徳山みつこ

広島 元吉 慶子

大阪 大島 友子

大阪 谷口 義

岡山 工藤千代子

大阪 内藤 憲彦

鳥取 新家 完司

雑詠

田中新一選

海は吠え地は裂けるとも咲く命
 あの日など何も語らぬ瑠璃の海
 あの日から瓦礫がきいている嗚咽
 仏壇を開き会いたいののは母だ
 仮設小屋一升瓶に手が延びる
 被災地の笑顔は北の底力
 雪国の素朴な祈り春よこい
 ふるさとを取り戻そうと海へ出る
 武器輸出報いはやがてやってくる
 年金を貰う雀が泣いている
 増税の本音黒衣がすけて見え
 基地は嫌ガレキも嫌という絆
 酒好きはつい悪友に仕分けられ
 叱る者いない酒などうまくない
 受け皿に溢れた酒の旨いこと
 ふる里を語れば母で締め括る

大阪 宮園射月芳
 山形 秋華 愛
 和歌山 木村 徑子
 愛知 林 柳泉
 宮城 鳩原 弘
 大阪 西浦 一慧
 岐阜 草野 稔
 大阪 遠山 唯教
 大阪 前川 善之
 広島 北村 泉
 兵庫 伊勢田 毅
 京都 松岡 七郎
 大阪 坂上 淳司
 岡山 小野真備雄
 大阪 上山 堅坊
 鳥取 吉田 弘子

ふるさとで洗う都会で受けた傷
 喧騒を逃れた山で人恋し
 過疎の駅風と握手をして別れ
 おみくじは大吉だった帰り道
 昭和史を走り続けてきた車輪
 形振りも構わず生きた寡婦の意地
 赤茶けたメモあり亡母の梅酒瓶
 冷静に量る自分の目の高さ
 ありがとうそのひと言で頑張れる
 人並の暮しに倍の汗をかく
 運命という激流にたちむかう
 陰口も増えて立派なボスになる
 一杯の水のうまさよあ命
 明日という味方が僕にいてくれる
 湯で顔を洗って墮落した気分
 にんげんの海でケイタイ飼っている
 逆転の王手みかんの皮を剥く
 フロイトをかじってからの不眠症
 危険水域までは自分に許す恋
 ホスピスは無言のままで鶴を折る
 肩に手をまわしてくれた春の風
 内視鏡ごときに腹を探られる

愛媛 花岡 順子
 大阪 北出 北朗
 岐阜 小林 映汎
 兵庫 吉村めぐみ
 青森 福士 慕情
 鳥取 大塚美代子
 佐賀 松村 照代
 神奈川 杉山 太郎
 大阪 松尾美智代
 兵庫 山口 光久
 鳥取 小西 雄々
 兵庫 片山 忠
 兵庫 春城 年代
 大阪 海老池 洋
 高知 小原 圭二
 青森 松山 芳生
 高知 百田 快風
 大阪 柿花 和夫
 鳥取 萩原みゆき
 大阪 太田 昭
 大阪 鴨谷瑠美子
 北海道 小沢 淳

思い切つてはじめて見たら友が増え
朗らかなヘルパーが来て生かされる

恍惚の母の手にある春の種

真善美軸のぶれない友と居る

愚痴の種まいて夫の愛探る

三食をきちんと食べている元氣

言い訳はせず少年は北を向く

鈍行に乗り換えました古希の駅

飛びこめる勇気をくれたのは笑顔

極楽はこんなものよと日向ぼこ

だんだんとオブジェになっていく頑固

北風が免疫力になつて春

カテール心も覗きオベ勧め

風邪ぎみの和尚に辛い三部経

古着解く褪せた裏地もいとおいしい

主婦の朝オンオンオンで回りだす

平和つていいね梵鐘鳴りひびく

蟹味噌よ日本海は荒れている

ゆらゆらと湯気立つ鍋の幸せ度

車座を出ようと思う春の雨

苦しみのページめくるとバラの花

荒波に負けてなるかと立つ触先

大阪 平嶋美智子

和歌山 長谷川葉子

宮崎 川崎 敬女

和歌山 堂上 泰女

大阪 笠田 幹治

島根 山根 邦代

愛媛 高橋 宏臣

岐阜 武藤 敏子

大阪 木見谷孝代

大阪 指宿千枝子

大阪 美馬りゆうこ

和歌山 小川あき子

奈良 宇賀 史郎

佐賀 山口 高明

大阪 山本 半錢

静岡 米山明日歌

京都 山本 昌乃

京都 奥山 晴生

兵庫 濱邊稻佐嶽

宮城 中條 節子

宮崎 稲毛 寛

大阪 藤井満洲夫

先頭を走って知った風当たり

復活のいのちへ咀嚼倍にする

預金出す列淡々と押し黙り

花のない花瓶を見ては亡妻偲ぶ

ポリウムを上げ姑さんの誕生日

かたくなはおよしなさいと蜆汁

脛かじり止めた息子が他人めく

大げさな拍手にやる氣くすぐられ

脳の錆いつも笑顔で庇ってる

良い人と言われる程のワルでない

煙たくてややこしいけどいてほしい

喪中見舞にすこし笑いを入れておく

ボンとこの世が変わるでんぐり返り

ユーモアのわからぬ猫と住んでいる

余力残し沈む夕陽が潔い

人情の海に溺れた自尊心

耐え抜いた心こそ知る夜明け前

自画像はこんなものかと妥協する

銀世界弔い人の黒きこと

喜寿過ぎたストレステスト受けてみる

思い出し笑いをしてる白い雲

兄弟で飲めば父母生き返る

鳥取 深澤千恵子

大阪 谷口 東風

大阪 中野 健吾

兵庫 矢野 野薫

大阪 樋口 冬虹

大阪 志田 千代

山口 平田 実男

鳥取 山本ふみ子

和歌山 土屋起世子

大阪 坂 たかし

奈良 大久保真澄

大阪 森中恵美子

東京 山田こいし

大阪 板尾 岳人

埼玉 宮原 常寿

福島 皆川久美子

鳥取 吉野いさお

大阪 村上 玄也

高知 豊澤ただし

大阪 杉谷 和雄

奈良 中山恵美子

大阪 奥 時雄

生きていく長い尻尾をひきずつて
足跡はしっかりと付けて子に残す
幕引きはピエロになると決めている
生前葬はまだ死ぬ気ないらしい
綿菓子で軽さで生きてみたくなる
訂正印押して素直に生きている
石積んで崩してゆっくり生きている
長生きの是非を問うてる花あかり
裸でも熱き新芽を抱いている
伸びきったゴムのほほんと欠伸する
加齢です軽く言われてからのうつ
梅さくら命の音と風の息
空っぽになるまで波の音を聴く
不器用な背なだ正面だけを向く
笑うこと少なくなつてゆく夕日
底知れぬ淋しさ吸る割子そば
雪しんしん胸底深く積もらせる
B面に住んで寒さに耐えている
失った心をもどす墨を磨る
ゆっくりと下山の準備整える
句読点しっかりと打って下り坂
真冬日ヘジョークひとつも決まらない

鳥取 牧野 芳光
大阪 中井 アキ
和歌山 岡本 昇
群馬 勢藤 隆
三重 橋倉久美子
大阪 森村 美花
大阪 岩崎 公誠
奈良 板垣 孝志
奈良 増井 純子
和歌山 楠見 章子
大阪 寺井 弘子
大阪 池 森子
奈良 菱木 誠
高知 清水由紀子
兵庫 牧渕富喜子
島根 長谷川博子
兵庫 奥田みつ子
香川 田岡 弘
京都 松田 俊彦
奈良 毛利 元子
大阪 小谷 集一
大阪 西出 楓楽

深読みをするほどこわくなる童話
落とし穴おいしい匂い立ちこめる
家族愛くらべるものは何もない
心まで裸にすれば角が立つ
机には孤独に堪えるタバコ盆
男にも女にもある春の色
鯛焼きの尻尾に父の詩がある
秀 句
新しい生き方があるパスワード
なりふりを脱ぎ捨て迷路から抜ける
女の海満たす風なら抱かれよう
一眠りすれば違つて見える色
盆栽の声は聞こえる遠い耳
干し竿に届き辛くて母を知る
そのうちに下手もおもしろい味となる
許す気はないのに解けてゆく氷
生きているただそれだけで価値がある
不器用に愚かに生きている豊か
特 選
心まで貧しくならぬよう笑う
いのち果てるまでもっともつとを叫ぶ
軸 吟

大阪 荻野 浩子
大阪 越智 幸
兵庫 酒井 真由
佐賀 木村 宏
大阪 西村 哲夫
鳥取 土橋 螢
秋田 加藤 円心
大阪 赤松ますみ
大阪 吉道航太郎
高知 岡村 千鳥
大阪 神野千恵子
佐賀 江下 正義
島根 松尾 芳恵
奈良 小林すみえ
大阪 片岡智恵子
鳥取 春木圭一郎
奈良 大内 朝子
大阪 出口セツ子
大阪 田中 新一

雑詠

小島蘭幸選

何事もなかったように母白寿

明日という味方が僕にいてくれる

人柄に引かれて集う輪が育つ

年金の一枚岩に守られる

除染され落葉に還る土がない

艶消して祖母らしい顔出している

渡り鳥空の深さを知っている

空っぽになるまで波の音を聴く

てのひらに無限の夢をあそばせる

幕引きはピエロになると決めている

イケメンのドラマが好きでまだ女

窓開けて女の匂い消しておく

吉報の札を地蔵に言うところ

生きてゆく答えは足の裏にある

人間が好きで信じている未来

故郷喪失千の袴りが飢する

和歌山 磯部 義雄

大阪 海老池 洋

大阪 坂 裕之

兵庫 水田 蓉子

茨城 桧村 日華

鳥取 政岡未延子

北海道 青木ひろこ

奈良 菱木 誠

兵庫 長浜 美籠

和歌山 岡本 昇

愛知 城山 道子

愛知 早川 遯行

奈良 佐藤 辰雄

鳥根 長谷川博子

大阪 出口セツ子

鳥根 伊藤 寿美

法螺貝の鳴咽に海が押し黙る

ディサービスに行く元気な方だった

真善美軸のぶれない友と居る

わが道と決めたレールだよく磨く

雪がやむ雪の話は消えてゆく

悲しみを抜けて戻って来た笑顔

根っ子から惚れて刺には気がつかず

宇宙まで技術を伸ばす町工場

人間の声のぬくもり民話聞く

重箱の隅で発酵する噂

気がつけば雪に囲まれひとり住む

古里に甘えて今日は泣きに来た

会者定離ああ父を抱く母をだく

満ち欠けはすれどまあるいマイハート

静けさに響く写経の筆の音

朗らかなヘルパーが来て生かされる

悔しかった日々前向きに光らせる

煮くずれる前にとり出した信実

無手勝流まごころだけは持っている

運命と思えば今を生きられる

いつだって泣ける涙は溜めてある

ええことは言わぬが人は悪くない

宮城 丸山あずさ

広島 山内 房子

和歌山 堂上 泰女

大阪 升成 好

青森 高森 一吞

大阪 小泉ひさ乃

京都 松岡 七郎

大阪 清水 保雄

鳥取 門村 幸子

広島 國實 力

鳥根 渡辺 柳子

広島 池田 苔石

宮城 佐藤 安子

大阪 大隅 克博

鳥根 三島 吉英

和歌山 長谷川葉子

大阪 市川 雄太

宮崎 黒木せつよ

大阪 山岡富美子

高知 小川てるみ

北海道 高橋 双葉

大阪 栗田 久子

にんげんの海でケイタイ飼っている
 恍惚の母の手にある春の種
 ありふれた日を記念日にする魔法
 鏡にもあるの好きな日嫌いな日
 陰口も増えて立派なボスになる
 長生きの血筋が少し重くなる
 義理チョコは冬山用に貯めて置く
 友達の手定を聞いている二月
 身の回り少しスリムに老い支度
 重大な話は両の耳で聞く
 そのうちに下手もおもしろい味となる
 夫不在わたくしだけの夜が広い
 少子化が教室を遊ばせている
 世界語になった津波の恐ろしさ
 家族と趣味を天秤にかけている
 明日への入口にする夕茜
 バントヒットぐらいはたまにあるこの世
 弁慶のごとく一本松が立つ
 だんだんとオブジェになっていく頑固
 赴任地の寒さ憶えている下着
 雪国にはかり律儀に降る雪よ
 鉛筆の芯は機嫌がいいようだ

青森 松山 芳生
 宮城 川崎 敬女
 大阪 阪本こみち
 宮城 西 恵美子
 兵庫 片山 忠
 島根 藤岡 千里
 大阪 次井 義泰
 鳥取 土橋 螢
 兵庫 久保田千代
 和歌山 楠原 富子
 奈良 小林すみえ
 和歌山 山西 佳子
 茨城 毛利 由美
 和歌山 川上 智三
 大阪 山本希久子
 奈良 松本 征子
 大阪 吉道あかね
 大阪 谷口 東風
 大阪 美馬りゅうこ
 高知 小原 圭二
 三重 吉崎 柳歩
 兵庫 前川 淳

傍に居てほしい出世もしてほしい
 ユーモアのわからぬ猫と住んでいる
 ポンとこの世が変わるでんぐり返り
 星条旗ホイットニーの死に揺れる
 両の手で春の音符を掬います
 あの時も空を見ていたなと思う
 隙だらけだからあなたは人が好く
 バランスをとるため今日は負けておく
 生前葬まだまだ死ぬ気ないらしい
 菜の花の海に奢りを捨てに来る
 鯨幕背にし弾んでくる会話
 透明になったひと雨降りました
 柵をすばと切つて始発駅
 蟹味噌よ日本海は荒れている
 箸一膳茶碗一つの水の音
 鬼も蛇も天使も棲んで人である
 正解が出そうでない鯉の口
 海は吠え地は裂けるとも咲く命
 手榴弾のかたちに檸檬香しき
 ゆつくりとわたしを食べている暦
 一番に肩叩かれるイエスマン
 電線を揺らして白い鬼が舞う

和歌山 酒井 純子
 大阪 板尾 岳人
 東京 山田こいし
 愛媛 神野きつこ
 岡山 山本 美枝
 大阪 立蔵 信子
 高知 黒岩啓二郎
 大阪 石橋 優明
 群馬 勢藤 隆
 愛媛 渡邊伊津志
 島根 安黒登貴枝
 大阪 山野 寿之
 兵庫 山口 光久
 京都 奥山 晴生
 大阪 河野 彦次
 兵庫 今井 寛
 大阪 赤松ますみ
 大阪 宮園射月芳
 和歌山 木本 朱夏
 岡山 工藤千代子
 大阪 伏見 雅明
 鳥取 稲川みどり

谷折りに溜まるどうにもならぬこと
 七歳のわたしの遊ぶ亡父の庭
 廃止炉の終章完の字が書けぬ
 終章へ春が重なり合ってくる
 朽ちるまで踏まれて欲しくない地雷
 ふるさとを取り戻そうと海へ出る
 紙おむつ様とよんでもよろしいか
 受け皿に溢れた酒の旨いこと
 家計簿に戒厳令をしく不況
 縁あつて夫婦はやがて風景に
 やさしさに飢えておれおれ詐欺に遭う
 頬杖をつくと聞こえる春の音
 受賞式の子一生やるだろう
 お寺からうどんを喰べに来いと言う
 生きていく哀を脱いだり重ねたり
 振向いてみようか倒れてみようか
 叱る者いい酒などうまくない
 海の音聴きたい葦を折ってみる
 不況の町に横たわつてムンクの絵
 黙契を違えず花の季が巡る
 天国はスカイツリーで行きましよう
 訂正印押して素直に生きている

奈良 柳瀬 孝子
 広島 若年 幸子
 奈良 池田貴佐夫
 秋田 加藤 円心
 青森 高瀬 霜石
 大阪 遠山 唯教
 大阪 谷川 生枝
 大阪 上山 堅坊
 愛知 藤田 千休
 兵庫 北澤 稠民
 山口 平田 実男
 大阪 寺井 弘子
 兵庫 山田 耕治
 兵庫 濱邊稻佐嶽
 奈良 毛利 元子
 大阪 谷口 義
 岡山 小野真備雄
 栃木 荻原 鹿声
 鳥取 牧野 芳光
 兵庫 赤井 花城
 兵庫 泉水 冴子
 大阪 森村 美花

ひとりて拝むみんなが知っているほとけ
 晩年は造花のごとくうつくしく
 触れないでも少し咲いていたいから
 深読みをするほどこわくなる童話
 いい街だ本屋三軒まだ残る
 きみと逢うひかりの羽音たずさえて
 盆栽の声は聞える遠い耳

秀句

鈍行に乗換えました古希の駅
 賑やかな宴の中にいる仏
 わたくしのようなものです作句帳
 わたくしの黒吐き出している仏間
 座布団の隅に熾火を置いてくる
 鮮やかに起承転結するさくら
 木枯しも天地の慈しみだった
 大切にして欲しいことばを書いている
 一合で宇宙遊泳できる僕
 車座を出ようと思う春の雨
 後ろから抱き締められた春だった
 軸 吟
 熱が出たのも転んだことも秘密

鳥取 八木 千代
 鳥取 松島りんこ
 大阪 米澤 俣子
 大阪 荻野 浩子
 徳島 徳長 怜子
 東京 やまぐち珠美
 佐賀 江下 正義

岐阜 武藤 敏子
 鳥根 岸 桂子
 愛媛 中居 善信
 鳥取 倉益 一瑤
 青森 岩渕 黙人
 奈良 加門 萌子
 奈良 居谷真理子
 大阪 森中惠美子
 大阪 村上 玄也
 宮城 中條 節子
 大阪 上嶋 幸雀
 広島 小島 蘭幸

第一回 春の川柳塔まつり

誌上大会参加者

総数七六五名
順不同・敬称略

【北海道】大橋政良 小沢 淳 青木ひろこ
高橋双葉 高津戸明 三浦強一 八木柳雀
【青森】池 汀柳 稲見則彦 石澤はる子
岩淵黙人 齋藤 紀 高瀬霜石 中村みのり
高森一吞 福士稟情 碧井溪翠 吉川ひとし
松山芳生 北山まみどり 須藤しんのすけ
【秋田】加藤円心
【山形】秋葉 愛
【岩手】加差野静浪
【宮城】鹿野 椿 小山翠泉 大久保元司
佐藤安子 真田義子 十二佳句 木田比呂朗
中條節子 西恵美子 鳩原 弘 齋藤てい子
水戸一志 吉川留藏 中沢ゆり子
仁多見千絵 丸山あずさ あきたじゅん
中津川シゲ子
【福島】小川陽子 菊田信子 皆川久美子
佐藤彰宏
【茨城】櫻村日華 佐瀬貴子 毛利由美
【栃木】荻原鹿声 三上博史
【群馬】勢藤 隆
【埼玉】帶素素峰 中村伸子 小田島六郎

古田美雄 星野育子 宮原常寿
【千葉】安部離染数
【東京】上原 稔 大竹一良 井上つよし
高岡弥生 竹田正克 沼 希泉 高澤千恵子
山田こいし やまぐち珠美
【神奈川】菊地政勝 杉山太郎 小野句多留
本郷 宏 山崎修二 小野寺てい子
【長野】岡田 淳 高木敬介
【富山】有澤嘉晃
【石川】地島 徹
【岐阜】草野 稔 小林映汎 武藤敏子
平野あずま
【静岡】岡田史郎 中田 尚 米山明日歌
【愛知】市村文男 一柳昭子 住田勢津子
梶田隆男 城山道子 高浜広川 廣田千恵子
丹羽恵俊 早川遯行 林 柳泉 藤田千休
前田捨夫 脇田雅美
【三重】吉崎柳歩 上垣内利凡
北田のりこ 橋倉久美子 弓橋おさむ
【京都】井上森生 奥山晴生 都倉求芽
清水英旺 高島啓子 西村益子 藤井文代

榎本安子 松岡七郎 松田俊彦 三宅満子
山田葉子 山本昌乃
【大阪】龜山常男 油谷克己 赤松ますみ
荒木郁子 荒巻 夢 池田純子 安芸田泰子
池 森子 石橋直子 石橋優明 石田ひろ子
板尾岳人 市川雄太 稲葉 洋 井上登美子
井上一箇 井上桂作 井上照子 指宿千枝子
井九昌紀 入江秀雄 岩崎公誠 岩佐ダン吉
岩崎玲子 岩坪幸子 上嶋幸雀 内田志津子
植村喜代 魚住順子 上山堅坊 江島公勝弘
榎本舞夢 海老池洋 戎 迪世 大島美智代
江見見清 大浦初音 大川桃花 太田としお
大島友子 大隅克博 大西晴雄 太田扶美代
太田 昭 岡野一幸 岡本 勲 小栢こずえ
荻野像山 荻野浩子 沖村論孝 小川賀世子
奥 時雄 奥村五月 長西昭好 片岡智恵子
小谷滋彦 越智 幸 落葉ふみ 片山かずお
柿花和夫 籠島恵子 笠嶋惠美 神夏磯典子
笠田幹治 加島由一 河井庸佑 鴨谷瑠美子
川端一步 北出北朗 北村賢子 北川やすの
栗田久子 黒岩靖博 黒川孤遊 木虎よしお
源田啓生 河野彦次 小谷集一 木見谷孝代
小林三楽 小林わこ 近藤 正 桑田ゆきの
近藤北舟 斎藤泰子 坂たかし 源田八千代
坂 裕之 坂上淳司 佐甲昭二 小泉ひさ乃
佐藤忠昭 澤井敏治 沢田和子 古今堂蕉子

志田千代 柴田敬子 島田誠一 小山惠美子
清水保雄 初代正彦 杉谷和雄 酒井勇太郎
杉本義昭 鈴木敬二 鈴木柴鬼 阪本こみち
須磨活恵 関よしみ 田浦 實 坂本ミヨノ
田付絹枝 伊達郁夫 高木道子 佐々木満作
高杉 力 高杉千歩 竹森雀舎 柴本ばっは
立藏信子 谷久美子 谷川生枝 神野千恵子
谷川徹生 谷口東風 谷口 義 鈴木いさお
田原勝弘 田邊浩三 丹後屋肇 左右田泰雄
次井義泰 辻村ヒロ 堤 檣代 瀬戸まさよ
津守柳伸 鶴田遠野 寺井弘子 高田美代子
寺川弘一 遠山唯教 富田美義 土屋百合子
富田保子 内藤憲彦 内藤光枝 津村志華子
中井アキ 中井智代 永井縣作 津守なぎさ
中岡香代 中崎深雪 中島 華 出口セツ子
中野健吾 西浦一慧 西出楓楽 徳山みつこ
西村哲夫 野下之男 畑中節子 富山ルイ子
早泉早人 針生和代 広島巴子 西村りつえ
廣谷千恵 日野 愿 福田悦子 羽田野洋介
藤井正雄 藤井則彦 藤塚克三 原田すみ子
伏見雅明 藤村成成 藤原 昭 平井美智子
古田千華 樋口順子 樋口冬虹 平嶋美智子
前たもつ 前川善之 前田洋二 平松かずみ
松岡 篤 前原正美 増田和幸 藤井満洲夫
増田隆昭 升成 好 水谷正子 藤島たかこ
水野黒兎 峯村勲弘 宮前秀子 弘津秋の子

向井 清 村上直樹 村上玄也 本田みちる
初山隆盛 森 茜 森田 麗 松尾美智代
森村美花 森本弘風 山上恵子 松本さつき
矢倉五月 山崎君子 山本蛙城 増井ヨシ枝
山本エミ 山本半銭 山野寿之 俣野登志子
横山捷也 吉岡 修 吉田知之 宮崎シマ子
吉田信哉 吉村一風 米澤假子 宮園射月芳
米田水昇 若松雅枝 渡辺 修 宮本かりん
森中恵美子 山岡富美子 安田由美子
山本希久子 吉内タカ子 吉田喜代子
吉道あかね 吉道航太郎 吉村久仁雄
渡辺たかき 大久保のん子 美馬りゆうこ
〔兵 庫〕 青木基輔 赤井花城 岩下さゆ子
朝日弘茂 蘆田利嘉 足立 茂 上垣キヨミ
石川憲政 石原蔵子 伊勢田毅 上田ひとみ
泉水牙子 市坪武臣 井上忠貞 大久保泰子
井上 龍 今井 寛 井本 操 緒方美津子
大黒政子 尾崎一子 長川哲夫 奥田みつ子
加川靖鬼 片山 忠 株元玲子 河原野折杭
亀岡哲子 北澤稠民 北野哲男 神崎みき子
黒田能子 桃谷和郎 上月格男 黒崎美紗子
齊藤幸男 酒井真由 酒田浩司 久保田千代
佐々木勇 軸丸勝巳 島崎夏子 小池桔理子
梶元世津 竹内 肇 田中章子 竹山千賀子
遠山可住 中井茂幸 長島敏子 中上千代子
中塚礎石 長野峰明 長浜美籠 七反田順子

西内朋月 西脇富美 春城年代 西口いわゑ
福島弘子 福田好文 藤井安造 西村まさ子
藤岡りこ 舟辺隆雄 古川奮水 服部早加永
古川真陶 堀 正和 前川 淳 前川千津子
松本一等 丸山一之 丸山孔一 濱邊稲佐嶽
水田蓉子 南谷 到 村上氷筆 福田喜代子
矢野野薫 山口光久 山口不動 牧潤富喜子
山崎武彦 山田耕治 山辺和子 松下比ろ志
山本義子 吉田左知 渡辺柳明 村山あかり
東馬場美和子 山田婦美子 吉村めぐみ
〔奈 良〕 安土理恵 阿部紀子 池田貴佐夫
井倉和子 板垣孝志 宇賀史郎 居谷真理子
上田幸一 大内朝子 岡本輝子 大久保真澄
鍛原千里 加門萌子 五味尚子 小林すみえ
齋藤保子 阪口幸一 佐藤辰雄 坂田笑津子
枋原トシ 中村勝弘 那須鎮彦 島岡美智子
西澤知子 菱木 誠 古川洋子 水津加央里
坊農柳弘 増井純子 松本柁子 竹田かほる
南 芳枝 毛利元子 柳瀬孝子 田中カズ子
山田順啓 山本柳昌 米田恭昌 飛永ふりこ
渡辺富子 辻内げんえい 中山惠美子
野田てるを 山下怜依子 山田紀代美
〔和歌山〕 石田隆彦 磯部義雄 小川あき子
上田紀子 牛尾緑良 宇野幹子 坂部かずみ
大崎可動 岡本 昇 小川イセ 坂部紀久子
大城好男 柏原夕胡 川上智三 土屋起世子

喜田准一 木下侃大 木村徑子 長谷川葉子

木本朱夏 楠見章子 楠原富子 古久保和子

小谷小雪 酒井純子 崎山文代 森下よりこ

武本 碧 田中輝子 玉置当代 辻内次根

堂上泰女 平田元三 福井菜摘 福重美子

福本英子 福呂秀子 堀富美子 前田真弓

松尾和香 松原寿子 三宅保州 山西佳子

【鳥取】飯野喜子 生田寒之 有沢せつ子

池澤大鯢 岩崎和子 上田宣子 石谷美恵子

大倉孝二 大前安子 奥谷彩子 稲川みどり

小野鶴子 加藤茶人 加藤正二 大塚美代子

門村幸子 岸本宏章 岸本孝子 加賀田志延

倉益一瑠 小飼和代 小西雄々 黒田けい子

新家完司 鈴木一弘 高田 興 後藤美恵子

高浜 勇 田口清帆 竹口清信 斉尾くにこ

竹信照彦 津村律子 露子政枝 坂本とも湖

土橋 螢 中井虎尾 中原章子 谷口回春子

中村金祥 夏目一粹 西川和子 田中紀美恵

西谷悦子 能見慶一 橋谷静江 竹村紀の治

林 瑞枝 福西茶子 平尾菜美 中西智恵子

藤原鬼枝 細田裕花 前田楓花 萩原みゆき

牧野芳光 松本仁子 見山温子 羽津川公乃

森山盛枝 八木千代 山下凱柳 春木圭一郎

山中康子 吉田弘子 深澤千恵子

吉田陽子 湯浅久司 前田喜美子

政岡未延子 松島りんこ 山本ふみ子

吉野いさお

【鳥根】相見柳歩 安達幸子 安黒登貴枝

家熊ゆき 石橋芳山 伊藤寿美 熱田熊四郎

伊藤玲子 奥田勝子 尾原米佑 石倉美佐子

岸 桂子 黒目英男 田中堂太 遠藤有希子

富田蘭水 錦織禮子 藤井寿代 嘉藤アサ子

藤岡千里 福岡耕治 藤波涼子 小白金房子

松尾芳恵 松本文子 三島淞丘 清水美智子

三島吉英 山根雪代 山根七七 多久和敬子

渡辺柳子 山根邦代 多久和博子

多久田志津子 竹治ちかし 仲田美千代

錦織よねこ 長谷川博子 松本はるみ

【岡山】小林妻子 福力明良 小野真備雄

船越洋行 丸橋野蒜 森ふみか 工藤千代子

山本主恵 山本美枝 戸田まさこ

宮崎かおる 山崎三千代

【広島】池田蒼石 石田素風 重家三の丸

石原淑子 岩本笑子 岩本雅代 國兼千代美

大下規代 大野年子 金沢節生 瀬尾美智子

鴨田昭紀 菅 弘子 岸本 清 藤岡ヒデコ

北村 泉 國實 力 小島蘭幸 古田比呂子

若年幸子 田中敬子 田中榮恵 守本トヨコ

土井輝恵 中谷六口 野村賢悟 馬場利子

松田栄香 村上和子 元吉慶子 山内房子

吉水団風 六田半徳

【山口】平田実男

【徳島】徳長怜子

【香川】清川玲子 田岡 弘 川崎ひかり

【愛媛】黒田茂代 古手川光 神野きつこ

高橋宏臣 中居善信 花岡順子 宮尾みのり

渡邊伊津志

【高知】岩河誠三 岡林京子 小川てるみ

岡村千鳥 小澤幸泉 小原圭二 黒岩啓二郎

桑名孝雄 澤村哲史 近森かよ 坂本紀美子

成岡美々 百田快風 清水由紀子

豊澤ただし

【福岡】石田 耐 坂本弘子 福永せつ子

久恒節治 本田さくら

【佐賀】岩崎 實 江下正義 久場美穂子

川道好隆 北村松風 木村 宏 中村富美子

坂本峰朗 高島 保 中島幸子 西村正紘

仁部四郎 樋口輝夫 松村昭代 峯 仙子

山口高明 吉富節子

【長崎】才木八郎

【熊本】永田俊子 前田高德 黒木せつよ

【宮崎】稲毛 寛 川崎敬女 黒木せつよ

桜木えり 七條美千 富田 博 間瀬田紋章

中武 弓 日高賀適 森本いつき

ティータイム、ことば遊び その一

下から読んでも(回文)

水野 黒 兎

川柳は短詩文芸のひとつであり、日五七五に真摯に対峙し、格闘しているつもりですが、たまには言葉で遊んでみるのも気分転換になるのではと考え、ことは遊び、或いはことばに関するエッセーを書いてみます。みなさまのティータイムの際などに添え物になれば幸いです。

回分とは上から読んでも下から読んでも同じになる文で、例えば単語では「トマト」とか「新聞紙」など、短文では「竹屋が焼けた」などが知られています。「如何にも苦い」も回文です。回文の一般的なルールとして「か」と「が」、「は」と「は」などの混用は許容されています。

短歌形式で「長き夜の遠の眠りの皆目

覚め波乗り船の音のよきかな」は有名な回文の古典です。

四十年ほど前、コピーライターの土屋耕一氏が雑誌のエッセイに川柳形式の回文を発表されたことがあります。例えば

舞う鳩へ新年年始干支は午

力士手で塩なめなおし出て仕切り

などで、非常に感心し、触発されて一時期私も回文創作を試み、かなりの数の回文川柳を創作しました。川柳と名乗っていても所詮ことば遊びであることをお断りしておきます。

新葉館社の川柳マガジン誌には創刊当初から回文川柳のコナーがあり、これに掲載された私の作品をいくつか紹介させていただきます。

大惨事臨界管理人災だ

十五年前の回文ですが、今にも通用する内容と自画自賛の回文です。

勤がいい名医はいい眼いい眼科

かつこいい対話で湧いたいい国家

大戦は遺憾今回反省だ

草に水即座に咲くぞ隅に咲く

勝つ道は飲んで秘伝の蜂蜜か

高橋尚子選手がマラソンで金メダルを取った頃の作品で、マラソンの給水の場面を思い浮かべながら創作したものです。マラソン選手は銘々独自の給水の内容に工夫をこらしているものと思います。

飛驒の滝この秋あの子北の旅

和歌山は家内の田舎浜や川

この暗い時代に痛しイラクの子

イラクでの戦乱の頃の回文であります。イラクに限らずアフガンでも、アフリカの一部の国でも同じですが、戦乱の中の悲惨な子供たちを思つての作品です。

よう飲んだ花見で皆は堪能よ

良い仲は単に誤認だはかないよ

合戦で天使は死んで伝説化

今回はこれまでと致します。



重要なリズム(2)

川柳の形は「十七文字」と言われることもありすが、正確には、「十七音」であることは前回に記しました。リズムは文字数ではなく音数で構成されるからです。そして、その十七音の基本形は、五音七音五音であるのは皆さんご承知の通りです。では、この「五・七・五」という形は、絶対に守らなければならない鉄則なのでしょうか？ 破調でも構わないとすれば、どの程度までが許容されるのでしょうか？ 今回はそのことについて考えてみます。

まず、リズムに対する考え方を整理してみます。

- ① 定型は厳守する ↓ 五・七・五以外は認めない
- ② 定型は尊重する。 ↓ やむを得ない場合は破調でも可
- ③ 定型は無視する。 ↓ 形などにはこだわらない

おおまかに分けますと右のようになります。もちろん、表現は個人の自由であり、どれが間違いないというものではありません。皆さん自身の判断で進んで行けばいいのです。

右の①と③は明確であり、解説などは不要でしょうから、ここでは②について考えを進めて行きます。

現在の川柳界では、②の「基本として定型を尊重するが、やむを得ない場合は破調も許容する」と考えている人がいけば多いのではないかと推定します。私も同じです。

ただ、「破調も許容」と言っても、どこまでOKなのかは人によって異なります。ここでは、破調とは言えないほどのもの、多くの人が認めている形のものについて考えてみます。

八・九 自然薯も効かぬ マムシ酒も効かぬ 鈴木いさお
 九・八 新年のトイレにヨン様を吊るす 工藤千代子
 七・十 気軽さがいいコンビニの募金箱 岸本 宏章
 右それぞれ、総音数は十七音ですが、五・七・五にはなっていない。この形は「句またがり」と言われ、定型十七音が変化したものとなされて多くの人が認めています。この他にも「十・七」とか「十二・五」などがありますが、いずれも無理に五・七・五で区切つて読んではいけません。

六・七・五 無党派層聞こえは良いが無関心 村上 玄也
 七・七・五 線香花火一本くれた近所の子 平松かすみ
 右二句、上五音が「無党派層(六音)」「線香花火(七音)」になっています。これは、使用した名詞が字余りであつたせいで基本的には定型を尊重しています。このように、上で少々弛みがあつても、中七・下五で整いますので、多くの人が許容していると思います。では、次の句はどうでしょう。

タンタンタンタンタン 瀬戸内海は鯛を釣る 須崎 豆秋
 定型厳守派が激怒しそうな句ですが、これは、川柳塔社の大先輩である須崎豆秋さんの作品です。なんと「タンタン」だけで十音、計二十二音もあります。単調な船の音を連続文字に変えて、視覚的にもどかな効果を出しています。

右は、「形」より「想い」を優先させた例であり、大先輩も「形式を優先させるのは文芸の本質から外れている」と認識されていたでしょう。定型尊重は大切ですが、形に縛られ過ぎると発想も委縮しますので要注意です。ただ、前回も述べていますが、中六や中八は七五調のリズムから外れて稚拙な感じがしますので極力避けたほうがいいでしょう。



景色に暮らす花津の石霜瀬高

奇数月の連載になります。

コシヨク騒然の巻 ⑨

岩手県北上市にある日本現代詩歌文学館では、毎年テーマを決めて作品を展示している。

数年前、「食卓」のテーマで、北原白秋、釈超空、時実新子などと同じ空間に、丸々1年間、僕の色紙も飾られた。大変に名誉な事だから、友人の絵入りの色紙で送った。

卓袱台があった 地球は青かった 霜石

挿絵には、卓袱台を囲み家族7人13人の子ども、父母、祖父母が楽しそうに食事をしている様子。背景には、宇宙に浮かぶ地球が、7人を抱えるように描かれている。

その色紙に添えた僕のコメント。

「『コシヨクの時代』といわれて久しい。ひとりぼっちの孤食。決まったものしか食べない個食。ピザやハンバーガーの類のファスト・フード一辺倒の粉食。みーんなひつくるめれば、まさに『枯食』だ。骨の髄まで乾いてきそうだ」

岩手県盛岡市に住み、歯科医師で、かつ岩手県健康づくり総合アドバイザーなんていう仕事もしている友人T君が、偶然僕の色紙を見て気に入って、「岩手の健康」（岩手県国民健康保険団体連合会発行）なる堅い雑誌に連載している彼のコラム「生活習慣病・メタボリック症候群対策を探る」に、僕の句を取り上げてくれたのは嬉しかった。

「昭和の一家団欒を象徴するシンボル卓袱台。この頃は、どの家庭でも卓袱台を開き食事をしていた。時代は平成

に移り、卓袱台はどこかへ消えて、それとともに一家団欒も死語のようになってしまった。

1961年（昭和36年）、人類最初の宇宙飛行士ユリ・ガガーリンが宇宙から見た地球を語った言葉「地球は青かった」。誰もが将来への希望を抱くことができた時代。今日の地球の温暖化や種の絶滅など、環境破壊が危惧されてはいない、美しい地球を意味している文言でもある。

世界中の食べ物を輸入し（輸送によるエネルギーの消費。廃棄ガスの増大）、季節に関係なく野菜や果物を食べ（ビニールハウスの温室暖房）、インスタント・レトルト食品で手間を省き（包装容器のゴミ増大）、必要以上の量を買ひ込み、食べ過ぎや食べ残しを毎日繰り返している（環境汚染全般）私たち。これらのことが、環境汚染をもたらし、地球に負担をかけ続けているのだ。このように変化した食生活は、エネルギーと栄養素の量やバランスを不適切にし、生活習慣病の原因にもなっているのである。

作者（霜石）が指摘した『枯食』は、私たちのことろと身体、そして地球の2つを同時に枯らしている、というのではないだろうか」と彼は論じた。

それにしても、この句から、環境汚染や生活習慣病にまで踏み込んだのは驚いた。作者真実に尽きた。

「よき友に3つあり。物くるる友。薬師（医者）。知恵ある友」と、吉田兼好は言ったが、思えばT君はその3つ全てにあてはまる。持つべきは「よき友」だなあと、つくづく思う。



(四) 深川に松尾芭蕉が住んでいた

再び大川沿いにもどり芭蕉記念館をめざす。

松尾芭蕉は、一六八〇年(延宝八年)弟子たちの計らいで江戸日本橋の住まいから深川に移り住み、ここを拠点に俳諧活動を展開したという。

記念館の資料をひと通り見せてもらったが、芭蕉の俳句は、あの有名な「古池や蛙飛び込む」ぐらい知らず、俳諧は苦手であったが、「奥の細道」は一度たどってみたいなど考えた。

この芭蕉記念館は深川(江東区)の地図を見的过程中で発見したので、芭蕉が深川に住んでいたとは思わなかったし、本所深川を描く作家たちに、芭蕉を題材にした作品は一つもないのが不思議であった。

芭蕉翁ぼちゃんという立ち止まり (俳風柳多留より)

芭蕉記念館の東側は八名川町(現在は森下町、常磐町)である。藤沢周平が牢獄の医師を描くシリーズ「人間の檻」(講談社文庫)の中に登場する、腕利きの岡っ引き藤吉が住んでいたところでもある。また、短編「黒い蠅」(文春文庫「又蔵の火」収録)で登場する元岡っ引き地兵衛も住んでいたのだ。

本所深川を舞台にした作品には岡っ引きがたくさん登場する。江戸の町は一千七百町余りもあって、人口も最高時は

百万人もいた。それをあずかる南北町奉行所の与力は南北各二十五人で、計五十人。同心は、臨時廻りをふくめて南北各五十人、計百人。合計百五十人しかいなかったのだ、その穴埋めするために、御用聞きや岡っ引き、目明し、小物などを手先として使っていたという。その数は南北で三百人ぐらい。その手先が三、四人の下っ引きを使っていたので、合計一千三百人ぐらいで江戸の町を守っていたと、佐藤雅美が『恵美須屋喜兵衛手控え』(講談社文庫)で描いている。

芭蕉記念館を南に向かうと、小名木川に架かる万年橋に着く。万年橋は安藤広重が名所江戸百景の一つとして「深川万年橋」を描いている。また、葛飾北斎も富嶽三十六景の一つとして太鼓橋であった万年橋の間から富士山が見えている絵を描いている。だが、現在は鉄とコンクリートの橋の上からでも富士山はまったく見えない。見えるのは新しく架け替えられたケルン調の清洲橋であり、対岸マンション群やビルと高速道路であった。

万年橋釣られてる放し亀

(俳風柳多留より)



(万年橋)

本社 四月句会

四月六日(金) 午後一時
アウイーナ大阪

四月句会は肌寒さが残る六日、118名(投句者9名)の参加で開催された。句会に先立ち、先日亡くなられた同人、乙倉武史さんへ黙祷を捧げた。

今月のお話は西出楓楽理事長。「江戸川柳で愉しむ孔子」と題し、三聖人の一人孔子を取り上げられた。孔子と江戸川柳とどんな繋がりがあるのか、会場固唾を飲んで理事長の話に聞き入る。中国の歴史背景を交え、孔子誕生から没するまでに関する江戸川柳を紹介。

聖人のへこむはつむじばかりなり

孔子誕生の時、つむじがかなりへこんでいたと言う解説にへエと納得。孔子は中国の国をいろいろ訪ねるが、生前はあまり認めてもらえなかったようだ。

孔子でも三杯目にはそつと出し

孔子も居候していたらしい。(まつお記)

月間賞は、川端一歩さん(大阪市)

(司会)美龍・善純(協取り)扶美代・蕉子

(受付)誠一・順子(清記)勝弘

席題「買う」 柿花 和夫選

亀井さんケンカは買わなあきまへん
円・ドル・ユーロどれを買っても損ばかり
顰蹙を買う答弁で護る国
聞き捨てにならない言葉買つてやる
周囲の遅れ気にせぬ意気を買う
買いかぶり歳をとつてるだけなのに
なくさんの恨みを買つて生きている
君の才能買つてると煽てられ
今が旬わたしを買えばお買ひ得
春風の街に元氣を買ひにゆく
買えるなら日本を買つて丸洗い
この辺で買えるものなら安楽死
下さいな愛というもの百グラム
店内で迷い買い物でも迷い
ウォーキングたこやき買つてひとやすみ
金なののにベットの餌はちゃんと買う
正札で買うのはアホとなにわつ子
百均で満足させる浪費癖
じつくりと炊くよりさつと買う煮豆
スーパ一の買い物妻のメモで馴れ
おばちゃんのもたれレジもくたびれる
寂しいよ買いたいものがないのです
お土産が一ヶ足りずに梅田地下
片道を買つてあなたの住む町へ

勝弘 野薫 求芽 黒兎 シマ子 ダン吉 かずお 富美子 紀乃 みつ子 寿子 真理子 大輪 完司 シマ子 淳司 朱夏 堅坊 太郎 冴子 わこ 見清 理恵

嫌なこと進んで買つて出る無口
買い物をしてストレスを溜めている
断捨離の覚悟バーゲンには勝てぬ
買い物は空きつ腹では行きません
バーゲンの一日前に買った服
大人でもおまけ欲しさに買うグリコ
靴を買うまだ何足も履くつもり
死ぬほどのサブリを買つて生きてます

佳

焼酎を買えば天下は俺のもの
宝くじ妻と僕は別売場
安全も金で買う気でいるらしい
電車賃だけは残して馬券買う
気前よく高いほう買う風邪薬

人

片道切符買う少年の志

地

思案して思案して買ういらんもの

天

鈴ひとつ買つてちいさな旅終る

軸

人情もまとめて買った道の駅

兼題「箱」 小林 わこ選

どうしても馴染めぬ箱が一つある
重箱の底はいつぱい無駄がある

美義 靖鬼

叔子 美智代 哲男 りこ りこ 黒兎 好夫 公誠 一歩 まつお 完司 正雄 朝子 耕治 朱夏

箱庭にも菜の花被災地にも春
忘れ難い思い出めるオルゴール
マツチ箱ほどの家です我が古巣
婆ちゃんの部屋あれこれと箱を積み
センサーが箱の隅まで炙り出す
三三目には出てこないミカン箱
怖い物見たさで開けたナゾの箱
下駄箱に今日の疲れをそつと置き
昭和にはいつぱい詰めていた行李
文箱から母といった日が香り立つ
逝った子の思い出に泣くおもちゃ箱
嫁ぐ娘の持参金です玉手箱
直ぐバレル嘘をいれとく箱がない
米櫃の底はひもじさ知っていた
箱書きに惚れて真贋見誤まる
箱入りで一線画す巨峰です
母の針箱秘密の部屋がありました
老いのグチ一杯つめる箱欲しい
箱入りと未だに妻が自慢する
箱詰めにした昭和史を捨て切れず
臍の緒の桐箱持たせ嫁がせる
断捨離の箱から昭和ころげ出る
大切にしていた空の玉手箱
下駄箱に肩身の狭い僕の靴
びつくり箱あけたらわたくしが消えた
箱詰めにされた真面目な青りんご

直樹 美籠 シマ子 月子 寿子 勝弘 進 一風 寿之 美籠 一風 光久 柳弘 寿之 誠一 千代 ばつは 日の出 善純 善純 淳司 富子 美智子 則彦 牙子 能子

空っぱの箱の中にもある覚悟
どちらかな透かしてみたい当たり箱
菓子箱にぎつしり無理を詰めてくる
箱詰めの義理がリボンをかけて来る
佳
エレベーター不安がよ過ぎる二人きり
キヤラメルのおまけを追いかける
箱庭の小さな四季に和む祖父
玉手箱しつかり抱いて喜寿の夢
弁当箱に妻の機嫌が詰めてある
人
煩惱が大きい箱を選ばせた
地
千代紙を貼った小箱に溜める夢
天
蓋のない背伸びの出来る箱がいい
軸
もういいかいもういいかいと箱の蓋
兼題 「ぶらぶら」 岩佐タン吉選

よしみ 大子 正雄 富子 葉子 郁夫 隆彦 直樹 哲子 いさお 朱夏 千代

ぶらぶらと生きた証の土踏まず
言いたい事ぶらぶらと心のない市長
徘徊じゃないぶらぶら散歩してるだけ
足はまだ会社の方に向く散歩
新卒がぶらぶらしてる不況風
ぶらぶらも視野に盲導犬の耳
ぶらぶらが小説書いてるらしい
デバ地下で試食重ねる万歩計
ぶらぶらとしての訳ない檻の虎
糞虫の揺れるのを見て日がくれる
ぶらぶらの人生だから止められぬ
ぶらぶらと歩き世の中確と見る
暇なのにぶらぶらさせてくれぬ妻
集中が途切れ勝手に動く足
ほろ酔いのぶらぶら歩き趣味と書く
ぶらぶらと歩いて僕に職がない
ぶらぶらと歩ける男はぶつとばす
ぶらぶらと職退いてから元氣です
ぶらぶらは夢定年のない家業
細腕に仕事せんのがぶらぶら下がる
ぶらぶらと違う仕事がないのです
ぶらぶらとしても腹は減ってくる
忘れぬようあれやこれやを首に下げ
ぶらぶらとしての有権者である
大国にぶらぶら下がらぬと駄目なのか
徘徊と間違えられたことがある

朱夏 柳弘 弘一 大輪 一步 美籠 牙子 和夫 靖鬼 見清 昭 かずお 則彦 蕉子 健二 真理子 シマ子 美智代 正雄 牙子 葉子 敏治 寿之 耕治 保州 たもつ

父ちゃんの分まで払うことになり

(矢)

月 子

おとなしく隅に居たけど同じ額

支払いは纏めて欲しいレジの声

不思議なこと端数の出ない請求書

割り勘と平等なんかちやうみだい

あつさり別れた割り勘のデート

割り勘と聞いてピッチの上がる酒

それなりに飲んで食べてる損はせぬ

割り勘の端数を奢り上司顔

割り勘と聞いてメニューを引き寄せる

部下つれて割り勘で飲む上司づら

割り勘で綺麗な酒を飲んでいる

割り勘がお疲れさんと心地よい

割り勘の端数が繋ぐ温い友

後腐れなき割り勘の酔い心地

ホステスと割り勘したいぼつたり

割り勘の上手な熟女達の列

佳

割り勘と聞いて仮面を取り替える

割り勘に強い歯並び持っている

割り勘と聞いて敬語を仕舞い込む

つましい呑助ですが元は取る

割り勘にハンディつける名幹事

人

奢るにはまだ人数が多すぎる

大 輪

善 純

久 美 子

弘 之

朝 子

進

野 薫

勝 弘

黒 兎

弘 光

完 次

茂

富 美 子

よし 美

寿 之

満 作

隆 彦

瑠 美 子

雅 明

完 次

郁 夫

義 子

好

大 輪

地

飲めぬ分歌つて元をとつてくる

天

割り勘で車座になる花の下

軸

割り勘が奢りか分からない誘い

「向き合う」

小 島 蘭 幸 選

しげしげと妻の顔見たフルムーン

向かい合う席のお方と旅弾む

携帯と向き合ったまま虚ろな日

向き合つて幾とせ傷を舐め合つて

向き合つて意見の言える子に育ち

向き合うか逃げるか心揺れている

これからの老いと対峙の歯を磨く

向き合った人に圧倒されそうだ

向き合いましよとトクター肩を抱く

恋人と言葉を探すティータム

お日さまと向き合う胸も手も広げ

向き合えば消える愚痴ですねえ貴方

加齢加齢北風と向き合いぬ

向き合つて遠回りしたなと思う

向きあつて闇魔にお世辞言えるかな

丁度いい角度なために向かい合う

向き合つて素うとんを吹く仲なり

向き合えばなぜだか笑みのである

向き合えばぐちしか言わぬ妻になる

朱 夏

義

靖 鬼

隆 彦

千 恵 子

萌 子

菜 月

扶 美 代

美 義

太 郎

五 月

寿 子

完 司

妙

希 久 子

義

時 雄

理 恵

千 代

かず お

ば っ っ

向き合うとほんとのことをいう鏡

向き合つてもやしの根つこ取らされる

ライバルと向き合う甘い顔をして

この僕に向き合う女は妻一人

四十九日仏と二人連れになる

向き合えば寂しがりやのいじめつ子

手強いと思う女と向かい合う

迫り来る老いと素直に向き合えぬ

在るがまま向き合うなんて苦手です

向き合つた海月わたしを置いていく

オーケストラ心ひとつにするタクト

久しぶり向き合い判を押しました

私とわたし向き合うたびに喧嘩する

佳

向き合えば黙つてしまふ子供達

向き合つていないと君が消えそう

並ばうか向かい合おうか椅子ふたつ

来るなら来い死神なんか背負い投げ

内裏離れ向き合うことのないままに

人

原発禍と向き合っているげんげ草

朝飯は子等の話を聞きながら

天

原稿用紙に向つとボクが僕になる

軸

向き合っている透明になつて

富 美 子

ま っ お

紀 乃

弘 風

蕉 子

楓 楽

完 次

い さ お

紀 子

よ し み

ま っ お

勝 弘

楓 楽

日の 出

大 輪

千 代

直 樹

真 理 子

和 夫

耕 治

川 端 一 歩

をこせぬ増

毎月24日締切・35句以内厳守
掲載は原稿到着順となります。
楷書で誤字のないようにお願い
いたします。

編集部

川柳塔打吹(鳥取)

野口 節子報

草もちの香りほのかに春偲ぶ
草にねて鳥のコーラス聞いた日遠く
道草で出世街道追越され
あぜの草踏んでも負けず腰のばす
草生えて地球は枯れずまだ青い
逆風にあえて強くなる野草
相手から一人を借りる草野球
草相撲田舎たのしみまちきれず
菜園の雑草も春待つている
草笛を拭いた昔が懐かしい
雪分けて七草粥の芹を摘む
歩数計その数の草踏んできた
初恋のお下げに飾つたれんげ草
時々は新聞に出る投句欄
幼な児が靴を揃えて雪の空
厳寒に光差し込む御神渡り
厳かに教育勅語聞いていた

公恵 克枝 久芽代 恭子 美知江 紀の治 富恵 義人 美美子 勝憲 くにこ 泰山 泰輔 美代子 和子

厳しかった命ちぢめた木馬曳き
厳寒に耐える脂肪の太鼓腹
厳肅な式にくしゃみで異を唱え
行く道は厳しい少子高齢化
尊厳の狭間で揺れる病もち
威厳なく哲学もたぬお大臣
焼け野原よりも厳しい核の冬
まだ二本犬歯残して冬の海
脳味噌を厳しく覗きまじるし
厳冬にパンジーの花笑つて
お財布を開けて待つて年金日
バンドラを開けた日本は崖つ縁
戸を開けて青鬼くんを待つて
星を見る時には口を開けている
梟が夜の深みを開けている
ウエルカム地獄の門が開いている
雪開けて地球の芯に陽を当てる
ハート全開鬼も天使もおいでませ

和歌山三幸川柳会

武本

重忠 慎元 道子 龍枝 紀美恵 岳人 石花菜 三津子 善恵 貴恵 悦子 野藤 玲坊 芳光 完司 照彦 節子 碧報 ひろ子 朱夏 俣子 幹子 町子 孝子 准一 碧

雪景色白い心にくれる
雪の降る夜は無口になる二人
節電に利用出来ぬか窓の雪
雪のんの温い便り待つポスト
転ぶ度大きくなった雪だるま
自己嫌悪雪の白さに助けられ
舞うだけの雪でも心躍ります
被災地をすっぱり匿す雪が降り
知り合えて変わる私の世界観
結果見て知ったか振りの解説者
食べ過ぎとベルトの穴は知っている
同じ道歩いて知った父の汗
知らないでか平和主義だから
粗塩の加減知つた一夜干し
知つていて妻はやりわり攻めてくる
添い遂げて知つた夫のうらおもて
半数は知らぬ紅白出場者
何もかも承知の上の保証印
知人ぞ知るひたすらに縁の下
撒き餌だと知りつつ拾う美辞麗句
知る権利妻よへそくり見せてほし
魚の目が知つて父の仕事振り
知り過ぎた耳はじんじん熱くなる
知つてつもりフォークが一つ余つて
私を熟知しすぎている私
シルバーになつて知る辺の減る辛さ
植えてみて知る玉葱の育て方

美羽 絹子 義雄 菜摘 登美代 柳昌 かずみ 桂香 八重子 元三 順一 智三 純子 喜久子 富子 起世子 当代 昇 伊セ みね 豊 和子 章子 保子 義泰

竹原川柳会（広島）

古田

太虚報

川柳塔みちのく（青森）小寺

花峯報

佳句地十選（4月号から）

石谷 美恵子選

頼り甲斐あります家中の手摺り
天国の門が開いたような春
七難をかくし通した笑い皺
生きるには今日が一番大事な日
人間のツボ押し方の上手下手
バンドラの箱からもれた放射能
人として普通に生きる難しさ
生きさまが自分の顔を影り上げる
身の程を知って治った肩の凝り
ゆっくりと諭しゆっくり棘を抜く
久信桂則無欣孝幹芳ばつは
枝子子彦限之子子光

母匂う古希で作った袋物
辛抱と言う字が滲む古日記
古漬けのすっぱさが良い箸すむ
兄ちゃんのお古で育つ子沢山
ご先祖の苦勞のあかし糸車
古書店の棚の宝の山光る
古寺巡る傷はいっしか包まれる
古い家で陽をたっふりともらう窓
あの日よりこころの窓をひとつ閉め
蔵の窓からご先祖様の声がする
春はそこ？窓の雪ダルマに問うた
マニキュアを塗られて爪は幸せか
爪を切る男一人の部屋の冷え
老いてゆく爪は短く切っている
リハビリと爪切る夫に距離をおく
見上げてた大仏様の丸い爪
強情で爪先立で生きている
胎児にも爪人間になつてくる
隠してる爪も毎日研いでます
あなたも僕も一人一人に青い空
日向ぼこ肩もんでやる妻不在
娘がくれた新色ルージュ春を舞う
人生のおまけを友と旅に出る
ダイエットいつも挫折で春が来る
ありがとう自然と笑顔になる言葉

千代美 輝恵 比呂子 弘子 半徳 淑子 白狐 栄恵 汎美 蘭幸 笑子 房舟 笹代 規子 節生 幸子 敬子 京子 一子 静風 厚子 栄香 史子 千枝

息抜きをせぬまま昭和駆けてきた
古希颯爽いきいきとゆくクラス会
いきいきと古い相応の風になる
赤ちゃんをなめたり軽くかじったり
ふところに全財産を入れてある
くちびるを噛んで反論伏せておく
イエスタデイ聴きながら酌むコップ酒
一周忌過ぎて女はいきいきす
疑問符をつけれぬ様生きている
御意見番すくなくなった両隣り
シナリオの無い人生をいきいきと
いきいきと朝日に光るランドセル
お吸いもの鯛の目玉に睨まれる
三十度蟻は生き生きしています
腕時計外して花に溶けている
古時計時々秒針遅れ気味
胎動が妻から母の顔にする
合コンで美女の胸元射る光
新刊書読むといきいきするまなこ
内緒ばなしがまだまだ続く俄雨

一湖 きよし 吞舟 和香子 ひとし 芳生 則彦 一吞 隼人 ふさゑ 花匠 雅城 愁女 井蛙 黙人 花峯 慕情 一花 五楽庵 茶子報

川柳塔鹿野みか月（鳥取）福西

茶子報

三万の自殺を救う策を問う
自信無いときは大きな息を吸う
背伸びして今日一日の息を吸う
ただ一句載ったページにふせん貼る

弘子 茶子 美ッ千 和子

いい息は鼻から思い切り入れる
成人式に着極に着る和服
くつろいだ炬燵で足は触れないで
僕だけが唯我独尊よしとする
鼻息が荒いと出ばなくじかれる
日の丸の旗を尊い方に振る
悩みごとと摘むハサミなら高く買う
寛ぐと摘の外れた顔になる
猿のまね見せて学級長選挙
欲の芽を摘むつぎつぎとつぎつぎと
唯一つくつろぎ場所となるトイレ
雪掻く日去つてくつろぐ春日向
道の駅何にも買わず摘み食い

盛桜 彩子 孔美子 照彦 実満 小鹿 房子 いさを 蟹郎 完司 宣子 惣子 露子

伸びる芽を摘まず育てよ花になる
人生マラソングつろいで水をのむ
尊さにみんな芽を出す根をおろす
コーヒの香りの中に腰かける
薪背負った尊徳さまが偲ばれる
麦餅のよもぎを摘んでひなまつり
ヒバリ鳴く川原で摘む母子草
臍という尊い場所に油断する
年金は尊いものという感謝
自尊心洗ひ流してみたくなり

川柳クラブわたの花(大阪)西川

義明報

春だなあ孫のケータイ弾んでる
外は雪おでんぐつぐつ長電話
反省のグラスの底に嘘一つ
風だけを乗せる故郷の無人駅
馬鹿言うな呆けておらんと父卒寿
梅便り心はつこり靴みがく
寒波なか梅の蕾は春を待く
鶯も仮設の老いを思いやる
元はと言えば雀の涙ほどの嘘
彼女の手やつと握れた蜚狩り
震災の爪跡照らす初日の出
寒林雪の綿毛に包まれて
さりげなくトゲをかくした誉め言葉
与党も野党もなく雀の宿平和
消費税上げない筈がどうなった
飢えもなく飽食知った三ヶ日

くに子 螢 富久江 すず はるお 美代子 京 諷人 かおる 満 知佐子 美代子 いつふみ 民 宏 晴美 俊子 義明 はじめ 浩三 愛子 博子 和子 耀一 正春 孝子

あたたい日もあり冬もまた楽し
東北の手紙が夢を秘めて抱く
松飾りとれてスイッチ入れ直す
ハンドルを持つ手悪魔が笛を吹く
残雪の解けぬ山野に梅香る

川柳塔唐津(佐賀)

仁部

四郎報

更迭がつづき人材枯渇する
手を合わせ杖から洗う遍路宿
日脚伸び道草してる一年生
日の丸の歌知っているから化石
「論語」買う活字の太い文庫本
八時寝て八時に起きる癖がつき

川柳塔おつばこ吟社(香川)川崎ひかり報

實

縫い納めカチツと母の糸切り歯
煮え切らぬ言葉我慢の糸が切れ
亡母さんの遺品に残る仕付け糸
巻きついた小指の糸が身を縛る
何回も結び直した木綿糸
糸車廻した祖母がなつかしい
新年の心改め書く日記
縁の糸紡いで今日に辿り着く

川柳らくだの会(鳥取)岸本

宏章報

田は雪で趣味の時間がいただけた
残されて甘辛浮世一人旅
押しながら我が身ダブらず車椅子

仁子 富貴子 清

年月をかけて神話は築かれる
大臣は口が滑ったでは済まぬ
地の上に降りた燕は見掛けない
口ぐるま乗ってころんで悔残る
土台石据えて図面が目に見える
道の駅ハイカラさんが大根買う
いきなりのはたき込みなど見たくない

富柳会(大阪)

古田 千華報

紅ひいて女はおんな捨てられず
後期高齢もつと威張っていいんだよ
薄水やつと溶かした和解案
絵馬堂はもつと実力積みという
枯渇する愛なら水割りの水
落ちた訳知らないままの花の首
紅薄くうすぐ夫が帰るころ
公になると絆に隙間風
パパわかるいつもと違うルージユなの
サボってる僕にもつとの督促状
おかわりをにつこりと待つ割烹着
流水の一つに淡い恋がある
あの時のあの口紅は小引出し
紅の色きのうの人と仕分けする
水割りの氷見詰めるひとり旅
懐に氷の刃秘めた恋
オカアちゃん水枕の側に居る
軒下のつららも唄う早春賦
まだ青い部分温めている命

一弘 孝子 せつ子 寛 大鯨 玲子 宏章 アキ 扶美代 和子 初太郎 浩子 紅紫朗 晴美 七朗 武人 寿之 奏子 よしみ 千恵 高鷺 伸雄 壽峰 佳子 未知 欣之

ボケットに氷のような掌が入る
 混浴の紅一点を見ないふり
 嘘一つ張った氷の底にある
 泣きことは言うまいもつと輝ける
 威しともとれる猫撫で声である
 口紅は濃いめにしよう登り坂
 大宇宙売り出されたら買うもよし
 物思いいりんこの皮が長くなる
 もつともつと長生きをして財を積む
 背伸びした高さに春の風がある
 草笛を待つて冬空の隙間
 森子
 鬼焼
 信子
 澄子
 千華
 登子
 よりこ
 華
 恵
 深雪
 彦次
 夢次

川柳ぶつもん吟社(鳥取)夏目 一粹報

老後だと笑うな恋もするつもり
 しがらみを捨てると軽くなる荷物
 三指をついてお世話になりました
 ミスマッチ蓼食う虫と五十年
 老々介護手足もつれて一緒にた
 ミスマッチ我慢しなさい慣れるまで
 年金で食える老後が当て外れ
 やりくりのうまい女の混ぜ御飯
 落ちこんだ日には聞きたい君の声
 しくじつてやつと気が付くミスマッチ
 洗濯機一緒くたに娘が嫌う
 老後より心配なのは嫁の来手
 少年の死刑重たくするけじめ
 呆けるなよ毎日脳に言いきかす
 解散がけじめをつける処方箋
 凱柳
 あしび
 美智代
 克也
 節子
 清信
 みゆき
 美恵子
 秋月
 善夫
 金祥
 毅
 無限
 一揺
 洋々

老いの恋まだカルピスの味がする
 御馳走も腹に入れば一緒にた
 玉のこし乗つてみたのにミスマッチ
 家中が優しくなつて来た老後
 定年後金と時間のミスマッチ
 妻よりも親しい女性おりません
 男ならけじめをつけて出直そう
 善悪のけじめつく子に育てたい
 悪人の勝利はきつとミスマッチ
 ミスマッチですかスカート短すぎ
 老後にも趣味の一つを残しとく
 老後に残す銭がないので死ぬもせぬ
 老後プラン考え過ぎて頭痛起き
 父母共に老後待たずにあの世逝く
 句会の顔新もベテラン耳澄ます
 純愛と浮気のけじめカスミ草
 縁談にけじめつけよと背を押す
 領域のけじめに戦つきまよう
 大空に夢を描いている老後
 師の影を踏まぬけじめが魔れゆく
 柳柳塔なら
 坊農
 柳弘報

清帆
 回春子
 栄子
 地佳平
 孝二
 振作
 圭一郎
 惣子
 とも湖
 妻子
 はつ江
 茂登子
 由美子
 春名
 菊香
 秀四
 行男
 昌鼓
 悦子
 一粹
 柳弘報

ピーナッツまずは産地を確かめる
 情報が瞬時に世界惑わせる
 豆知識知ったかぶりが恥をかく
 笑い袋抱いてるような母でした
 五か国が囲み手を焼く北の国
 位牌みな非常袋に詰めて置く
 日本丸活断層に包囲され
 列島を囲むブレイト気ままする
 昭和一桁平成の四面楚歌
 明日開く書に惑う音を聞く
 鍋囲む湯気の向こうにいる絆
 節分に山のカラスが街へ出る
 義援金額を足したり減らしたり
 円高のドルとユーロの包囲網
 六十年恥にふくれる頭陀袋
 袋からあふれていますお人柄
 コンビニに包囲されてる小商い
 豆を撒き冬の出口へ鬼を追う
 手袋の両手いたずら企てる
 胃袋は献金そして助成金
 納豆の中で捏ねてる妻の愚痴
 一本のタバコ白い眼に囲まれる
 愛とパン天秤棒の揺れている
 手袋もとらず握手をして別れ
 バラ色の包囲幸せこわくなる
 どの色にもご晶屑がある五色豆
 うるたえ私を捜す白い部屋
 両腕の包囲幸せに酔っている
 芳子
 富子
 征子
 朝子
 理恵
 成子
 恭昌
 道子
 ダン吉
 完次
 柳弘
 真理子
 恵美子
 國治
 隆盛
 信子
 弘風
 寿之
 洋子
 將文
 ばっは
 勝弘
 郁夫
 堅坊
 太郎
 克己
 萌子
 隆之

幸せの袋の中で発芽する

高知川柳社

小川てるみ報

怜依子

鍵穴に薄い期待も貼つてある

哲史

出口かも知れぬ薄日がさしている

てるみ

薄氷を踏んで鼻緒が強くなる

千恵子

嬉しい日手足勝手にリズムとる

勢子

密約が足枷となる基地移転

正躬

偏平足でしっかり大地踏んでます

みどり

川柳塔わかやま吟社

川上 大輪報

伸びてきた芽はふる里に背を向ける

大輪

スタートもラストも包む慈愛の芽

徑子

脇芽とるかわいそうだが身の為と

よしこ

私を占う人も芽が出ない

紀子

たくましく瓦礫の下に出る新芽

美子

胸の奥互いに見せず丸くなり

秀子

奥に奥政治の世界かなわんな

克子

重ね着をうふふと笑うふきのとう

小雪

悩む抱く胸の奥にもある波紋

寿子

奥の手を見極めたくて積む修行

紀久子

奥の手は決意の出来た時に出す

登美代

まだ火種残しています胸の奥

准一

わたくしの奥は野原になつて

夕胡

包んでくばる幼稚な二枚舌

佐一

思い遣り包む風呂敷母の手に

和香

関連な風に包まれ湧く遣る気

泰女

ラッピングされてキラリと光りだす

ほのか

背伸びして包む絆の解けぬよう

英子

火の章をくぐり出番を待っている

輝子

孤独にはさせぬ出番のカレンダー

富美子

誰にでもあります今日という出番

保州

ロース川柳会(兵庫) 木村貴代子報

芽吹くもの健気に春を待つ寒波

哲子

蕾だつて花と咲くため力要る

義子

寒風に梅の蕾の凛々しさよ

みつ子

そう言うが世の中捨てたもんじゃないと孫

藍

寒風にチャルメラ聞いたな村はずれ

年代

天窓に初あかりしておくどさん

貴代子

大寒にエアコン故障吉の年

閏本かつ子報

スボイルをなげく平和の落し穴

幸子

春を待つ快気する日をひたすらに

百合江

冬に食べたつていいアイスクリーム

週行

冬こもり一夜の雨に解き放れ

まみ子

無い物ねだりするぜいたくな悩み

美千代

古希となり男盛りになりました

雅美

年金は出るのだからか子の世代

かつ子

あかつき川柳会(大阪) 山本 柳昌報

着物着て鏡を見ればそこに母

蕉子

童心にかえると見える虹の彩

希久子

復興へ賭ける男の眼が燃える

賢子

天気図は縦じま春はどのあたり

直子

幸せそう育児書を見る岩田帯

隆昭

なでしこに五輪の金が見えてきた

和雄

白内障らしいまわりはみな美人

見清

熟年離婚愛も涙も乾き切る

賀世子

売られ行く仔牛見送る瞳に涙

和子

立ち止まると落ちそうになる涙

信子

他人のために流す涙は美しい

宜子

勝つて泣け負けて泣くなと子を育て

忠昭

偽りの涙はきつと直ぐ乾く

祥昭

孤立死と同じ紙面で泣く絆

昭男

慟哭の涙も潤れている仮設

卓郎

コンタクトレンズ涙腺干し上げる

太朗

あの人のはほんまに血も涙もない

敏子

大量の汗で悩みは消えている

シマ子

いづどんな形で私が消えるのか

義

菌ブラシを食わえ消えようかと思う

美智子

三月忌二万の御霊安らかに

秀夫

ローソクの火が消え仏泣いている

武

街の灯が消えて心の灯がともる

一行

独裁者いずれあなたは消える人

勝弘

ポケットの穴から偶然がぼろり

柳弘

偶然を嘗めると神の味がする

宏

東北で神戸の時の友と会う

克己

近く際の父に一筋光るもの

穩夫

貴の花頼りに大相撲人気

紀乃

ふる里便家計ピンチが聞こえたか

たか子

お隣もくぎ煮にてます換気扇

朝子

原発がなくてもまわるこの日本
与野党首すりよるように支え合い
札束を積んで辺野古の基地買いに
のぶ久

八尾市民川柳会(大阪)土谷 耀一報

期待させ心配させて子は育つ
一粒の種の芽生えを心待ち
傾斜する前に打っておく楔
傾いたまままで生きてきた巨木
同情も期待もされず生きている
立ち消えになりそう油また注ぐ
断ち切った絆私の道を行く
一言の暗示で脱皮した大器
ことさらに光るイケメンの螢
頂天の企業戦士に妻の功
笑えないことも知ってる笑い皺
他人に勝つまでは自分に勝つことだ
封印をされたら口がむず痒い
この難儀笑い話になるやがて
期待感隣合せにある希望
嘘つきのがとびきり下手だから許す

一風

華

扶美代

草風

紀雄

紀乃

ダン吉

欣之

いさお

高鷲

森子

賢子

寿之

朝子

壽峰

耀一

長柳会(大阪) 坂上 淳司報

ストープで踊るイカ裂きコップ酒
釣銭の残りで買ったクジ当たる
カレンダー誰にも内緒二重丸
右上がりの経済終わりデフレ風
芳香を放つ盆梅春を呼ぶ

淳司

よしお

明子

靖博

たけし

自慢です言葉の端にちらほらと
今転機おもてる内にすぎている
目と鼻に花粉と黄砂煙る春
歳重ね若さに学ぶことが増え
絆裂く地震津波はもう要らぬ
さあどうぞ席ゆずられてショックです
張り裂ける思い抱かず春の風
あれそれが増えて財布の譲り時
私の胸裂き男風になる
閉塞感春まだ遠い瓦礫処理
僕にだけ優しく痛み消すナース
天変地異裂け目を癒す石清水
裂けた傷癒すあなたのラブソング
ひらひらと返す言葉が軽すぎる
合格の報告に行く梅の中
発電の転機促す震度八
人生の転機にいつも妻の笑み
遠い日の胸の裂け目に残る悔い
新学期私を少しリニューアル
閉店の張り紙風に耐えている
兄弟の仲を裂いてる親介護
阿修羅像その眼差しは邪悪裂く
線香の煙が染みる親不孝
父の背越えて息子の眉きりり
311日本人を変えました

登美子

もこ

光弘

ともこ

正子

輝子

エミ

幸子

けい子

直樹

弘光

三和子

孝代

久美子

和子

隆彦

英美

芳野

正美

篤

和代

敬二

正博

ふみ

富美子

南大阪柳柳会 津守 柳伸報
好敵手現われ稽古熱くなる

ライバル視されて力がついてくる
妻がいうずっとあなたのボランティア
ボランティア一隅照らすほのかな灯
ボランティア出来る若者輝いて
家事一切出来ぬ娘が炊き出しに
ボランティア精神尊いと思う
見守り隊行つてじいちゃん元気なる
山も河も起していますボランティア
ボランティア手帳ははくの宝物
テレビのせい行列出来て味が落ち
不味くても褒める親父の台所
そらあかん砂糖と塩を間違えて
気不味さはタンスに入れていい夫婦
雲行きの不味さベクトにおぎなわれ
お日様に媚びる如くに梅開花
独立独立媚びる事せず生きている
重役に媚びて仲間疎まれる
媚びられて気を許してる酒の席
我が子には媚びる準備の下心
自己主張貫く男に媚はない
人間に媚びぬ桜のいさぎよさ
誰とでも握手している選挙中
媚びるのが上手になってからの鬱
権力に媚びてビエロのイエスマン
思い切り媚びて輝くくすり指
選者には媚びぬ自分を曝け出す
その愚痴は炒めて自分と捨てました
チャーハンを踊らすシェフのテクニク
炒め煮の片に恵みの春を知る

栄子

勝弘

恭昌

柳右子

なごさ

太郎

一歩

典子

たもつ

直子

清

紀乃

柳弘

柳伸

シマ子

ルイ子

庸佑

ひさ乃

タカ子

忠昭

楓楽

和雄

昌紀

集一

正春

克己

志風

直樹

倉吉川柳会（鳥取）

竹信

照彦報

川柳塔まつえ吟社（鳥根）相見

柳歩報

べつたりとくつく孫をひつべがす完司
べつたりと触れる相手はもういない萩江
べつたりと壁塗った家丈夫です
あの瓦礫鳥もち被せ一まとめ
べつたりと寄り添う夫の認知症
絵手紙で伝える路の臺の顔
雪の日に有線からの尋ね人
彫刻の文化伝える寺の棧
家族葬だけでヨロシと言つてある
伝えたい相手は遠い星の国
母の味伝える重石ひたなほこ
去年より夫に小声が伝わらず
ふんばつてふる里帰そう被災地へ
ふる里があつて淋しい彼岸花
はたる飛ぶ里の山河は我が誇り
愛娘そつと叱つた里の父
後いくつ冥土の旅の一里塚
里からかてんこ盛りした路の臺
老父母に里の田畑は手におえぬ
はらはらと二万六千日生きた
はらはらとさせた息子が子を育て
はらはらと地球の涙止まらない
はらはらとさせた子は今警察官
普天間の空ははらはら怒り雨
はらはらと舞い散る雪に陽が昇る
おくやみ欄悲しみまでは伝わらぬ

照彦 美代子 貞子 玲坊 次男 由紀子 石花菜 悠子 重忠 鬼一 康子 日出子 賀寿恵 智恵子 祐子 醉芙蓉 英子 茶子 和子 風露 玲子 喜美子 恭子 けいこ

雑音にひとつ気になる節がある
連れもテレビも雑音多くなりました
満月はいつても雑音溜めている
他人には雑音恋はまだ続く
アナログが出す雑音に情がある
真実が雑音の中泳ぎきる
雑音のところでどこにある本音
雑音はいやでも届く耳洗う
よく切れる刃物がものを言う技術
小気味よく切れた青菜を盛りつける
浅漬けへ菌切れの音の母がいる
ためらっている間に熟れたサクランボ
ためらつてみても結局道一つ
補聴器もためらいがちに聞く告知
ためらわず投げてみようか変化球
ためらつて開ける小さな玉手箱
ためらつたあたりが黒く焦げだした
細麵か太麵きようはちぢれ麵
あやふやに生きて尻尾はつかませぬ
指し示す指の先まであやふやだ
あやふやを電子レンジでチンをする
あやふやな事は黙って引けません
あやふやの温もり脱げずくしゃみする
あやふやな基準で形見整理する
あやふやな返事が悩み深くする
宙ぶらりんの心を風に笑われる

注湖 芳恵 すみこ 柳歩 弘充 左余 久絵 千里 長吉 禮子 晋市 桂子 草庵 たくし 幸代 涼子 久枝 芳山 沁丘 畔 ちえこ とも子 聡美 寿代 美智子

私の名やがて忘れるときが来る
忘れまい書いた所はどこだつて
都合よくそこは忘れた事にする
糸とんぼ忘れた忘れて飛んでいく
西宮北口川柳会（兵庫）藤岡
秘密文書を無くした友が左遷とは
お値段で音違うらしバイオリン
めらめらに一線を引き冬を抱く
神様に愚痴を洩らしてから眠る
泣き泣きに秘密を洩らす形見分け
桃太郎味方の口へ吉備団子
よっぱどの味方でないと喋らない
健闘を称え握手の敵味方
杉花粉すぎれば逢うと言うメール
啓蟄に首引つ込める戻り寒
オープン戦心浮き立つ鉦太鼓
うれしいねまだ嫉妬する若さあり
ゴスペルに魂ゆれてゆらされて
札束の匂いに寄つてきた味方
百度石祈願の足音されまなし
めらめらと炎が僕をそそのかす
めらめらと煩惱ばかり春の乱
又隣り夫婦の茶碗投げる音
影武者も風も味方と見た誤算
当確の事務所味方の顔で呑む
山覆う炎に人の無力知る
洩れたつて困る秘密はない気楽

博子 青帆 民子 知恵子 武臣 利子 千賀子 わこ 早加永 比ろ志 勝弘 哲男 敏夫 キヨミ 淑子 章子 ひとみ 正和 奮水 忠直 基輔 武彦 毅 浩司 茂

たこ焼きで味方についた浪速っ子
私より美人味方につけておく
肩に手をかけてる写真みな燃やす
かくれんぼしやがんだままで生きられぬ
身の内の敵と味方がせめぎ合う
木洩れ日が森を不思議の国にする
大阪に春を呼び込むふれ太鼓
思いつき泣いてそして強くなり
頑張れば答をくれる坂に住む
いやなやつ味方に入れてはつとする
いねむりに見えるが実は考え中
娘の帰省愚痴が惚気か置いていき
夢ひとつ男の器から洩れる

岬川柳会(大阪) 八十田洞庵報

甘い汁吸った残りは秘書まかせ
大潮の打ち寄せる波大型魚
この寒さ地球温暖どこ行つた
好きな地に住まう幸せ竜の年
宣伝を信じてためす一度だけ
吠える風窓打つ雨もなれて寝る
集まればまだ元氣老い仲間
マニシヨにミニ雛飾似合つて
誇らしく冬至のカボチャ客を呼ぶ
ねじれた国会もつれをなおす策見え
赤目芋親子の絆しつかりと
節電で冷えた体を湯につける
少々の事は我慢で医者嫌い

宏造 美龍 千代 遼子 弘子 盛夫 朋月 玲子 求芽 利明 伯備 耕治 無限 寛史 清一 洋子 圭子 富美子 年子 禮三 富美 桜琴 覚庵 和香 貞夫

統計に出てるもろさの夫婦仲
真剣な女歯科医の目が迫る
ひな飾り酒と白髪姫と主
誘い水あつさりかわす片えくぼ

川柳大阪 山崎 珠生報

一〇〇越えた日野原医師と柴田トヨ
達者な内見栄も少しは混せて生き
春の音響き花粉に身構える
風紋をきれいに画く砂の音
正論をあつさり捻る多数決
老いてこそ五体満足だけで良い
捻り出す私の知恵もこれまでか
昇り降り歳のせいかなしんといわ
セシウムが忍び寄ります音もなく
カレンダーに徳利書いている達者
足音で貴男が分かるなんてウソ
正装へやらしい雨が急に降る
あの歳で女の尻を追う夫
そろそろと桜前線通り抜け
離れ住む母を氣遣う風の音
極秘はれ狸が尻尾つかまれる
長居する客の後ろで妻捻る
不幸鍵握つてる銭の音
やらしいな何度もおれいいないな
達者でね徳之島より渡り鳥
春の音近づくほどに走るベン
市長の口捻るときと泣くだろう

洞庵 茂平 悦子 和美 堅坊 万紗子 美花 一風 柳弘 照月 芳香 和紀 雄 一步 まつお 朝子 五月 功 美龍 司 いつふみ 義明 かよこ 珠生 善純 勝弘

一捻り色々あって夫婦道
静やかな朝に木魚の通り良さ
被災地に槌音響く春が来る
よく食べてよく働いた靴の音
大雪をそろそろ溶かす春の音

川柳塔すみよし(大阪) 岩崎 公誠報

しつかりと念押したのに逃げられた
石頭を納得させる手を模索
迷い道頼む生駒は雲の中
しつかりもいいたまには甘えたい
へそくりを隠したけれど場所わすれ
聞く耳を持たぬ親父は淋しそう
人生の苦楽も詰めた石頭
お下がりを含め今かいまと待っている
隠れてる素質引き出す名コーチ(奥)
長老の笑顔無欲にひかっている
何を言ってもまずはおしというオヤジ
押入れに隠れた遠い日の記憶
囁みあわぬままで金婚石頭
匿名の裏で隠れてる美談
しつかりと自分の言葉伝えよう
流れ読み進路しつかり舵を取る
生かされて確と見据える人の恩
妥協して欲しいものから手に入れる
カルチャーで青春の夢ときほぐし
格安の世界旅行は夢の中
石頭通す苦勞に肩の凝り

彦太 喜楽 鉄心 笑風 川童 公平 庸佑 昌紀 晴雄 志津子 直子 かりん 温子 五月 半銭 昭 太郎 ばっは 柳弘 芳香 公誠 のん子 哲矢 正太郎 順子 たかこ

はびきの市民川柳会（大阪）徳山みつこ報

隠しても好きと瞳が言うている
ひとことが欲しい息子がぐれた振り
百までは元気が欲しい今のまま
欲しいものの少なくなつて黄泉近い
白いもの黒いと言つて押し通す
しつかりとしているようでぬけている
愛のある言葉が欲しい差し向い
勲章は無いがしつかり生きてゆく
旗色を見て病院に隠れます
しつかりと前向き一歩あるきだす
半額のシール商魂隠れてる
欲しがらぬこれも修行の一つかな
キッチンに見え隠れする亡母の顔

賢子 裕之 美世子 定子 伸子 チエコ 萌 日の出 桃花 篤子 矢五 月 吉太郎 りつえ

宇宙の旅夢でなくなる日と思う
はやぶさの映画で宇宙多忙なり
そのうちにちよつと宇宙と旅靴
真つ暗い宇宙に青い星ひとつ
隣人は宇宙人かも変な人
まだバレてないけどボクは宇宙人
宇宙人姿を見せぬうちが華
きつと来る人の位置置空けて置き
傘寿ですごめん出席できません
針の筵出席悔やむ場違いと
この指にたかれ二次会出席者
出席のたびにあなたと握手する
代返と言う幽霊が居る授業

出席をします言いたいことがある
子に期待自分のことは棚に上げ
古ぼけた棚に思い出眠つてる
損になる話は棚に上げておく
背が縮み棚がだんだん高くなる
神棚はないが御礼は貼つてある
捨てられぬもつたないを棚に乗せ
お茶しましょ父ちゃん達の棚卸し
やわらかく中にあんこの桜餅
おいしくなれおいしくなれと蛸を茹で
口紅もピンクに染めて若返り
沈丁花すみでピンクの息を吐く
介護室ピンクの爪が咲きました
ピンク着てルンルン春の御堂筋

ダン吉 登志子 雄太 美代子 ヨシ枝 ちづる 悦子 高鷲 千鶴子 美喜 アヤ子 みつこ 喜久子 いさお

しんがりを行くわたくしに敵はない
幸運の女神自分の中にいる
へそくりがたつぷりあつて気が強い
余裕のない男ネクタイ曲がつてる
生活の余裕は妻とそば巡り
日記書き終えゆつくり添える一行詩
植木鉢植えたはずない芽が出てる
確実に加速している物忘れ
ちよつぱり拗ねて愛を試しているのです
食卓に春が一足先に来る
気のすむまで話聞いている日向ほこ
花便り心にゆとりはと咲く

房子 いわゑ 光久 昌紀 久仁雄 たもつ 加お里 美智代 扶美代 千代 美籠 希久子

サークル檸檬（大阪）松尾美智代報

余裕あるはずの歩幅が狭くなる
荒波をくぐつた自信目にゆとり
余裕などないが床には花活ける

義子 みつ子 楓楽

川柳塔きやらぼく（鳥取）大塚 恵子報

八十年君と会えたを一番に
はがされた暦私を追いたてる
手の鳴る方へ議員バッジの生き残り
牙え牙えと欠けゆく月に背を押され
空襲時にシャボン玉してた妹と
隠れ家は向う岸にも建ててある
母がまだ怖い間は母の子だ
ホカロンが我慢我慢とあたためる
木洩れ日を掻き集めては春を待つ
最強寒波家電製品売りに売れ

恵子 瑞枝 千代 未延子 鶴子 喜周 初枝

偶然に通つた車生死分け
偶然が重なり事故を免れた
偶然に出遭つてからの不整脈
偶然に病見つかる運の良さ
旅先で偶然友と再会す
いい事が偶然なのか春を連れ
偶然も若い男女は勘ぐられ
神様の気紛れもある赤い糸
思い出を着てる気がするベアルック
一張羅を着た日は空が高く見え
ナデシコも振袖着れば日本調

柳童 美智代 扶美代 信男 公子 契子 正子 春代 桂子 順子 長一

ほたる川柳同好会（大阪）水野 黒兔報

ありつたけ拵けて何着て出よう

勝

なるほどねずばり言われて気付くこと

純子

この歳でずばりと見えぬ自信なさ

康子

ずばり言え言え言ったでまた採める

幹治

母は子のずばり太陽また命

黒兎

言い切れば済む一言を口ごもる

久子

被災地は春が二の足踏んでいる

郁子

豊中もくせい川柳会 大阪 藤井 則彦報

憎むよりむしろ忘れる方がいい

寿美子

ひと言が足りぬばかりに取る不覚

庸佑

理屈屋にあえて人情論を説く

肇

一枚ずつキャベツを剥いて知る命

弘之

退職金あえて子等にはもらさない

俊宣

私を美人だと言う鏡買う

美津子

配膳に侘び寂そえる普茶料理

健二

波青く恋引きよせて遠ざけて

きらり

風海の日あの日語らない

歌留多

副作用ある新薬あえて飲んでみる

千恵子

三寒四温福島はまだフクシマで

幸雀

いい妻だがあえて言うなら喋りすぎ

玲子

青よりも少し大人の藍を着る

志津子

冒険はあえてしません土踏まず

比ろ志

残照の海に私を泳がせる

紀子

わたくしは仮面をつけて町に出る

夢

歳加え少しは丸くなったかな

堅坊

投げ込みのチラシほんまにもう要らん

菜々子

ぞうさんを歌うと泣けてくる絆

菜々子

近道はあえて描かずに子に渡す

美義

ボケぬようあえて多忙にする手帳

満子

どうすればちゃんと死ぬるかふと思う

則彦

菜種梅雨さなぎのままで夢をみる

巴子

命ある限り私は私です

千枝子

春だから一度若くなつてみる

見清

甘すぎる麩に塩をひとつまみ

美智代

起き上がる達磨の意思を信じたい

久子

ほつこりと情け加えて介護の手

隆

何もかもゼロにしてから又あした

千代

ふるさとに素直になれる私居る

玲子

私こそ私だけの私です

勲

人類が天の配剤狂わせる

求芽

ふくらんだ花芽に春が加速する

葉子

岩美川柳会(鳥取)

石谷美恵子報

いつからか春の七草そらで言う

圭一郎

草刈り機急かせています影法師

重忠

救急車タクシーがわりしないうでよ

はるお

タクシーが知つて夜の裏表

一瑠

羽化の日を迎えニッコリ受験生

茶子

これからが本番やとと八十歳

一京

肩先にやとと止まった青い鳥

公子

七十五日やとと安心して眠る

節子

喜寿迎え三十年のローン済む

幸安

ごめんねとやとと一言口にする

一粹

本流に乗って笹舟あわてだす

忠良

感動の本を一気に夜が白み

蟹郎

絵本読む母さんの声子守唄

たぬ

本腰で来る日来る日も雪をかく

菖子

本などで教えられるか叩き上げ

清帆

どの本も命が宿り捨てかねる

昭弘

本心をたとえばなしで逃げておく

美恵子

川柳ねやがわ(大阪) 籠島 恵子報

世の中の進歩に少し置いとかれ

柳弘

家中がひっくり返る妻の風邪

弘風

つまづきをチャンスに変えるから平気

修

母さんの題なら直ぐに二三枚

かすみ

3・11復興遅延ともどかしい

ルイ子

シヤガールは絵もタイトルも個性的

さち子

穏やかな顔つき苦勞した器

朝子

直線に生きて悔い無し無位無官

仁

タイトルは絆ガンバロウ日本

賢子

肩書きを外し自分を取り戻す

仁清

残り火を互いに燃やす熱れた恋

忠央

この顔に死相が出てるももうすぐだ

秀雄

ハヤブサという肩書きで飛ぶ宇宙

祥昭

今からでもやる気があれば遅くない

洋

子の相に晩期大成望む親

鈍甲

タイトルは家族の輪にもある絆

麗

二の足を踏んでチャンスに出遅れる

一風

二番手に走りタイトル狙つてる

三郎

ダイエツとするなお前は今が良い

三郎

喜怒哀楽飛ばしケータイ街をゆく

薫

出遅れが作戦だったと後で知る

博泉

誰にでも良いこと見つけ褒める人

終章の顔が如來の顔になる

男には女の都合わからない

毒のある女の魅力に染まってる

挨拶はたかがされどの大切さ

天災は挨拶ぬきでやって来る

出遅れぬために長蛇の列にいる

六甲川柳会(兵庫)

伊勢田

毅報

梅咲いて春の足音やつと聞く

あつからん腹には何もないお人

腹帯にそつと手を添え待つ命

ママの腹一つで決まるお小遣い

一理ある妻の助言に腹が立つ

色白の別嬪やけど腹黒い

腹いっぱい食べては悔やむバイキング

腹割って話せる友がいる至福

着ぶくれと錯覚してた二段腹

病んでみて夫の支え重く知る

補聴器が重たい空気聞き分ける

気持変え重い心を軽くする

常夜燈重い心に灯が沁みる

老いた背が子の心配をおろせない

人が見る夢の重みに差異は無い

裁判員重さを量る罪と罰

白菜に旨味を増してゆく根雪

あきれてる顔を横目にマイペース

読めんのを視力のせいにする漢字

騙される人を笑って騙された

美江

寿子

弘一

亜成

銀杏

三楽

恵子

千賀子

美恵子

純

寿朗

武臣

繁義

妙子

千代子

武彦

康子

夏子

遼子

和郎

敏夫

義博

浩司

茂雄

保雄

明日があるバブル育ちがバブル追う

あきれてる半端ではない脂肪酸

二代目がカジノですつた五十億

女生徒が車内で男子呼び捨てに

独り言大もオウムも聞きあきた

ありがとう五文字の響き青い空

お裾分け釘煮で増えるお友達

立つ位置は美人の隣そつと避け

お役済み衛星むなし宇宙ゴミ

春霞悲しい恋にベールかけ

腐すより褒めれば動く岩もある

内定の重さを胸に里帰り

オリオンパス社内のガンを書せない

くずし字で自分をだまし他人をも

半眼の仏すべてを見ておわす

川柳藤井寺(大阪)

鴨谷瑠美子報

素うどんなに誘える人を友とする

天ぶらは邪道と素うどんなの誇り

うどんなこそで夫婦の危機になりました

天ぶらうどんな食べて別れたのが最後

病み上がりウドンは嘔まず胃に優し

天ぶらのうどんな食べたがよくとちる

うどんなの味関西風がやっぱイイ

うどんな好き好み味にも一言

春めいて鍋焼さうどんなひまを出す

うどんな屋で家族の祝う新学期

座敷わらしいい百足が出た宿屋

据え膳が何より嬉し温泉地

勝子

照子

盛夫

忠貞

弘

勤

政一

和子

基輔

弘子

利子

洋一

博史

いね

楓

シマ子

みつこ

昌子

扶美代

紀雄

一步

雄太

彦弘

シルク

瑠美子

光男

ちづる

金波銀波眠るに惜しい海の家

瀬戸の宿おどり食いして舌つづみ

母の日へ贈ることしの宿選ぶ

小雪舞いムードで酔わすランプ宿

文豪の愛した宿にある残照

大丈夫でないから困る神の国

放し飼いでいます犬も宿六も

君がいう大丈夫なら大丈夫

大丈夫鬼より怖い母がいる

徘徊の老母の背中にある名札

大丈夫かな脳の中味を見てみたい

大丈夫神はあんたを見捨てない

油虫と格闘してる妻が居る

大丈夫問うて問われて丸い仲

大丈夫命をつなぐ酒がある

晩酌が旨いまだまだ大丈夫

川柳同友会(鳥取)吉田

陽子報

賑やかな正月だったまた二人

貯えも負債もなく保つ日々

バスワード母の数字にしてしまう

生きて行く左右の鍵を間違える

鍋の蓋コトコト歌い幸句う

殊更に絆がほしい老年期

雑食系どなたにだつて合わせます

高邁な論におちゃらかはいをする

震災のがれきどつさり何処へ行く

自動ドア両手に荷物ありがとう

登志子

トヨ子

みよ子

絹枝

あかり

美代子

六点

清之

龍一

ヨシ枝

雅枝

悦子

喜代子

婦美枝

榮

いさお

久江

安子

美江

一聴

葵

けい子

陽子

寒之

章子

温子

物言わぬ足が痛みでダメを出す
人住まぬ家に落ち葉の大合唱
一献のお屠蘇が絆確かめる
古稀迎えこれから恋をするつもり
凍結の峠下って汗が引く
名前だけ可愛らしくて感謝する
迷信と分かっている日を選ぶ
堪忍袋フリーサイズに改める
草臥の病名も無く風邪と書く
犬が来て我が家の順位保てない
流感でほくそ笑む医者寝込む医者
絵手紙に早ばや春の音を聞く
父の靴ほとんど汗とまわり道
幸いを願い黄色い袋買う
まっ白い雪に昨日を悔いている
話し合いすればするほど凍りつく
デスマスク幸いですと告げている
片りんが取れて普通の雑魚になる

川柳花の輪(大阪)

岡本

薫報

久 司
みどり
美恵子
信子
三郎
みち子
敦子
嘉子
慶一
直司
正雄
華蓮
菜美
和代
一 眸
はるお
遊子
公弘

マニフェストせめて一つは守つてよ
我が息子せめて私を乗り越えろ
何もしてやれぬがせめて愚痴を聞く
はればれと胸ときめかす夢二の絵
断捨離の手本はればれ山頭火
川柳さんだ(兵庫) 堀
這うでも来いと泣かせるメル来る
春一番両目閉じたり開いたり
スポンジになつてあげます濡れるまで
芸一つ持たず暖簾の色となる
流れ星地球にウインクしているの
宴会を白けさせてる芸達者
しあわせにするを信じた落し穴
定位位置に妻の笑顔が置いてある
呑み助の犬は珍味で育てられ
原発に泣き雪に攻められ小春待つ
お詫びにと椿一輪さしあげる
珍しい物は大阪だけに流行る
母さんと言う声だけにだまされて
桜咲くメールに思わず嬉し泣き
晴れなのに車洗うと雨になる
甲子園数多の涙吸つた土
人生を見事に演じ兄は近く
ふところに涙の跡を隠し持つ
リモコンで動くワイフを作りたい
しつければとメンチ切る犬芸達者
孤独死のニュースが続く雪しきり

昭好
勇太朗
泰子
薫
敬子
哲男
章子
忠
キヨミ
順子
朋月
武彦
光久
茂
輝美
真由
淑子
ひとみ
雅司
裕美
雄太郎
喜久子
茂山
見
ちあき
美和子

珍しい顔の見舞いで知る病
吸殻のように眠っているわたし
ウインクがころり男のハート射る
ウインクで言葉通じる深い仲
八百長はもうやりませんふれ太鼓
初七日を終えて親父がやつと泣く
シオサトウ大きな文字で書いてある

正和報

岸和田川柳会(大阪) 米富

淳風報

ジャズなのにうつ手拍子は演歌風
余生なお欲の滾りをもてあます
滾るもの心に秘めて時を待つ
震災の議事録ないで嘘でしょう
メリケン粉吞んで効いたと好い加減
血が滾りイエローカードばかり取る
嘘ひとつ抱いたままで行く地獄
見切られず未だ絞り出すハミガキ粉
百薬と百毒の長呑み合わせ
卒業というのに未だ職がない
子沢山夢滾らせる玩具箱
破目外したいなとメトロノームいう
恩未だ返せぬままに師の別れ
方便の嘘が悲しい末期ガン
プロ中のプロ太鼓技本尊前
血が滾る事もなくなり黄昏れる
滾るものあつてひとりの手を上げる
さつき食べ飯まだですかボケ始め
辛うじて滾る心を押えてる

遠野
菜々子
美籠
宣子
祐康
好文
正和
昭
蛙城
いさお
和美
香代
清
玄也
幸子
笑司
淳風
仁緑
愿
隆昭
武志
龍子
珠子
ダン吉
忠太
檣代

癒される水琴窟の雅の音

出張と言ってホテルで羽根伸ばす

みちのくに静かに滾る憤り

未だ続く話に犬があくびする

家事疲れタングの曲に酔ってみる

われ未だ欲の沼から抜けず老い

心配を掛けまいと嘘ひとつつく

チャンス今滾る思いの紅を引く

煮え滾る湯で豪雪を溶かしたい

突然の訃報噓だと思いたい

川柳塔さかい(大阪) 村上玄也報

愿

深雪

ダン吉

つづや

敏治

明子

朋月

健吾

のん子

俣子

五月

世紀子

月子

ばっは

像山

紀雄

彦弘

英夫

(石)ひろ子

(仲)弘子

洋枝

みつ江

宗博

義泰

身

文

に

合

った

歩

幅

で

転

ば

ない

身

の

丈

に

合

った

身

の

丈

に

合

った

歩

幅

で

転

ば

ない

身

の

丈

に

合

った

歩

幅

で

転

ば

ない

身

の

好

唯教

八千代

山彦

千代

日の出

進

としお

さくら

扶美代

篤子

清

誠一

和夫

時雄

玄也

みつこ

天笑

翠洋会(大阪)

佐々木満作報

輝

いて

いる

と

影

ま

マイク馴

れてはる

拍手だけしとく

千

リ

モ

コ

ン

の

答

弁

マイク

あ

き

れて

る

カ

ラ

オ

ケ

の

マイク

持

た

せ

ば

千

蕉

二

浩

みつ

子

志

華

子

桃

花

満

作

真

澄

楓

日

の

出

す

み

彦

滋

公

平

恭

言い訳し自分が小さくなってくる
吠えた分シッペ返しがつくなる
慟哭のまま三陸の一周忌
もう他人今更言い訳ならべても

賢子 克己 哲矢 仁

まだまだと口を開けて募金箱
火炎舞う煩悩断ち切る二月堂
うす塩にも馴れてしみじみ妻の愛
言い訳が寿司折り下げて千鳥足

隆男 縣笹 直樹 弘風

目の鱗落としてくれた一冊だ
荒波の咆哮を聞く拉致の海
まどろみが私を包む昼下がりに
居酒屋の国会しのぐい議論

いさお 満作 一步 郁夫

天に吠え地に吠え俺を取り戻す
初披露スカイツリーの雪帽子
盛り場に繁盛亭の心意気
塩まんじゅう新茶も入れてご命日

柳弘 ばっは 宏 美智子

地元場所意気込みつけて塩を撒く
言い訳はしない信念揺らぐから
言い訳はしない答えは丸坊主
梅一輪咲いてピンチを切り抜ける

勝弘 昭 倫子 榮子

ふるさとで塩辛とんぼに迎えられ
悟りにはまだまだ遠くくじを買う
白酒似のマッコリ呑む桃節句
蛸梅へ心ほどいて風になる

あさ子 素雲鶴 千恵子 杵香

おでん煮るまだまだ味の染みるまで
言い訳をせぬと決めたら一直線
紅梅がぼつと開いて娘が嫁ぐ
ケータイで吠えてメールで詫びている

志華子 和夫 集一

生き甲斐を抱いて生涯向い風

集一

言い訳をいわない花も実を付ける
まだいける等身大の鏡見る

正子 義昭

大山滝句座（鳥取）

新家 完司 報

見栄という粗末なものを持って余す
孤独死の条件みんな持つている
風邪の神やはり弱者にからみつく
ダイエツト理解をしない腹の虫

芳光 紀の治 照彦 玲子

太い芯トイレの紙はすぐに減る
雪が雨に変わった日からよく眠れ
専門のカミシモ脱げばオトリーチャン
懐が寒いと愚痴が多くなる

けいこ 風露 麦青 大鯨

一応はオレの意見も聞かなくなる
春はもう豪華なものを抱いている
原子力おやめなさいと天の声
愚かさや隠しきれずに生きている

美ツ千 石花菜 幸子 重忠

怖がらせないように押す車椅子
まだ愚かでないぞと首を振る愚か
愚か者帰宅するなりバタンキュー
松葉杖すぐにトイレへ走れない

久枝 克枝 仁美 すみゑ

専門知識なくてもなれる政治職
元気です直ぐ腹が減る腹が立つ

完司

飲み会は漬物出たらお開きに
優しさが栄養ですと言う介護
区長公選止めて公募に変えました
あの世から空席なしのサインです

勝弘 郁夫 正修 修

ああそうかあれは演技であったのか満作

満作

北川柳会（大阪）（前月分）近藤 正報

正報

本番へ妻の心臓借りていく
悪口も栄養にして生きている
本番にいつもドジ踏むわたしです
厄よけの巻き鮎妻と半分こ

弘風 一步 たもつ いさお

混沌と勇んで来れば足湯なり
あつさりと白旗あげてからのうつ
毎日が本番という雪囲い
保険金まさかこんなに生きるとは

葉子 宏子 叡子 杵香

手鏡で怒りの顔を静めてる
培った苦労は花も実もつける
なるほどとプロの料理に舌づつみ
血筋ですなるほど誰も出せせず

志華子 あさ子 榮子 克己

目配せでトイレに立ったふたり消え
恋もせず栄養ばかり食べメタボ
花蕾栄養たつぷり春を待つ
味噌汁が旨いなるほど母が来た

義昭 隆男 縣笹 義昭

なるほどと解つてくれた父も逝き
なるほどと連発されてあほらしい
人情を栄養にして絆の和
活力の栄養源は恋だろ

倫子 宏 朝子 柳弘

世話やきで口うるさくてお人好し
試供養はんまに効いて風が消え
栄養を取つたら余計喋り出す
なるほどと思わない手もする握手

素雲鶴 典子 正子 堅坊

ウエディング角も隠しているヴェール
日向はこ愛を育てているのです
合図には同調しない小意見

賢子 集一 美智子

句 会 名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
岸 和 田 川 柳 会	19日(土)13時30分締切 再会・漂う・激しい・グルメ	岸和田市立福祉総合センター 〒596-0076 岸和田市野田町2丁目13-19 中岡香代
川 柳 塔 みちのく	19日(土)17時締切 犬・あべこべ・違反	弘前市桶屋町4-7 居酒屋とんぼ1階「川柳道場」 〒036-0161 平川市杉館宮元53-1 小寺花峯
川 柳 ねやがわ	20日(日)14時締切 坂道・道場・油断・自由吟	寝屋川市立総合センター4F 第1研修室 寝屋川市駅からバス 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉
川 柳 藤 井 寺	20日(日)14時締切 庭・舞台・席題は共選	藤井寺市立生涯学習センター・シュラホール3F 近鉄南大阪線藤井寺下車南徒歩10分 〒583-0023 藤井寺市さくら町2-2-201 高田美代子
岬川柳会	20日(日)14時締切 姿勢・くつろぐ・相性	淡輪17区集会所 南海みさき公園駅・徒歩6分 〒599-0301 大阪府泉南郡岬町淡輪3592 八十田洞庵
豊 中 もくせい 川 柳 会	21日(月)13時40分締切 取る・約束・わずか・自由吟	豊中市中央公民館4F 阪急曽根駅南東・徒歩5分 〒561-0801 豊中市曽根西町2-8-4 江見見清
川柳クラブ わたの花	25日(金) 吟 行 会 百合・鯉・枕・自由吟	八尾市生涯学習センター 〒581-0012 八尾市小阪合町1-4-8 西川義明
川 柳 塔 すみよし	26日(土)14時15分締切 穴・座る・のろのろ	住吉区民センター 南海高野線沢之町下車3分 〒558-0054 大阪市住吉区塚塚山東2-4-9 古今堂蕉子
和 歌 山 三 幸 会 川 柳	26日(土)12時30分開場 飼う・屋根・大人	和歌山商工会議所4階 第2会議室 〒640-8570 和歌山市南中間町20 ニュース和歌山編集部「和歌山三幸川柳会」
はびきの 市 民 会 川 柳 会	27日(日)14時締切 運動会・淋しい・ポケット 残る	綾南の森 公民館 近鉄高鷲駅北東・徒歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷲8-31-11 塩満 敏
川 柳 ふうもん 吟 社	27日(日)13時開場 号令・ガス欠・凄い	開発ビル2F ホール 〒680-0872 鳥取市宮長205-45 萩原深雪
京 都 塔 の 会	27日(日) 吟 行 論・かさむ・同じ	行く先 勝龍寺城跡公園 集 合 10時30分 JR長岡京駅 〒600-8428 京都市下京区諏訪町通松原下ル 弁財天町328-202 都倉求芽
南 大 阪 川 柳 会	28日(月)18時から 名前・眠い・やめる・雑詠	大阪市立住まい情報センター 5F 研修室 地下鉄谷町線・堺筋線天神橋6丁目駅③号出口 〒540-0004 大阪府中央区玉造1-16-13-304 前たもつ
松 露 川 柳 会	28日(月)19時30分締切 鳥・貯金・雑詠	溝口五区集会所 〒689-4201 鳥取県西伯郡伯耆町溝口757-3 小西雄々

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所（06-6779-3490）へご連絡ください。

5 月 各 地 句 会 案 内

(開催日順)

句 会 名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
川 柳 塔 な ら	2 日(水)13時開場 匂う・柳・ポーズ	奈良市立中部公民館4F 近鉄奈良駅④番出口・徒歩5分 〒634-0812 橿原市今井町2-1-24-901 安土理恵
富 柳 会	5 日(土)14時締切 歩・仕掛け・自由吟	富田林市中央公民館 近鉄南大阪線富田林駅下車南へ200m 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 TEL 0721-25-0603 池 森子
倉 吉 川 柳 会	5 日(土)14時締切 するり・わくわく・密かに	倉吉市 明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡北栄町由良宿2072-17 谷口次男
川 柳 あまがさき	8 日(火)14時締切 気長・好み・おいしい・自由吟	尼崎女性センター テレビエ 阪急武庫之荘駅南へ200m 〒661-0953 尼崎市東園田町2-45-8 山田耕治
ほ たる 川 柳 同 好 会	8 日(火)13時30分締切 塔・競う・折り句(た・う・え)	豊中市立蛭池公民館 阪急・モノレール 蛭池駅駅前ビル5F 〒561-0813 豊中市小曾根2-4-1 水野黒兎
あかつき 川 柳 会	11日(金)14時締切 疲れる・鳥・空気・時事吟	大阪保育運動センター(新谷町第1ビル2階) 地下鉄「谷町6丁目」駅③番出口から3分・道路向い側 〒599-0232 阪南市箱作1586-14-102 森村美花
川 柳 塔 さ か い	12日(土)13時から どっちみち・ルーペ 折句(モノコ)	堺市総合福祉会館 〒590-0016 堺市堺区中田出井町3-4-31 村上玄也
城 北 川 柳 会	12日(土)13時開場 餌・うやむや・袋・自由吟	旭区老人福祉センター3F 地下鉄千林大宮③番出口 〒535-0002 大阪市旭区大宮4-10-18 神夏慶典子
川柳大阪	12日(土)14時締切 まだまだ・石・完璧	地下鉄・長堀鶴見緑地線 京橋駅「研修室」 〒533-0004 大阪市東淀川区小松1-18-24-14 長井善純
川 柳 塔 ま つ え	12日(土)13時45分締切 緑・凶器・うぬぼれ・ぶっつり	松江市雑賀町 雑賀公民館 〒690-0056 松江市雑賀町366 錦織禮子
川 柳 塔 打 吹	12日(土)13時締切 鳥・過去・ダメージ	倉吉市上瀬町9 上瀬公民館 〒682-0034 倉吉市大原637-3 牧野芳光
八尾市民 川 柳 会	13日(日)13時30分締切 記念・血・吸う・雑詠	八尾神社内 西郷会館3F 近鉄八尾駅西口徒歩5分 〒581-0831 八尾市山本町北5-9-3 土谷耀一
川 柳 塔 わかやま 吟 社	13日(日)14時10分締切 兼 題 = 風・くぐる・非常口 課題吟 = カタカナ	和歌山ビッグ愛 〒640-8319 和歌山市手平2-1-2 兼 題 和歌山市木ノ本890-12 宮口克子 課題吟 堺市浜寺諏訪森町東2-208-5 柴原道夫
西宮北口 川 柳 会	14日(月)14時締切 高齢化・遊ぶ・ゼロ・自由吟	西宮市立中央公民館 阪急西宮北口駅南出口歩3分 プレラにしのみや4F 〒662-0062 西宮市木津山町3-15 亀岡哲子
川 柳 さ ん だ	15日(火)13時から 麦・カタログ・叱る こっそり・自由吟	三田市中央公民館 〒669-1546 三田市弥生が丘5-2-4 堀 正和

柳界展望

★四国新聞社読者文芸柳壇の部年間優秀賞

光るものはずし介護の手に戻る 川崎ひかり

★朝日新聞社「ともしび川柳」入選者追加

車椅子介護の犬と見る明かり 澤井 敏治

人並みの灯りが見えるまで歩く 富田 保子

★両川無限氏（理事・鳥取市）は、J A鳥取「ハローいなば」川柳欄選者

及び「鳥取医療生協新聞」川柳欄選者を担当。また

第36回薬誌上大会で句碑を獲得。作品は次の通り。

大空と遊んでいじめなど知らぬ

★「川柳同友会みらい」第一回竹林賞は次の通り。

田中一眸さん（鳥取県）

良い事はあつたか箸がよくしゃべる 他4句

★のぞみ川柳会一周年記念句会は2月28日開催。同人の天位次の通り。

船降りてからが私の人生よ 榎本 舞夢

満月へ矢立の櫂で漕ぎ出そう 西口いわゑ

★いたみ川柳会15周年及び合同句集発刊記念大会は3月19日開催。同人の天位次の通り。

ひこばえがきつと明日を笑らせる 山口光久

朝の虹 楽しいことがきつとある 奥田みつ子

☆山口光久氏（常任理事・神戸市）は、朝日カルチャーセンター通信講座「川柳入門」講師を、

奥田みつ子さんより引継いだ。（24年4月から）

☆永田俊子さん（同人・熊本市）の白寿（100歳）を祝して、熊本川柳会では3月24日お祝いの会を催した。

▽柳界動向△

◇西宮ローズ川柳会は、本年一月より会長を、山

本義子さんから亀岡哲子さんに交代。

▼計 報▲

■乙倉武史氏（同人・高槻市）は2月29日逝去。享年94歳。

▽出 版△

○松山芳生氏（同人・青森県）は川柳句集『夢』出版。A5判136頁、序文は高瀬霜石氏。

▽新誌友紹介△

河内長野市 藤塚 克三 紹介者 坂上 淳司

枚方市 松原 保 紹介者 新家 完司

竹原市 國兼千代美 紹介者 小島 蘭幸

岡山市 前田恵美子 紹介者 小島 蘭幸

大坂府 上西 洋治 紹介者 村上 玄也

宝塚市 生駒 利明 紹介者

新 同 人 紹 介

高橋洋子
たかはし しょうこ
— 五楽庵・姦・慕情推薦 —

読売新聞「編集手帳」より（3月10日朝刊）

川柳作家の麻生路郎に忘れがたい句がある。

〈湯ざめするまでお前と話を夢に来よ〉。早世した小学生の長男に語りかけた一周忌の作

という◆夢のなかで話そうね……。この上なく悲しい会話のはずだが、至福の時間を待つよ

うな恍惚感もほのかに感じられて、いっそう深く読む者の胸にしみる。子が父に語りかけ

る場合も、こころの哀切な弾みは同じであるらしい（後略）

紹介者 奥田みつ子

▽お詫びして訂正△

4月号P68下段20行目 真の友ホンマの妻は言わ

ん仲↓ホンマの事は、P104下段20行目、寄せ書

きに青春がある宇宙↓小宇宙。

井笠川柳会 第13回 笠岡大会

と き 5月26日(土) 9時30分開場

11時30分締切

ところ 笠岡市保健センター
(ギャラクシーホール)

事前投句 「色」 2句

長島敏子・恒弘衛山・増田敏夫
三氏共選

投句料 1000円 4月末締切

宿題 各題2句

「奥」 平山 繁夫 選
「乱」 西原 知里 選
「遣」 小島 蘭幸 選
「誤」 久本にい地 選

特別課題 当日発表 高木 勇三 選

会費 1500円 発表誌呈

主催 井笠川柳会

創立55周年

第23回 時の川柳交歓川柳大会

日時 5月13日(日) 10時30分開場

会場 兵庫県民会館9階ホール
神戸市中央区山手通4-16-3
TEL.078-321-2131

会費 2000円 (記念品・発表誌呈)
兼題 各題2句 席題なし、欠席投句拝辞

「銀」 板野 美子 選
「仕事」 菱木 誠 選
「日記」 大家 風太 選
「辿る」 赤松ますみ 選
「帽子」 小島 蘭幸 選
「力」 赤井 花城 選
「雑詠」 平山 繁夫 選

特別課題 1句
「好き」 北村 紅絵 選

締切 12時
懇親宴 5000円 当日受付

主催 時の川柳社

大山滝句座会報150号&「大山滝(3)」発刊 記念誌上川柳大会

宿題と選者 (各題2句・選者4名にて共選)

「大きい」 森 山 盛 桜 倉 益 一 瑠

竹 治 ちかし 石 橋 芳 山

「食べる」 藤 原 鬼 桜 上 田 宣 子

門 脇 かずお 熱 田 熊 四 郎

「自由吟」 金 築 雨 学 長 谷 川 博 子

但見石 花 菜 牧 野 芳 光

☆投句方法 規定用紙はありません。便箋大の紙に各題2句、郵便番号、住所、氏名記入。

共選ですが当方にて無記名清記致しますので、記入は各題2句で結構です。

1000円(切手不可)

☆投句料 発表誌と「大山滝(3)」特B6判210頁予定 1冊呈。

☆星 賞 各選者の特選句と準特選句に賞品呈。

☆投句締切 平成24年6月20日(水) 必着。

☆投句先 〒689-2303

鳥取県東伯郡琴浦町徳万597 新家 完司

☆主 催 「大山滝句座」

TEL 0858-5212414
FAX 0858-5212449

編集後記

★眼鏡にも青葉映して恋
楽し 薫風

★第一回春の川柳塔まつり誌上大会の結果が発表された。北海道から宮崎まで多くの川柳を愛する方々にご投句を頂き、心からお礼申し上げます。

★今月号は通常の誌面作成と誌上大会の編集が重なり、五人の編集部員は大童であった。誌上大会の作品整理には理事長はじめ、同人・誌友の方々のサポートを得たことを感謝したい。

★宇都宮市でヘルパーさんの介助を受けながら、一人暮らしをされている百歳の詩人・柴田トヨさんの詩集『くじけないで』と『百歳』の二冊は二百万部を超すベストセラーと聞く。

★トヨさんは九十歳から

詩作を始めたという。飾らない小さな眩きが集まったとき、言葉は力を持ち、読者の胸を大きく熱く揺さぶる。

★川柳塔同人・熊本市在住の永田俊子さんは大正元年十一月十日生まれ。今年数えて百歳を迎えた。川柳を始められたのは昭和二十八年。実に六十年近くを川柳に親しまれ、句集『鶴の瞑想』も上梓されている。

★現在所属の熊本川柳会では、去る三月二十四日お祝いの会を設けられた。長寿高齢化の時代、八十歳九十歳の川柳人はまだまだヒヨコと呼ばれるかも知れない。

★百歳の詩人、川柳人は限りなく大きな勇氣と希望を与えてくれる。私たちも健康で、真摯に川柳に向き合いたい。

★ねえ不幸だなんて／溜息をつかないで／陽射し

ひとこと

ははあん そつかあ

川柳ばかりか短歌も俳句も、それぞれの結社の月刊誌を購読しているほくだが、ほんとと読まない。会費のことをおもうとものつたない話だが、計算は苦手なので、考えないことにしている。

本が届くと、自分の投稿が何ページにあるか、どの作品が採用されたかを確認し、あと仲間の数人の作品を拾うだけだ。

本棚がいっぱいになって、一冊資

源ゴミに回そうと、去年の「川柳塔」

を少し丁寧に読んでみて、そうかあとわかったことがある。これまでぼくは題詠しか作らなかったが、諸先輩の作品は、ほんとと自由吟のようだ。日常生活の場で、今起こっている現実をそのまま詠むのではなく、そこを離れて、それに触発され、ふっと自分が遊ぶ空想だったり、回想の世界が、即川柳なのだ。そうかあ、こうやって作るのかあ……

(成田 公一)

そよ風は／えこひいきし

ない／夢は平等に／見られるのよ／これはトヨさんの詩「くじけないで」

★「人生をおる布地は夢と同じである」同じ夢でもこちらは、シェイクスピア。私がいま一番気に入っている言葉。(朱)

□二月本社句会の兼題「鏝」の入選句には、「鏝」と「鏝」があった。辞書では鏝は俗字で、正字は

錯だった。正字で入選さ

れた方には申し訳ないが、結果として鏝でま

めさせてもらった。□遅まきながら時代物作家佐伯泰英の「吉原裏同心」に嵌まつてる。只今

十二巻目、主人公は吉原の用心棒だが、ときおり

吉原の柳多留を紹介してくるので、それがまた

楽しいのである。□以前、朝日新聞「歌壇」の消えた歌人について

触れたが、もう一人ア

メリカで服役中のベテラン歌人であった郷隼人が

二〇一一年四月の入選句を最後に消えている。何かあったのだろうか。今

「歌壇」の人気者は富山の小学生、松田梨子・わか

の姉妹である。最近の入選句を一首紹介する。

おかあさんはじめてつくったいかなごはしよ

うががからくてわたしはきらい

わこ

(勝)

川柳塔(同人)・水煙抄(誌友)投句用紙

種目「

「発表(7月号)地名

都道府県
市町村
姓
雅号

きりとりせん

◎8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。

投句先 〒543-0052 大阪市天王寺区大道1丁目14番17号 花野ビル201

檸檬抄投句用紙

「調理器具」(5月15日締切)

7月号発表

池 森子 選 — 共選 — 福士 慕情 選

B

A

B

A

地名

市都
道府
姓雅号

地名

市都
道府
姓雅号

切らないで下さい

左右に同じ句を書いて下さい

川柳塔誌新規購読申込書

年 月 日

氏名	住所	電話	紹介者	☐ ☐
	〒 —	 		年 年
	月から半年 月から一年 5000円 9800円 } 該当の方に○をつけて下さい			

〒543-0052

大阪市天王寺区大道1丁目14番17号 花野ビル201
川柳塔社 (電話 06-6779-3490)

振替 00980141298479

◎この用紙は新規購読申し込みのみにご使用下さい

個人用

暑中見舞広告 原稿台紙

料金は払い込み用紙をご利用下さい。

1/9頁 1/6頁 1/3頁 2/3頁 1/2頁 1頁

(希望の大きさを○で囲んでください。)

原稿を貼布される方は、
この位置に貼り付けて下さい

電 話	住 所	姓・雅号
()	〒	
()		

川柳など掲載希望事項

送付先

〒543-0052

大阪市天王寺区大道1丁目14番17号

花野ビル201

川柳塔社

作品募集

7月号発表 (5月15日締切)

川柳塔 (8句)
水煙抄 (8句)
愛染帖 (3句)
檸檬抄 (調理器具) (2句)
一路集 (3句)
初歩教室

「荷物」
「あやうい」
「ボンボン」
「ブレンド」 (3句)

小島蘭幸選
川上大輪選
新家司選
福慕情共選
池森子選
福士森子選
新家司選
川上大輪選
水煙抄 (8句)
愛染帖 (3句)
檸檬抄 (調理器具) (2句)
一路集 (3句)
初歩教室

8月号

檸檬抄 「ダイナミック」
一路集 「うねる」「雲」「なるほど」
初歩教室 「抜く」

本社5月句会

とき 5月7日(月) 13時開場・14時締切
— 開場時間、締切時間を変更しています。ご注意ください。—
ところ アウィーナ大阪 4階 金剛
おはなし 「続川柳いろはカルタ」
兼題 「脇」「ドラマ」「奇跡」「内幕」「惚れる」
会費 1000円
投句料 500円 (切手可)

三宅保州選
河内満作選
佐々木満作選
渡辺富子選
古久保和子選
新家司選
小島蘭幸選

本社6月句会
7日(木) 午後1時から
兼題 「例」「すごい」「単純」「引き金」「染める」

第30年度 夜市川柳募集

最終回 「極」 小島蘭幸選
ハガキに3句 5月20日締切
投句先 〒593-8305 堺市西区堀上緑町2-16-3
河内天笑方 川柳塔さかい

定価 八百円 (送料92円)
半年分 五千円 (送料共)
一年分 九千八百円 (同)

二〇一二年(平成二十四年)五月一日発行
発行人 小島和幸
編集人 木本朱夏
印刷所 美研アート
〒543-0052
大阪市天王寺区大道一丁目一四一七
花野ビル201号室
発行所 川柳塔社
電話 〇六六七九一三四九〇番
振替 〇〇九八〇一四二九八四七九番

「川柳塔」への投句について

- (1) 川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友(誌代半年分以上前納の定期購読者)に限り、本誌綴込みの投句用紙を使用してください。
 - (2) 愛染帖・檸檬抄・一路集への投句は、同人・誌友に限ります。初歩教室は誌友のみとします。愛染帖・一路集・初歩教室は川柳塔柳箋(本社事務所取り扱い)、檸檬抄は本紙綴込みの投句用紙を使用してください。
 - (3) 各欄への投句は、必ず氏名と住所(県・市名)を明記してください。
 - (4) 各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。ファックスでの投句は御遠慮下さい。
- 川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から16時までにお願いたします。

杵つき製法の「すりごま」 オニザキの

つぎごま



長い間親しまれてきた
オニザキの「すりごま」は、
名称を変更し、パッケージ
を一新いたしました。

オニザキのすりごまは、
「元々すり鉢ですったゴマ
ではなく、杵と臼を使った
杵つき製法で出来た「すり
ごま」です。

今までと変わらぬ、風味
豊かな味わいをご堪能く
ださい。



株式会社 オニザキコーポレーション
〒862-0951 熊本市上水前寺1-6-41 OCOビルディング

TEL 0120-30-5050

信頼され、社会に役立つ製品を作る

高級封筒専門メーカー



コーキ封筒株式会社

本社 富田林市若松町東3丁目7番8号 〒584-0023
TEL 0721-25-7210 FAX 0721-25-9484

東京営業所 東京都中央区日本橋本石町4丁目5番8号 〒103-0021
(日本橋川村ビル4F)

TEL 03-5255-5158 FAX 03-5255-5159

<http://www.koki-envelope.com>